
Sand Land Story ～砂に埋もれし戦士の記憶～

ゲーメアー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S a n d L a n d S t o r y 　　砂に埋もれし戦士の記憶

【Nコード】

N 8 6 6 9 X

【作者名】

グーメアー

【あらすじ】

世界を巡る旅を続けていた青年、シロヤと相棒のクロト。一人と一頭が最後に立ち寄った国、バスナダ国。そこでシロヤは、一人の女性を助けた。その女性と出会ったシロヤの運命は、大きく激変することとなるのだった・・・。

入国

「後は・・・バスナダ国だけか。」

森の中の一本道に、青年が馬に乗って歩いていった。青年の名はシロヤ。どこにでもいる一般的な青年だ。背丈は一般男性と同じくらいで、背中に細身の剣を携えていた。

「バスナダに行ったら名物料理を食べて一泊しようか。スタンプは明日にしよう、クロト。」

クロトと言うのは、彼の相棒とも言える黒い毛の馬の名前だ。決して足の早い名馬という訳でもない、単なる一般的な馬だ。クロトは、シロヤが初めて馬の出産に立ち会った時に産まれた馬だ。シロヤにとって、クロトは弟のような存在なのだ。

「さあクロト、バスナダの国境が見えてきたぞ。」

「バスナダ国の入国手続きをお願いします。」「おお、久々の入国者か。歓迎するぜ。」

国境にいた中年男性が、書類に色々と書き始めた。

「若いのに世界を巡る旅か・・・流浪の旅かい？」

「いえ、国中のスタンプを集めているんです。」

国にはそれぞれ国を表すスタンプがあり、それを集めて世界を旅する人も少なくはない。シロヤもその一人なのだ。

「んで、今スタンプはどれくらい集まったんだい？」

そう聞かれたシロヤは、一枚の紙を広げた。

「ひい、ふう、みい・・・ほお！バスナダ以外のスタンプは揃っているのか！？いやあこの国が最後たあゝ嬉しいねえゝ！」

中年男性は書き終えた紙をシロヤに渡した。

「まあ砂漠ばっかの国だけどゆっくりしていきな。俺の名前はラン

ブウだ。なんかあったらここに来な。」

「ありがとう、ランブウさん。」

シロヤとクロトはゆっくりと進みだした。

砂漠の国だが、国境付近はまだ森地帯だ。森の中の一本道を歩くシロヤとクロト。

「とりあえず宿を見つけよう。確かこの国の名物は甘砂まんじゅうと……。」

キャー……！！！！

森地帯に響く女性の悲鳴。シロヤは名物料理の思考を止めて、クロトの手綱を引いた。

「こっちの方から聞こえた！行くぞクロト！」

全速力で走るクロト。走りながら、シロヤは背中の剣を抜いた。
「見えた！アレだ！」

シロヤの目線の先に、大きなトカゲが人を襲っている。襲われている女性は、恐怖でさっきのような悲鳴をあげられないみたいだ。大きなトカゲはバシリスク。森地帯に住む低級の魔物だ。

「バシリスク程度ならいける！行くぞクロト！」

シロヤは剣を低く構え、バシリスクを狙う。狙われたバシリスクは足音でシロヤ達に気付き、すぐさま戦闘モードに入る。牙を剥き出しにし、今にも飛びかかっているといる。

「……勝負！」

飛びかかってきたバシリスクを交わし、後ろから剣を背中に突き刺す！

ギシャアアアア！！！！

バシリスクは剣を背中に刺されたままの状態に奇声をあげ、そのまま動かなくなった。

「ふう・・・なんとかいった・・・。」

剣に刺さっているバシリスクを抜き捨て、襲われていた女性に目を向ける。凜とした目は女性の芯の強さを感じる。

「助けていただきありがとうございます！」

深々と頭を下げ、礼を述べる女性。来ている服は上等な者で、彼女の裕福さを物語っていた。

「いえ、この辺は危険ですので気を付けてください。しかし何でこんなところに一人で？」

女性は目を閉じて黙った。言葉を考えているような感じだ。

「さっきこの国に帰ってきた、だから・・・。」

「よかったら安全なところまで一緒に行きませんか？」

女性はシロヤの言葉を聞くと、フツと軽く笑って走り出した。

「結構です！もう安全な場所に来ましたから！」

そう言っただけで女性は走り去っていった。その先には、砂漠と行き交うたくさんの人々の姿があった。

祭典

「ここがバスナダの街か・・・。」

シロヤは周りを見渡した。

もつと建物が点々としていた街を想像していたシロヤにとって、行き交うたくさんの人々やたくさんさんの高い建物、そして目の前に見える大きな城は予想外だった。

「とりあえず・・・宿をとるか・・・。」

「ああゝ！やつと休めるゝ！」

宿の一室をとったシロヤは、ベッドに思いつきり倒れこんだ。バスナダ国に来るまで無休だったことに加え、めったにしない魔物退治までやってしまったため、倒れこんだ瞬間に一気に眠気が襲った。

「・・・zzz」

「・・・！」

急に目が覚めたシロヤは窓の外を見た。時刻はもう夜で、空の色は真っ黒だ。その下、宿から見れる街は、今が夜であることを忘れるぐらい明るい。窓の外からは小さく陽気な音楽が聞こえ、人々の陽気な声が聞こえてきた。

「・・・祭り・・・祭り！」

シロヤは眠気が残る頭を軽く振って、身支度を軽く済ませて宿を飛び出した。

「クロト！祭りだ祭りだ！出店回りするぞ！」

クロトは嬉しそうに足をバタバタさせた。

「よしクロト！まずは甘砂まんじゅうだ！」

シロヤはクロトにまたがって走り出そうとした。

その瞬間、

「こらお前！これからパレードカーが来るんだぞ！馬なんかで街中を回るんじゃない！」

近くにいた宿の主人に呼び止められた。

「パレードカー？何ですかそれ？」それを訪ねた瞬間、流れていた音楽がさらに激しくなり、祭りを楽しむ人たちの声が一点に集中した。その先には、夜の街をさらに明るく照らす華やかなパレードカーが走っていた。

「今日は女王様のご帰還記念祭だからな。いつもよりパレードも華やかだ。」

「ご帰還記念祭？」

シロヤとクロトは首を傾げた。

「何だお前、よその国から来たのか？今日の昼にシアン女王様が遠征からご帰還したのだ。だから国民は女王様の無事を祝ってこうしてパレードをしているのだ。」

パレードカーを見上げているシロヤとクロトに向かって、宿の主人が言葉を続けた。

「パレードカーの上に座っておられるのが、我らがバスナダ国女王、シアン様だ！」

パレードカーの上には、これまた華やかなドレスに身をまとった美しい女性が座っていた。右と左を交互に見て国民に笑顔で手を振っていた。笑顔ながら、凜とした表情が見てとれるのは女王の素質があるからだろう。

そんなことを思いながらパレードカーを眺めていたシロヤ。

「・・・！」

ほんの一瞬、女王様が国民に笑顔で手を振っている最中、

シロヤと目があつた。

女王様の動きが止まった。

「・・・？」

急にどうしたのかと、一部の国民とシロヤが異変に気づいた。

パレードカーの上の女王様が、大臣と思われる男に何かを言っている。何か急いでいるような雰囲気を出している女王様に、大臣からマイクを渡された。パレードカーが動きを止めた。

「皆の者！今日は私の帰還を祝したパレードを開いてくれたことに感謝する！しかし、今回私が無事に帰ってこれたのは私一人の力ではない！」

女王様はすつとある方向を指差した。その先には、

「そこにいる黒毛の馬に乗った旅人の青年は、私が魔の物に襲われていたところを助けてくれた勇敢なお方だ！ぜひとももてなしてあげてほしい！」

女王様の言葉と同時に、その場にいた国民全員がシロヤとクロトに群がった。

「うわ！ちよつとまつ！うわああ！！！」

国民に持ち上げられ、ベルトコンベアのように城に向かって運ばれるシロヤとクロト。そのまま城の前まで運ばれたシロヤとクロトに、たくさんの食べ物を持った人たちが押し寄せてきた。あつという間にシロヤとクロトの目の前は、たくさんの食べ物で一杯になった。

まだ状況を確認できずに周りをキョロキョロするシロヤと、嬉しそうに食べ物にがつつくクロトに向かって、パレードカーの上の女王様がさらに言葉を続けた。

「パレードが終わったら城に来てほしい。改めて礼を言いたい。」

シロヤは遠くからも見えるように大きく頭を縦に降ったのち、ゆっくりと甘砂まんじゅうに手を伸ばした。

「これ・・・食べられるかな・・・。」

招待

豪華すぎるもてなしを受けたシロヤとクロトは、食べ過ぎでふらふらのまま城に入った。

「うわぁ．．．．」

今までの旅の中で城らしきものに入ったことがなかったシロヤは、あまりに自分の中の世界とかけ離れた空間に驚きを隠しきれないでいた。

何より一番驚きなのは、王室に続くまでの長い廊下に人の列ができているところだ。へいしやメイドや学者など、おそらく城に出入りしている人たちだろう。

「．．．．」

自然と無口になるシロヤ。初めての体験が多すぎて何も言えなくなっていた。

王室の奥には豪華な椅子。そしてそこに座っている女性は、確かに森地帯で助けた女性だ。しかし、服装が昼よりも華やかで豪華になっでいて、本当に女王であることがうかがえる。

「よく来たな。そなたを心から歓迎しよう。」

重みがある声が部屋に響く。ただの歓迎の言葉だけなのに緊張するシロヤ。額から汗が垂れる。

「ところでそなたは何故このバスナダに来たのだ？」

「えっと．．．実はスタンプを集めてまして．．．。」

声が震えるシロヤとは対称的に、口元を緩ませて話すシアン。

「よしわかった。今すぐ黄金のスタンプを作らせよう。」

「いやいやいや！押していただけだけで結構です！」

慌てるシロヤ。

「そなた、バスナダが旅の最後らしいな。このあとはバスナダに住む気か？」

「いえ、目的も果たしましたし帰郷しようかと。」

元々は農民の父親を置いて出たため、旅が終われば少しは親孝行してやるうと思っていたのだ。

「帰郷してからは何をするのだ？ 剣術の指南か？ 官僚に就くのか？」

「いえいえとんでもありません！ 牛や馬と戯れながら親の仕事の手伝いでもしようかと思つてます。」

シアンは顔を少しだけ歪ませた。

「そなたならばもつと上に立つことが出来るのではないか？」

「いえ、自分は農民生まれの農民育ちですから。」

シロヤは愛想笑いで返すのが精一杯だった。シアンが思っているほど自分は優秀な人間ではない、その事を説明するだけなのに、三頭の牛を引くかのような重労働をしたかのような疲労感が襲う。完全に「女王の威圧感」に萎縮してしまっていた。

「ふむ、ならばどうだ？ そなたにぴつたりな役職を用意しよう。」

「え？」

シアンは椅子から立ち上がり、シロヤに近づいた。

「そなたになら私が自信を持って任せられる役職だ。」

「あ・・・あの・・・自分は城に仕えるなんて自信が・・・。」

しどろもどろのシロヤの顎に手をかけて顔を近づけるシアン。微笑んだまま、シアンはゆっくりと言葉を続けた。

「どうだ・・・？ そなたにしかできぬのだ・・・。」

言葉を失い、口をパクパクさせるシロヤ。

「私の力になつては・・・くれないか・・・？」

心臓が人生最高の高鳴りを繰り返す。出来るならば逃げだしたい。しかし、シロヤは金縛りにあつたかのように動けない。

「・・・女王様。」

急に聞こえた第三者の声。声はシアンの後ろから聞こえた。見てみると、老人が本を開きながら立っていた。シアンは老人の

顔を見たことがある。シアンと共にパレードカーに乗っていた大臣らしき人物だ。シロヤにとっては救世主だった。

「何だレーグ、今日はパレードで何もなければだぞ。」

「そのパレードの最後に演説をしていただこうと思ひましてね・・・何せご帰還祭ですからねえ。」シアンと同じように重みのある声

だが、何かが違う。シアンは、レーグという男に違和感を感じた。

「ならば仕方がない。レーグ！このお方を最上級の客室にご案内して差し上げる。決して失礼の無いようにしろ。」

「御意。」

深々と頭を下げるレーグを背に、シアンは服を直して歩き始めた。すぐさま近くの兵士が回りを固める。

王室が出る間際、シアンはシロヤの方を振り返った。

「今夜じっくり考えてほしい。答えが出るまではこの城に居座るといい。」

優しく微笑んだのち、シアンは王室を出ていった。

「ではご案内しましょう。」

レーグに連れられて、シロヤは奥へと歩いていった。

「ではお連れの馬は私が連れていきましょう。」

振り向くと、銀色の防具をつけた体格のいい兵士がクロトの横にいた。

「では馬はバルーシに任せていきましょう。バルーシよ、くれぐれも失礼の無いようにしろ。」

「御意。」

力強い声と共に、クロトを連れてバルーシは王室を出た。

「では案内しましょう。私についてきてください。」

レーグについていき、シロヤは王室を出た。

「ではこの部屋をお使いください。何かあれば呼び鈴を鳴らしてください。だされば控えの者が来ます。」

「わ、わかりました。わざわざありがとうございます。」

深々と礼をして、レーグは部屋を出た。

広すぎる客室には大きなベッド等の様々な物がある。

急に悲しみが湧いてきたシロヤは、すぐさま呼び鈴に手を伸ばした。

「・・・。」

チリンチリン！

依頼

豪華な空間の中で一人ぼっちになったシロヤは、寂しさのあまり呼び鈴を鳴らした。

すぐさまドアは開いた。立っていたのは、身長がシロヤよりも低いが年は同じぐらいのメイドだった。

「お呼びでしょうか、シロヤ様。」

かしこまった態度にシロヤはまたもや萎縮してしまった。

「ええっと・・・名前は？」

萎縮したあまり出た言葉は、まるでナンパでもしてるかのような質問だった。メイドは一瞬驚いたような表情を見せるが、すぐさま対応してみせた。

「私はシロヤ様専属のメイドに任命された、クピンという者です。至らぬ点があるかもしれませんがよろしくお願いいたします。」

深々と礼をするクピン。シロヤも礼で返す。

「実は砂風呂の準備ができましたので、これからお呼びしようと思っていたのですが、いかがなさいますか？」

砂風呂は、砂漠地帯のバスナダの名物だ。他の砂漠地帯とは違う、特有の成分が入った砂風呂は美肌効果が高いと他国でも噂になるほどだ。もちろん、シロヤはバスナダに来てから砂風呂に入ろうと思っていた。

「じゃあお願いします！」

「ではこちらです、ついてきてください。」

クピンに連れられ、シロヤは城の廊下を歩いた。

その途中、ぶつぶつと呟きながら兵士がシロヤの脇を通った。誰に聞かせるわけでもない声でぶつぶつと呟く兵士。兵士は、さつきクロトを連れていった人、名はバルーシだ。シロヤは、リーグにも感じた違和感を再び覚えた。

一度覚えた違和感はどこまでもついてきた。急に変な緊張を覚えるシロヤ。

緊張を覚えたままのシロヤを、クピンは何も気付かないまま案内する。

「こちらが砂風呂です。では入る前にお背中をお流しします。」

「へっ!？」

さっきまでの違和感が飛んでいった。

「ふう・・・何か無駄に気を使った気がする・・・。」

人から背中を流してもらうなんて初めての経験だったシロヤは、気を休めるどころの話ではなかった。つるつるになった肌が、より冷や汗を倍に感じさせた。

「・・・トイレどこだ？」 冷や汗が尿に変わったのか、急にもよおしてきたシロヤ。場所がわからず、成り行きで部屋の外に出てみる。

長い廊下の先、シロヤの部屋から五つほど離れた部屋のドアに、一人の兵士が立っていた。ドアにびったりと耳をつけている。どうやら盗み聞きをしているらしい。何か殺気立つてる気がしないでもない。そして周りには誰もいない。

「背に腹は変えられないか・・・。」

流石に後ろから話しかけても斬られはしないだろう。勇気を出して兵士に話しかけてみる。

「あの・・・トイレは・・・。」

兵士はこちらを振り返り、手のひらを開いてシロヤに向ける。「待て」のサインだ。

「・・・・・・・・・・よし。」

兵士はしばらくしたのち、シロヤの腕を掴んで近くの部屋に入った。中はどうやら会議室らしき場所だった。部屋の中にあつたドアを指差す兵士に会釈をし、シロヤはドアを開けて小部屋に入った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふうー!」

「さつきはすまなかった。どうしても聞きたいことがあったのでな。」

兵士はシロヤに頭を下げる。

「いや、別にいいですよ。こっちは何かすみません。」

今二人がいる場合は、どうやら兵士の休憩室兼作戦会議室らしい。夜も遅いため、二人以外誰もいない。

二人しかない空間に流れる沈黙。耐えきれなさそうと感じたシロヤは、部屋から出ようとドアに向かって歩きだした。

「ありがとうございます。じゃあおやすみなさ」

「シロヤ様。」

シロヤの言葉を遮るバルーシ。急に顔つきが変わり、口調も重くなる。

「・・・勇敢なシロヤ様になら話せるでしょう。しかし、ここで聞いたことは他言無用でお願いしたい。」

「・・・・・・・・・・はい。」

勇敢な、の部分を訂正する前に肯定してしまったシロヤ。バルーシを取り巻く異様な雰囲気、重々しい空気がシロヤをうなずかせた。バルーシはゆっくりと話を続けた。

「この国には、政治を行う”バスナダ七人衆”という機関があります。最近、その機関が不穏な動きをしているという情報が入ったのです。」

シロヤは瞬時に悟った。自分は今、とんでもないことに片足を突っ込んでいるのではないかと。

「こんなこと、他国の者に頼むのも変かもしれませんが、ぜひ我々と調査をしていただきたいのです。」

「いやいや！俺は勇敢でも何でもありませんから！ただの農民です！」

必死に誤解を解くシロヤに向かって、何度も頭を下げるバルーシ。「お願いします！無理矢理なのは百も承知、しかし、女王様の命も

関わっている可能性がある以上、戦士一人の戦力、学者一人の知恵でも必要なのです。」

必死に頭を下げるバルーシに、シロヤはとうとう折れ始めていた。
「いや・・・でも・・・。」

再びしどろもどろになるシロヤ。

「！！！！」

一瞬、バルーシが動いた。背中の剣に手をかけ、闘志を剥き出しにする。

ビククリして後ろを振り替えると、ドアの向こうに気配を感じた。
「中に誰がいるの？」

大人の女性の声だ。それを聞いたバルーシは、戦闘体制を解いてドアを開けた。

疑念

開かれたドアの先にいたのは、ドレスに身を包んだ女性だった。その女性が部屋に入ると、バルーシは胸に拳を当てた。この国の敬礼だ。

「ブルーパ様！夜分遅くに作戦会議室を使つてしまい申し訳ございません！」

女性はバルーシに向かって軽く微笑んだのち、シロヤに近づいた。「あなた、今日シアンに呼ばれてきた旅人の子ね？」

怪しく微笑みながら、女性はさらにシロヤに近づいた。足一つ分くらいの距離まで近づいた女性は、シロヤの顔をジッと見た。

「ふふ、可愛い子ね？私の好みのタイプよ。」

「ここ！ここここ光栄です！」

女性はさらに近づく。シロヤの心臓が再び高鳴る。風呂でクピンに背中を流してもらった時のドキドキとは明らかに違う。女性から感じる香水の香りが、大人の色気を感じさせる。

「ふふふ、うぶな子ね。私があなたを男にしてあげよう、か・し・ら。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えええ！？」

一瞬の沈黙のうち、シロヤの頭が真っ白になった。顔は赤く火照りあがり、頭からは煙が出てるイメージだ。指先と足がカタカタと震える。

女性はシロヤの異変を感じると、笑いながらシロヤの顔に手を当てた。

「うふふ、冗談よ冗談！そんなに堅くならないの！」

笑いながらシロヤの頭を撫でる。撫でながら、女性は後ろのバルーシに目を向けた。

「でも、あなたの嘘は好きじゃないわよ？ね？バルーシ。」

バルーシは口を閉ざした。

「安心しなさい。七人衆の噂は知ってるわ。それに、首謀者の目星ももつついてるわ。」

「それは本当ですか！？ブルーパ様！」

バルーシは身を乗り出した。

女性は頭を撫でていた手を降ろし、三步下がって静かに答えた。

さつきまでの微笑みは消え、真剣な表情と瞳からは、凜々しさと心の強さが感じとれる。

「私の独自の見解なんだけどね。今回の噂にはリーグ大臣が関わっている可能性が高いわ。」

「リーグ大臣がですか！？」

女性から発せられた言葉には、シアンにも感じた特有の重みがあった。そして発せられた言葉の内容に、バルーシとシロヤは目を丸くした。シロヤは大臣と話したことは一回しかないが、不審なことをするような人には見えなかった。

「シロヤ君、人は見た目では判断できないわよ？忠誠心が高い人ほど怪しい、ってこともあるのよ？」

さつきからシロヤの心を読んでいるかのように話す女性。そしてバルーシが敬称をつけて話す女性。彼女は何者なのか、と疑問に思うシロヤ。

「あら、そういえば紹介がまだだったわね。私はブルーパ。バスナダ国の第二女王、シアンの姉ってところかしらね。」

「シアン様の姉・・・？第二女王！？」

その事を聞いた瞬間、シロヤは後ろに飛び退いて気を付けをした。「も！申し訳ありません！第二女王様とは知らずに」

「ああ、気にしなくていいわよ。私も改まれるのは苦手だからね。」シロヤの口に指を当て、言葉を遮るブルーパは、シロヤの頬に手を当てて静かに言った。

「話は聞いたと思うけど、今は私に気を使うよりもシアンを気にか

けてあげて。この噂、下手すればシアンの命すら危うくなるかもしれないの。だから、あなたがシアンを守ってあげて」

「私からもお願いしたい！」

バルーシが頭を下げる。王族の命がかかっているとなると、断るに断れない。

「わ．．．わかりました。出来る限りのことはやってみます。」

シロヤはゆっくり頭を縦に振った。

「ありがとうございます！シロヤ様！」

「本当にありがとう、シロヤ君。シアンのこと、よろしくね。」

バルーシが何度も頭を下げ、ブルーパが再びシロヤの頭を撫でた。

「シロヤ様！どこにいらしていたのですか！？」

部屋の前にいたクピンが、シロヤを見つけて駆け寄った。

「すいません．．．、ちよつと夜風に当たりたくて外に．．．。」

「それならば一言断ってからお願いします。本当に心配したんですからね。」

少し頬を膨らませるクピン。

「そろそろ消灯の時間なので、お部屋に入っていただきます。」

「ああ、もうそんな時間ですか。じゃあ寝させていただきます。」

「そうですか。ではシロヤ様、おやすみなさいませ。」

軽く礼をして、クピンは部屋を出ていった。

再び一人になったシロヤ。しかし、今は一人で頭の中を整理したかった。シロヤは豪華な布団に潜って、さっきあったことを思い返した。

「女王様の命を守る．．．か。」

例えば、長い旅の中でこんなことは一度もなかった。城に呼ばれたり、豪華なおもてなしを受けたり、女王様の命を守る大役を任せられたり。

「俺に．．．務まるのかな．．．。」

ただの農民一族の自分に務まるのか、悪い方向にしか頭が働かな

いシロヤ。

やがて、旅の疲れ、初めてのおもてなしを受けたことでの疲れ、大役を任されたことの疲れで、いつの間にか眠りについてしまった。

起床

朝、爽やかな砂漠の朝日が窓から降り注ぐ。窓の位置が、ちょうど朝日を枕元に降り注がせ、爽やかに目覚めることが出来る。

と、ここまでがリーグから話された部屋の説明だ。しかし、爽やかな朝日はシロヤに降り注いでなかった。

「・・・？」

ゆっくりと目を開けると、窓を誰かが遮っているようだ。遮っている人は、シロヤの頭を撫でながら、顔を真上からずっと見つめていた。

「ん？起きたか？おはよう。」

微笑みを浮かべ、頭を撫でながら、目覚めたシロヤに声をかける。シロヤの頭には、柔らかい枕の感覚があったが、横を見てみると、昨日使っていた枕が無造作に転がされていた。じゃあ今、自分の頭の下にあるのは何なんだろうか・・・。

まだ状況を理解できないシロヤ。頭の中で出した結論は

「夢・・・か。」

再び目を閉じるが、目覚めてから時間が経ったシロヤは思考が復活していた。

再び目を開けたシロヤは、状況を瞬時に確認した。今、シロヤは頭を撫でながら膝枕をされていた。そして、膝枕をしている人物は「どうした？そんなに見つめられては照れるではないか。」

「・・・シーシアン様！」

シアンは、微笑みながらシロヤを見つめていた。対称的に、シロヤの顔はどんどんと焦りの色が強くなった。

「どうした？私の膝枕を気持ちよくないか？」

「いーいや！そういう訳では！すいません！」

慌ててベッドから飛び降りようとするシロヤを、シアンが体で制止させる。強引に頭を胸に持ってかれるシロヤ。

「そんなに堅くなるな。今は私が王族ということは忘れるがいい。」
「あ……は……はい。」

しばらくシアンに甘えさせられるシロヤ。再びまどろみ始めてきたシロヤは、強引に眠気を押し殺してシアンに話しかけた。

「そういえばシアン様、俺にぴったりの役職っていったい……。」

「おお、話すのを忘れていた。何にせよ、話がわからなければ決断なんて出来ないな。」

シアンは撫でていた手を止め、凜とした瞳でシロヤを見つめながら、ゆっくりと語りだした。

「これは、そなたにしか出来ないことだ。」

「でも……俺は頭が良いわけでもないし、剣の腕が良いわけでも……。」

「そんなことではない。そなたにしかできぬ、そなたにこそ相応しいことだ。」

シアンは一呼吸置いたのち、目を閉じて再び語りかけた。

「そなたには、私のそばにずっといてほしい……。」

「……え!？」

シロヤは驚きの声を上げた。しかし、シアンはそのまま言葉を続けた。微かに頬が赤くなっている。

「私と共に……この国を……支えてはくれぬか。だから……私と……。」

声を次第に籠らせる。言葉を発するのをためらうかのように、シアンは何回も体を揺すった。

「……シアン様？」

シアンは頬をほとんど赤くしていった。一瞬見えたシアンの乙女の姿に、シロヤはドキツとした。

「……女王様。」

急に割り込んできた第三者の声。シロヤはこの声に聞き覚えがあった。昨日の夜中、ブルーパが話していた最も怪しいといわれる人

物だ。

「レーグ！？何故お前がここにいる！？この部屋はクピンが担当しているではないか！」

シアンはシロヤを抱いたまま怒鳴った。よほど、二人きりの空間を邪魔されたことが腹立たしいのだろう。

「そんなに怒らなくても・・・朝食が出来ましたんで呼びしに來ただけですよ。」

レーグは悪そうにいったが、顔は全然悪びれている様子はなかった。むしろ、良いタイミングに來たとでも言わんばかりの表情だ。それが、シアンを怒らせた要因の一つでもあるようだ。

「それならば朝食をここに二人分持つてこい！私はこのお方と二人でいたこう！」

「いやいや、もうローイエ様もブルーパ様もいらしていますので、残りはお二人だけなんですよ。」

女王を怒らせているにも関わらず、全く動じていない。シアンは少しムツとした表情のまま考え込んだ。

「む・・・二人が待っているのならしょうがない・・・。続きは朝食後に話そう。」

シアンはシロヤを静かに離し、早歩きで部屋を出た。そしてそのあとをレーグが追う。

「ではシロヤ様、お早めにいらしてください。ヒヒヒヒ。」

最後の含み笑い、シロヤはレーグに言い様のない寒気と不気味さを感じた。

「・・・。」

ここで考えていてもしょうがないと、シロヤは考えるのをやめて部屋を出た。

その瞬間

「キャッ！」

「うわぁ！」

ドアを開けて部屋を出てすぐ、シロヤは誰かとぶつかった。

ぶつかつた少女は黄色く長い後ろ髪を二つにまとめていた。華やかなドレスに身を包んでいて、背丈はシロヤよりも小さい。感じた感じ、歳もシロヤより下だろう。

「あれ？もしかして・・・シロヤ様！？」

少女はシロヤを見るなり、目を輝かせて近づいた。

「え？そうだけど・・・。」

「わぁ！お姉様を助けてくれたんだよね！」

少女はシロヤに抱きついた。その少女の言葉の中に、シロヤはいち早く気づいた。

「お姉様！？ていうことは君、いやあなたは！？」

「うん！私のお姉様は第一女王様と第二女王様なんだよ！私も第三女王なの〜！」

抱きついたまま少女はシロヤに笑顔で答えた。逆にシロヤはまたもや焦りの顔になる。

「シロヤ様〜！ご飯の時間だから食べにいく〜！」

「う・・・はい。」

シロヤは少女に抱きつかれたまま、朝食の場を目指した。

「そういえば名前言ってなかったね！ローイエっていいま〜す！」

「ローイエ・・・様？」

「様いらないよ〜！」

いつの間にかシロヤの前に来たローイエは、シロヤの胸に顔を埋めた。

予算

ローイエに抱きつかれたまま、シロヤは朝食の場についた。席にはすでにシアンとブルーパが座っていた。そしてシアンの傍らには、怪しい笑みを浮かべるレーグがいた。

「あらあら、二人とも仲良しね。」

まるで母親が子をからかうように笑うブルーパ。対称的にシアンは顔を曇らせ、なんとも言えない視線をシロヤにぶつける。シアンの変な視線に、シロヤは変な汗をかき始めた。

「・・・ハハハ。」

「シロヤお兄様〜！」

シアンの席の隣で朝食を食べる。今までの旅ではお目にかかれなかったような豪華な朝食。慣れない食事で、シロヤは食があまり進まなかった。

「む？食べないのか？そなたは食が細い方とは知らなかったぞ、すまなかった。」

「いえいえいえ！！昨日たくさん食べ過ぎたから食べられないんだと思います！」

王族に謝られるだけで汗びっしょりになるシロヤ。それを見てクスと笑うブルーパとローイエ。三人姉妹にとっては久しぶりの男性との食事だ。

「・・・女王様。食事中申し訳ございません。以前の会議後にまとめられた予算案です。目を通しておいってください。」

急に入ってきたレーグに、ブルーパとローイエは一瞬顔を曇らせた。

「む？そうか。見せてもらおう。」

軽く口を拭いて、シアンはレーグから一枚の紙を受けとる。端から端まで紙に目を通したのち、シアンは紙を下ろしてレーグを見た。

紙に隠れていた顔は、怪訝そうな顔だった。

「リーグよ。」

「はい。」

昨日感じた言葉の重みよりもはるかに重い。怒っているような声だ。しかし、リーグは動じていない。

「この予算案はバスナダ七人衆全員の意見を取ったのか？」

「いえいえ、七人衆に通す前に女王様に見せてからの方が票は集まりやすいですから。」

「ならば、今すぐにこの予算案を書き直せ。この予算案は却下だ。」
紙をリーグに叩き返すシアン。

「何故です？どこにも問題はないはずでは？」

「問題点の一つだ。この国にそれだけの軍事費用はいらない。」

リーグは紙をしまつて、シアンに問い詰める。

「何故です！？他国が攻めこんできた事を考えれば、例年の軍事予算よりも倍以上の予算が必要なのですぞ！」

「世界は今平和だ。他国が侵略目当てに攻めこむことなどない。武器はあるから使ってしまうのだ。この国を武装国家にしてはならないためにも、軍事予算は微々たるものでよいのだ。」

リーグの言い分も分かるが、シアンの意見も全うだ。何より国民はシアンの意見を選ぶだろう。

現にこの国には、他国に敵視されるような要素がないため、いたって平和である。シアンの意見は、平和なこの国、そしてこの国に暮らす人々のための意見なのだろう。

しかし、リーグは食い下がる様子を見せなかった。

「しかし！これからどのような事件が起こるか分かりません！何にしろ武装しておくに越したことは！」

たかが大臣が、こうまで女王に食いかかってくるだろうか、シロヤは疑問に思った。それを読んだかのように、ブルーパはシロヤに視線を送る。これが、リーグが怪しいと言った要因、王族しかわからない要因なのだろう。

「とにかくこの予算案は却下だ。朝食後に七人衆を集めて会議を行おう。」

シアンは席を立ち、リーグを連れて部屋を出ようとした。
「すまない・・・夜にもう一度話そう。」

シロヤに一瞬語りかけ、シアンとリーグは部屋をあとにした。

「また予算案却下されたね。しかもこの間と同じ理由で。」

「リーグも懲りないわね。シアンが軍事予算拡張に頷くわけがないのに。」

ブルーパとローイエは同時にため息をついた。だんだんシロヤの中で、リーグが怪しい人物になっていった。

重い空気の朝食の場、誰もしゃべらない中、ローイエが口を開いた。

「シロヤお兄様！今日私と一緒に町を散歩しませんか？案内しますよー！」

「あら面白そうね。私も一緒に行こうかしら。」

元々今日は町を探索する予定だったシロヤ。

「はい、じゃあ・・・一緒にお願ひします。」

「うわあゝい！三人でお散歩〜！」

両手を上げて喜ぶローイエ、その横ではブルーパが心配そうなシロヤを見つめる。そつとシロヤに近づいて、ブルーパは耳元で小さく話しかけた。

「ね？怪しい理由がわかったでしょ？」

「だけど・・・。」

「そうね、また断定するには証拠が不十分すぎるわ。会議での調査はブルーシと他の兵士達に任せておきましょう。」

ブルーシなら任せられると言った感じのブルーパ。シロヤは一つの疑問を覚えた。

「あの・・・ブルーシさんの役職って・・・？」

「ブルーシはこの国の兵士団長なの。」

なるほど、兵士団長なら信頼も厚いと、シロヤは頭の中で完結させた。

「お姉様、何話してるの？」

「いえ、ロイーエには関係無い大人の話よ。」

「うゝ！私も大人だもゝん！」

「大人なら好き嫌いしないで何でも食べなさい。」

「ごちそうさまでした〜！」

ロイーエは席を立って、小走りで部屋を出た。

散策

朝食後、シロヤは身支度を済ませる。王族と一緒に街散策など考えてもみなかつたため、楽しみと緊張で変な顔になる。

「落ち着け・・・俺、落ち着け・・・。」

そうだ、別に何かするわけでもないんだ。ただ一緒に散歩するだけだ。シロヤは頭の中で必死に自分に言い聞かせる。

「シロヤお兄様！準備できたよ！」

ドアを開けて、ローイエとブルーパが入ってきた。さっきまでのドレスから一転、ローイエは外出用の地味な服に身を包んでいる。

一方ブルーパは、外出用にしては立派なドレス姿だった。

「あの・・・ブルーパ様？ドレスで外に出られるんですか？」　プ

ルーパは微笑みながらシロヤの頬に手を添えた。

「女はいつだっておしゃれしたいのよ。特に男性と歩くときなんかには・・・ね。」

ブルーパは軽くウインクをした。

「じゃあシロヤお兄様！行きましょ！」

「うわぁ！ローイエ様！」

ローイエはシロヤの腕にがっしりと抱きついた。そんな二人の様子に微笑みながら先に行くブルーパ。

「もう！様つけないでよ！」

「改めて見ると、大きい城だな！」

シロヤは後ろにそびえる城を見上げた。昨日、自分はここに泊まっていたのが嘘のようだった。

「シロヤ君、君の相棒が待ってるわよ。」

城に見とれているシロヤの後ろには、昨日バルーシが連れていったクロトの姿があった。

「クロト！何だか久しぶりに感じるよ！」

クロトに抱きつくシロヤ。クロトは何事かと首をかしげた。しかしシロヤはお構い無しに抱きついた。

「よしクロト、街散策に行くぞ。」

クロトに乗るシロヤ。

「シロヤお兄様、私もクロト様に乗りたい！」

キラキラした笑顔で懇願するロイーエに、クロトは「任せておけ！」と言わんばかりにしゃがみこむ。

ロイーエがシロヤの後ろに乗ったのを確認したクロトは、再び立ち上がって歩きだした。

「ふふ、ご主人様と同じで可愛い馬ね。」

歩くクロトの隣で、ブルーパが微笑んだ。

「あ！昨日女王様が言ってたシロヤ様じゃないか！？」

「その後ろつてロイーエ様じゃない！？」

「ブルーパ様も一緒だ！」

街に入ったとたん、国民が三人を見てざわめいた。当然だ、女王二人と昨日のパレードでの注目的になったの人が一緒に歩いているのだ。

「ふふ、シロヤ君もすっかり街の人気者ね。」

ブルーパがシロヤに言った。今までの旅で注目を集めたと言ったら、クロトが露店の売り物を勝手に食べた時くらいだった。今までとは注目のされ方が違うため、シロヤはまだ慣れないでいた。

「ああ！あっちから砂胡椒のいい匂いがするよー！」

ロイーエが一つの露店を指差した。すると、クロトがその露店へと歩くコースをチェンジした。

「うわぁクロト！どこ行くんだよ？」

クロトにとつては周りの扱いとかは関係が無い。ただ求めるのは「美味しいもの」だけだ。

ロイーエの話を聞いて、「あの露店には美味しいものがある」と

認識して、勝手にルートをチェンジしたのだ。

「まったく・・・しょうがないな、クロトは。」

このぐらいなら普段の旅でもよくあることだ。シロヤは諦め、砂胡椒でこんがり焼かれた砂豚のステーキの露店に導かれた。

「おじさん！砂豚のステーキください！」

「へーへい！女王様とシロヤ様のために最上の物をご用意いたします！」

すぐさま露店のおじさんが調理にとりかかる。

テンションが上がっているロイーエとクロトの横で、ブルーパは小さくおじさんに呟いた。

「私はいらないわ、これ以上・・・増やしたくないから。」

内容が聞こえたシロヤは、とぼけたように聞いた。

「ブルーパ様、気にしてるんですか？体」

ガスッ！

「いてえ！」

足を思いつき殴られるシロヤ。殴ったブルーパの顔は笑顔だったが、変な威圧感があった。

「女性のトップシークレットよ？シ・ロ・ヤ・く・ん。」

今まで以上の寒気と冷や汗がシロヤを襲った。

「ここが観光名所のバスナダ砂丘ですか・・・。」

街を離れて、シロヤ達は街外れの砂丘までやって来た。見渡す限りの砂丘。広大な砂漠は、目印が無ければ迷ってしまいそうなくらい広い。それでいて、砂漠は穏やかだった。

「昔はね、この国は争い事が絶えなかった国だったのよ。」

ブルーパが静かに語った。シロヤは、ブルーパから放たれている不思議な感覚に魅了され、話に聞き入る。

「今でこそこんな何もない穏やかな砂漠だけど、こうなったのは何人も犠牲があったからなのよ。」

「犠牲？」

「そうよ。今も砂漠にはたくさんの人が眠ってるの。多分、その人たちもこの砂漠の姿がずっと続くことを祈ってるんじゃないかしら。」

シロヤは、朝食の時のシアンの意見が正義のような気がしてきた。眠っている人たちは、この国が争うことのみを目的に武器を持つことを望んではないのだろうか。そう思うと、レーグの意見が何だか腹立たしく思えてきた。

「だから・・・ね。シロヤ君が決断してくれたことで、この国の人はずっと笑顔でいられるかもしれないのよ。」

決断が正しかったのか。ということは夜中に何度も悩んだ。しかし、ブルーパの話を聞いて、自分の中で踏み切りがついてきた。

「ふふ、良い顔してるわよ。シロヤ君。」

微笑みながらブルーパはウィンクをした。

「クロト様！美味しいね〜！」

二人の横では、ロイーエとクロトが露店で買った肉を食べてる。

難しい話よりも美味しいものの方がいいらしい。

「気楽な子達ね。国が動くかもしれないって言うのに。」

自然と笑いが込み上げてくる二人。いつの間にか、二人も深く考えるのをやめていた。

シロヤは笑いながら周りを見渡した。

「アハハハハ・・・ハ・・・。」

シロヤは笑いを止めた。見渡す限りの砂漠、点々とある砂丘の目印以外、何もなかったはずだった。もちろん、人影なんてものは存在してなかった。

ふと視界に一瞬見えた人影、それをシロヤは見逃さなかった。

「あれは・・・まさか！」

シロヤは駆け出した。思考よりも体が先に動いた。シロヤが駆けつけていった先、大きな砂丘に遮られて見えなかった先には、砂漠とはかけ離れた森地帯が広がっていた。

そしてその先、森地帯に入ろうとしている人物。森地帯に入るにはあまりにもかけ離れた服装だ。

間違いない。朝、シアンに食ってかかった人物だ。遅れてきたプルーパも人物を確認する。

「あれって・・・。」

「ええ、間違いないわ!」

二人は森地帯に入ろうとしている男——リーグ大臣の姿を確認した。

追跡

森地帯に入っていくレーグを確認したシロヤとブルーパは、目を見合わせた。

「明らかにおかしいわ・・・大臣が森地帯に一人で入るなんて。」

「それに・・・入る前に周りを確認してました。人目を気にしているんでしょうか？」

レーグは明らかに挙動不審だった。森地帯に自分が入ることを他人に知られたくないのだろうか。

考えている二人に、後ろから二人を呼ぶ声が聞こえた。

「シロヤ様！ブルーパ様！」

声の主が後ろから走ってくる。声の主はバルーシだった。慌てたような表情で、顔を汗だくにしていた。

「バルーシ！まさかあなた、レーグを追って？」

「はい！会議が終わると同時に、誰にも言わず護衛も無しに城を出てきました。」

どうやらレーグは、自分の行動を人に知られないように徹底している。不審な動き、怪しい噂には、レーグが何かしら関わっている可能性が非常に高いと三人は踏んだ。しかし、まだ証拠は不十分だ。「バルーシさん、俺、レーグを追ってみます。」

口を開いたのはシロヤだった。バルーシは慌ててシロヤを止める。

「無茶だ！この先は未開拓地帯だ！何が出てくるかわからないぞ！」

「でも怪しいなら確かめるべきです！どんなに危険でも行ってみましょう！」

バルーシを説得するシロヤ。その瞳には熱意が秘められていた。

その熱意が伝わったのか、ブルーパが一歩前に出た。

「私もシロヤ君の意見に賛成よ。今動かなければ解決なんて程遠いわ。」

二人の熱意に押され、バルーシは唸りながら頭を縦に振った。

「ん？バルーシいつ来たの？」

バルーシの後ろから、食事を終えたロイーエとクロトがのんきにやって来た。

「ロイーエ、今からシロヤ君と行かないといけない所があるの。」

「だからクロト、ロイーエ様と城に帰っていてくれ。」

ロイーエは不満そうな顔をし、クロトはシロヤを心配するような瞳で見つめる。おそらく今から危険な所に行くのだらうと、直感で感じ取ったのだらう。

「大丈夫だ！ブルーパ様に何かあつたら俺が守ります！」 シロヤは肩の剣に手をかけて強気で言った。

「・・・シロヤ様がそこまで言うなら大丈夫かな？」

「シロヤ様を信じよう。シロヤ様とブルーパ様なら大丈夫だ。」
バルーシはロイーエを励ますように言葉をかける。

それで安心したのか、ロイーエは静かに首を縦に振った。

「ありがとう、ロイーエ。」

笑顔のロイーエの頭を撫でるブルーパ。

「ブルーパ様、行きましょう。」

森地帯に入っていくシロヤとブルーパを、ロイーエとクロトは心配そうに見つめていた。

未開拓地帯は、国境近くの森地帯とは格が違っていた。国境近くの森地帯はまだ整備がされていたが、未開拓地帯はその名の通り何も手がつけられていなかった。

大きな岩や見たことない植物が入り乱れる道を歩く二人。

「こんな先に・・・何があるんでしょうか？」

「レーグのことだからろくなものじゃないわよ。」

緊張するシロヤとは対称的に、まるで慣れたように道を進むブルーパ。ほとんど二人の差は離れていった。負けじと気合いで追いかけるシロヤ。

ふと、ブルーパが歩くのを止めた。何事かとシロヤは近づいてプ

ルーパに訪ねる。

「ルーパ様？何かあつたんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・来る！」

ブルーパが今まで見たことないようなオーラを放った瞬間、木々が意思を持ったように動き出した。木の枝が伸び、今にも二人を貫かんばかりの勢いで動き回る！

「う！うわあ！」

シロヤは尻餅をついた。今までの旅で見たことない相手だ。肩から剣を抜くが、剣を持つ手はカタカタと震え上がる。

一本の枝がシロヤめがけて伸びる！

「うわああああ！」

シロヤはかろうじて受けたものの、今まで感じたことのない力に、全身が震え上がるほどの恐怖が襲いかかる。

それを狙うかのように、シロヤを狙って再び枝が伸びる。シロヤは思わず目を閉じた。

「・・・・・・・・？」

訪れない痛み。シロヤは目を開けて目の前を確認する。

枝は自分の目の前で止まっていた。そして枝には、三本の短剣が刺さっていた。

「シロヤ君！大丈夫？」 シロヤの横にいたブルーパは、切っ先が眩しいくらいに光輝く短剣を両手に持っていた。持っている短剣と、枝に刺さっている短剣が同じなのを見ると、どうやらシロヤを助けたのはブルーパのようだ。

「シロヤ君、今すぐ下がって。」

凜とした声に押され、シロヤは後ろに下がった。

ブルーパはシロヤの位置を確認すると、シロヤに向かってウィンクをした。シロヤには今のウィンクが、「安心してね」と言っているように見えた。

動き回る枝と向かい合うブルーパ。しばらく向かい合ったのち、ブルーパが先に動いた。

「・・・？」

ブルーパの動きは、戦士のような動きではなかった。言うなれば、踊り子の踊りだ。まるで舞踊のように華麗に舞うブルーパ。舞いながら、向かってくる枝を華麗に避けている。

そして一瞬見えた隙、ほんの一瞬の内に、ブルーパは動き回る枝の奥、木々の本体を狙った。

精霊

ブルーパが放った短剣は、枝の本体に直撃した。

その瞬間、枝が苦しむように暴れまわった。周りの木々をなぎ倒すかのように、枝は木の幹にぶつかっては落ちていった。

ブルーパとシロヤは、枝を何とか避けながら先に進もうと走る。

「・・・！」

先に走るブルーパを追うシロヤ。暴れまわる枝の本体の横を走り抜けようとした瞬間、シロヤは森の先に人の姿を見た。

奇妙な人だ。羽衣のように透き通ったドレスに身を包んだ少女。最大の特徴は、頭の上には綺麗で大きな花があり、少女の肌が森のように綺麗な緑色だということだ。

少女は走り抜けるシロヤを見つめていた。そして少女の姿を確認したシロヤ。二人の目が合った瞬間、少女に向かって暴れまわる枝が襲いかかった！

「あ！危ない！」

シロヤは叫ぶと同時に逆走した。自分の命が危ないと思ったのは、少女に向かって走り出してからだった。

「シロヤ君！？」

異変に気づいたブルーパが後ろを確認して叫んだ。

枝は高速で少女に向かって伸びる。シロヤも全力だが、枝の方が速かった。間に合わないと思ったシロヤは、我が身を弾丸にするように頭から飛び込む。全力で地面を蹴って少女に手を差し伸べる。

瞬間、枝は少女がいた先の木を幹を貫いた！

「シロヤ・・・君？」

ブルーパは走って確認に向かった。

「いてて・・・。」

シロヤは枝を交わして、少女を胸に抱いたまま倒れていた。

ほつと胸を撫で下ろすブルーパだったが、直後、さらに枝がシロヤと少女に向かって伸びた。

「シロヤ君！危ない！」

倒れたまま動かないシロヤに伸びる枝。ブルーパが短剣を構えた直後、枝はその動きを止めた。

見ると、少女が枝に手を伸ばしていた。まるで少女の言うことを聞いているかのように、枝は少女の前で止まっていた。

「あなた少し・・・おいたが過ぎたわよ？」

少女の手の先が淡く光つたと同時に、枝、そして枝の本体の木が瞬時に枯れ、腐り落ちていった。

「いてて・・・何があつたんだ？」

起き上がったシロヤは、腐り落ちた枝を見て呟いた。腕を押さえているシロヤに、少女はやさしく声をかけた。

「私を守ってくれてありがとうね。おかげで助かったわ。」

少女はシロヤの腕を軽く触る。走ってシロヤの元にやって来たブルーパが、少女に声をかけた。

「あなたもしかして・・・精霊？」

「ええ、そうよ。私を助けてくれるなんて物好きな人ね。」

少女は軽く笑ってシロヤを見つめた。

「精霊？普段は姿を隠していて人間には見えないって聞いていたけど・・・？」

「この辺は人の通りが少ないし、姿隠すのって結構疲れるのよね。」

少女はクスッと笑ったのち、思い出したように呟いた。

「でも最近、変な男がよくここを通るのよね。なんか呟きながら奥の方に進んでいってるわよ。」

「怪しい男！？その男、どこに向かつてるかわかる？」

ブルーパは食いかかるように少女に迫った。おそらく、怪しい男というのはレーグのことだろう。

「わかるわよ？行きたいんだったら案内するわよ？」

「本当に！？じゃあお願いします！」

シロヤは少女に頭を下げた。その瞬間、腕に激痛が走った。さつき少女を助けたとき、腕から着地してしまったため小枝が刺さってしまったのだろう。

「あなた・・・怪我してるわよ？まずはその怪我を治してあげるわ。」

「そう言っと、少女の目線の先、森の奥から透き通るドレスに身を包んだ少女がやってきた。前髪で目が隠れていて、助けた少女よりも肌の色が薄い。森のような深い色ではなく、草木のように淡い緑色だった。」

「ああキリミド、ちょうどよかったわ。この人の腕を治してあげて。」

「そう言っと、少女はシロヤの腕に手をかざした。少女の手の先が淡く光ると、シロヤの腕から痛みが無くなっていった。光が完全に消えると同時に、シロヤの腕は正常に動くようになった。」

「治りましたがあんまり無理はしないでくださいね。」

少女はシロヤの腕を撫でた。

「わかった、ありがとう。」

「じゃあ行くわよ。キリミド、あんたも来なさい。」

少女二人を前にして、シロヤとブルーパは森の奥を目指した。

「ああ、紹介がまだだったわね。私はフカミ、よろしくね。」

「えっと・・・私はキリミドっていいいます。姉を助けていただきありがとうございます。」

「ええ！二人つて姉妹なの？」

「別に珍しくないわよ。精霊にだって兄弟姉妹はいるものよ。」

驚くシロヤに、フカミとキリミドはクスクスと笑った。

「見えたわよ。あれが怪しい男が毎回来ている場所よ。」

森の奥深く、太陽の光が届かない暗い森の中に、大きな教会が建っていた。

教会

森にたたずむ教会は、長い間使われていないのか、朽ち果ててしまっていた。あちこちの壁や窓は砕けていて、さらに壁には蔦が大量に付着していた。

「こんなところにレーグ大臣が・・・？」

シロヤは教会を再び見た。対してブルーパは、教会の壁を触りながら呟いた。

「ここ、バスナダ国が昔、軍事国家として発展していた時の名残のようね。森地帯の植物を兵器に変える儀式をしに来ていたと言われていた場所よ。噂には聞いていたけど、本当にあるなんてね・・・。」

「

「昔って言ったら・・・汚染植物を人工的に生産していた時代ね？あの時にこの森を使われたから、さっきみたいな子が出来たのね。」

ブルーパに続いて、フカミが呟いた。

さっきみたいな子と言うのは、シロヤたちを襲ったあの木の事だろう。

「バスナダ国が軍事国家・・・？汚染植物・・・？」

「信じられないと思うけどね。先代のバスナダ国王は就任と同時にこの国の軍事予算を10倍にしたのよ。」

「10倍！？」

シロヤは目を丸くした。今のこの平和なバスナダ国を見ると、とても軍事国家として成り立っていたとは思えなかった。

「それで、バスナダ国特有の植物を兵器に変える計画を実行しようとしたの。この教会はその計画の名残ね。昔はここで植物兵器を作っていたのよ。」

「！！！！何か来る、隠れて。」

キリミドがブルーパとシロヤを引っ張る。四人は、近くの茂みに身を隠した。

しばらくしたのち、教会から男が一人出てきた。

「あれは……。」

「間違いないわ、レーグね。」

レーグは教会を見上げて、何かを呟き始めた。シロヤは聞き取ろうとしたが、距離が遠く、草木のざわめきがレーグの声をかき消して、こつちまで届かない。

しばらく呟いたのち、レーグは来た道に戻っていった。

「よし、入るなら今よ。行きましょう。」

先陣を切ってブルーパが教会に入り込む。遅れてシロヤ、フカミ、キリミドが入っていった。

中は外よりも朽ち果てていた。椅子はボロボロ、わずかな光すら届かない真つ暗な空間。奥に見える微かな光は、どうやら蠟燭の火のようだった。

「レーグがここに来た目的は何なんだろう……。」

「さあね。古臭い奴だと思ってたけど、まさか先人たちの知恵でも借りに来ているのかしら。」

かつてここでは、軍事的植物兵器を作っていたという。しかし、表面上はただの教会なため、蠟燭の火以外には何も無い。

ふとシロヤは、足下の何かに目をやった。

「……これって、蔓？」

「それが汚染植物の一部よ。」

汚染植物、さつきもフカミが言っていたが、シロヤには理解できなかった。

ブルーパは、シロヤの理解できない思考を読み取って言葉を続けた。

「ああ説明してなかったわね。植物兵器は完成しなかったんだけどね、その代わりに無差別に人を襲う植物が生まれたのよ。それをこの国では”汚染植物”って読んでいるのよ。」

さつき二人を襲った木。フカミはあれが汚染植物だと言っていた。

つまりあれが、軍事国家だったときの名残なのだろう。

「やっぱりリーグの目的は・・・汚染植物なんでしょうか？」

「わからないわ・・・ただ、旧バスナダ国家の”何か”が目的なのは確かね。」

ブルーパは首をかしげた。それと同時に、朝の予算での会話が脳裏をよぎった。

「軍事予算の拡張・・・まさか旧バスナダ国家の・・・？」

「有り得るわね・・・それなら朝の予算の話と合点がいくわ。」

「ヒヒヒヒヒ！」

「！！！！！！！」

シロヤ達は一斉に後ろを振り向いた！入り口には、含み笑いをしながら四人を見つめるリーグがいた。

「尾行調査なんて古いことが好きなのですね、ヒヒヒヒヒ。」

人を小馬鹿にするように含み笑いをするリーグ。

「それはお互い様じゃない？過去の国の汚点を復活させようなんて大魔王にでもなったつもりかしら？」

「ヒヒヒヒヒ、私なりの野望のためなんですよ。まあ、あなた達には関係ないんですがね。ヒヒヒヒヒ。」

含み笑いを何度も続けるリーグ。

「野望って・・・？」

「よそ者の旅人風情には関係ありませんよ。まあ敢えて言うなら・・・権力を絶対的なものにしたい、ですかね。」

それを聞いた瞬間、ブルーパは叫んだ。

「あなたまさか・・・”星”が目的！？」

しかしリーグは不動。しばらくしたのち、リーグの姿はなかった。やられたわ！今のはホログラムよ！今すぐ城に戻るわよ！

ブルーパが血相を変えて走り出した！シロヤは訳もわからずブルーパに着いていく。

突然、後からついてきたフカミとキリミドが、走るのを止めた。

「お急ぎみたいね。キリミド！森の入り口まで送ってあげるわよ。」

「はい！」 フカミとキリミドが手をかざすと、周りの木の枝がシロヤとブルーパを持ち上げた。そのまま高速で枝が入り口の方まで移動した。

「二人ともありがとうね！今度甘砂まんじゅうでも持ってくるわ！」

「じゃあ俺は砂豚でも持ってくるよ！」

去り行く二人を見ながら、フカミは呟いた。

「遠慮するわ、私ベジタリアンだから。」

流星

フカミとキリミドの力で森地帯を抜けた二人は、すぐさま城に向かって走った。

「まずいわ・・・」星が狙われるなんて・・・。」

ブルーパが呟いた。しかし、シロヤには「星」が何なのかわからなかった。

「ブルーパ様！」星「っていったい!？」

「シロヤ君！今は走ることにだけに集中しなさい！」

シロヤを一喝する。その顔には焦りが現れていた。

目的地に向かって城内を走る二人。途中、使用人や学者がブルーパの顔を見て驚いていた。おそらく、ブルーパがここまで焦った表情をしたのは初めてなのだろう。

そして、ブルーパとシロヤが着いたのは、地下への階段を下っていった先にあつた門だった。

「シロヤ君・・・ここにレーグの目的があるのよ。この国では「星」って呼んでる物よ。」

門がゆっくりと開かれた。様々な財宝が箱に入れられて管理されている宝物庫。その先にあつたのが、ブルーパが言う「星」だ。

「これが「星」・・・綺麗・・・。」

キラキラとまるで宝石のように輝くそれは、それ自体が光を放っていて、薄暗い宝物庫を照らしていた。

「百年に一度、星の形の砂金がバснаダに現れるの。私達はその現象を「流星」と呼んでいるわ。そしてその流星によって生まれる砂、それが「星」よ。国王のみが所有できる国の宝、つまり今の所有者はシアンってこと。」

厳重に管理されている星は、見ているだけで不思議な力が沸いてきた。まるで、星自体が不思議な力を秘めているようだ。

「気づいた？星に秘められた力に。」

シロヤの心を読んだブルーパは、再び説明を始めた。

「この星がこうやって嚴重に管理されているのかわかる？」

「え……？」

「この星はね……危険なのよ。」

「危険……？」

シロヤは首をかしげた。これだけ光輝く星が危険な理由が思い浮かばなかった。

「この星には魔力を増幅させる力が込められてるの。簡単に言えば、持っているだけでその人の強さを増幅させるのよ。賢者が持てば国一つを自由に作り替えることが出来るくらいに強力なの。」

星に秘められた力、シロヤはそれを知ったと同時に、光輝く星が恐ろしく見えた。

「リーグはこれを使って絶対的権力を手にしようとしているのね。」

リーグの魔力なら国を作り替えはできないけど、頂点に立つことぐらいなら出来るはずよ。」

「でもこれの所有者はシアン様じゃ……。」

「そのために”あの人”を送ったのよ。」

「あの人……？」

シロヤが再び疑問に思った瞬間、宝物庫の扉が開いた！

「ブルーパお姉様！リーグ様が来ました！是非ご挨拶をしたいって。」

「あら、ずいぶん突然ね。ちょうどいいわ、シロヤ君にも紹介しなくちゃ。」

宝物庫を出て、客室に向かう二人。

「あの……リーグン様って？」

「リーグの息子よ。」

それを聞いた瞬間、シロヤは顔をしかめた。あんな親を持った子供はろくなものではないような気がしたからである。きつと、金に

物を言わせて市民達を弄んでふんぞり返ってるボンボン息子なんだろうな、とシロヤは瞬時に悟った。

そんなシロヤを見て、クスクスと笑いながらブルーパは客室の扉を開けた。

「ブルーパ様！お久しぶりです！」

客室の中にいた青年が深々とブルーパに礼をする。そして、シロヤに目を向けて再び深々と礼をする。

「お話はうかがっております。シアン様の命を助けた勇敢な方だと聞きました。是非、旅の話なども聞かせていただきたい。」

「え・・・はあ・・・。」

シロヤは目を丸くした。これがリーグの息子なのか、まるで正反對、端正な顔立ちでいて端正な服に身を包んだ青年。リーグのように何かを企むような口調とはかけ離れていて、淀みのないまっすぐな瞳は、意思の強さを感じ取れた。

「よく来たな、リーグン。」

遅れてシアンが客間にやって来る。それを見るなりリーグンは再び礼をした。

「お久しぶりです、シアン様。長らく顔を見せずに申し訳ありません。文を書こうにも時間がとれずに・・・。」

「萎縮するな、そなたはいずれこの国を支えるのだからな。」

シアンはリーグンを微笑みながら見つめた。

「・・・女王様。」

急に後ろから聞こえた声、客間の入り口には、さっきまで追っていた男、リーグが立っていた。

「リーグよ、先程はどこにいたのだ？会議が終わると同時に城を出たようだが。」

「いえいえ、他国からの使者と話をつけてきただけです。ヒヒヒヒ。」

リーグは平気で嘘をついた。

「それでリーグンよ、なぜ急に來たのだ？」

「ヒヒヒヒヒ、女王様。そろそろお決めになられてはいかがですか？」

リーグが再び含み笑いをしながら言った。対してシアンは笑わずにリーグをまっすぐ見据えて口を開こうとした。

「父上、今日はその話をするためにここに来たのでしょうか？ならば僕の意味は初めから決まっています！」

リーグンは、口調を強くしてリーグに言い放った。

「シアン様との結婚は正式にお断りさせていただきます！」

計画

「どういうことだリーグン!?」

「言葉通りの意味です。シアン様と結婚はできません。」
その場にいる全員が目を丸くした。

「元々は父上が勝手に決めた政略結婚、シアン様にも相手を選ぶ権利があるでしょう。」

「ならぬ!リーグンよ、今の発言を取り消すのだ!」

「父上・・・何故そこまでシアン様との結婚を強要するのですか?」
レーグは口を閉ざした。一瞬ボロを出しかけたが、そのまた一瞬で思い止まったのだ。

「まあリーグンよ、先のことなど気にするな。そなたもゆっくり考えるがよい。今夜は城に泊まるがよい。」

シアンはクピンを呼び出し、リーグンを客室から違う部屋に向かわせた。それに合わせて、その場にいた全員が部屋を出た。

「あれが・・・本当にレーグの息子なんですか?」

「ふふ、びつくりした?」

イメージとはかけ離れた青年、そしてシアンのことを考えての結婚拒否。できた人だな、とシロヤは思った。

「レーグの狙いは我が息子を王族にして星を手に入れることよ。」

「なるほど・・・それでレーグは結婚を強要したんですね。」

しかしリーグンはそれを拒否した。これはレーグにとって計算外なのだろう。

「でも・・・この計算外が変な方向に行かなきゃいいけど・・・。」
ブルーパはそつと呟いた。

「シロヤ様、リーグン様がお呼びです。」

突然、クピンが部屋に入ってきた。

「え？リーグン様か？」 シロヤがドアの方を振り向いた。そこにいたのはクピン、そして

「いえ、お話があるのはこちらです。私が出向くのが礼儀です。」

クピンの横からリーグンが現れた。シロヤとブルーパの真向かいにある椅子に座るリーグン。座り方も非常に綺麗だ。

「リーグン様、それでお話って言うのは・・・。」

「あなた達もご存知でしょうが、父上のことです。」

さっきまで見せていた顔から一転、表情が引き締まる。それに合わせて、シロヤとブルーパも表情が引き締まった。

「父上の目的は星を使つてのこの国の支配です。そして、旧バスナダ国王が作り上げた汚点、最強の軍事国家の形成です。」

「それに関わっているのが、バスナダ七人衆・・・？」

「はい、彼らの間では旧バスナダ国の世界的通称を取って付けた名、砂の竜王計画”と呼ばれています。」

砂の竜王、シロヤはこの名前を聞いたことがあった。前に旅した国で聞いた噂、バスナダに眠るとされている砂に住む巨大な竜王。

一度逆鱗に触れれば、国全てが紅く地に染まるとされていると。

「砂の竜王って・・・旧バスナダ国家の事だったんだ。」

「国民が思い出したいくない、過去に実際にあつた最大の汚点です。」

シロヤは背中に冷たいものを感じた。

「私の父上は、その時代はまだ一学者としてですが、政治に携わっていました。」

そして、旧バスナダ国王が暗殺された事件から大臣になったのです。

「

「リーグは懐かしき時代を取り戻そうとしてるのね。迷惑な話だね。」

「

ブルーパは首を振った。

「シロヤ様！ブルーパ様！」

慌ただしく入ってきたのはバルーシだった。顔を汗で濡らして、

肩で激しく息をしていた。

「リーグとバスナダ七人衆が会合を始めました！場所は作戦会議室、今、リーグ側の兵士が前を警備していて情報がとれない状態です！」

シロヤ、ブルーパ、リーグンが一斉に席を立った。

「会合・・・？いったい何の会合を？」

「おそらく、リーグン様が結婚を断ったから何かまた作戦を考えているのでしょうか。懲りない奴等ね。」

「しかし・・・、父上は予備策は常に持つておいているはずです！」

「どうにかして少しでも情報が取ればいいのだが・・・。」

四人は黙りこんだ。確かに情報は欲しいところだが、得る術が見当たらない。せめて警備がいなければ、先に作戦会議室に入っていれば・・・、せめてという言葉がシロヤの頭の中を埋めた。

「せめて・・・少しでも近づけられれば・・・。」

シロヤがそう呟いた瞬間、バルーシとブルーパが手を叩いた。

「あるわ・・・リーグ達に気づかれないで会合を盗み聞きできる方法。」

「しかしそれには・・・」あの方”の力が必要ですね。」

「そうね・・・まあ私が説得してみるわ。」

二人はとある人物を思い浮かべて、深くため息をついた。

「あの・・・」あの方”というのは・・・。」

「ん？めんどくさい男よ。これから何かとお世話になるだろうから、シロヤ君にも紹介しとこうかしら。」

ブルーパはシロヤの顔を見て、につこり笑った。

「シロヤ君、何か言われても軽く受け流すのよ。一回付き合つと非常に・・・めんどくさいから。」

まるで何かを言おうとしているかのような笑顔に、シロヤは変な違和感を感じた。

「じゃあブルーパ様、倉からあれを出しておきましょうか？」

「ええ、お願いするわ。少しでも勝率を上げておかないとね。」

しばらくしてバルーシが持ってきたのは、シロヤにとっては異臭と
感じる刺激臭を放つ物体だった。

大地

シロヤ達がやって来たのは、城の奥の兵士の詰め所だった。

「では・・・開けますよ。」

一拍置いたのち、バルーシはドアを開けた。途端に流れてくる異臭。

「うう！」

思わず鼻をつまむシロヤ。詰め所の中は異臭しかなかった。そんながらんだような詰め所の奥に、シロヤは動く影が見えた。

「ウツク！なんだなんだ！揃いも揃ってウツク。」

樽にもたれ掛かっている男がいた。ゆっくりと立ち上がって近づいてくるが、その足はおぼつかない。ふらふらと近づいてドア付近に再びもたれ掛かる。

「ん？なんだお前！？」

男はシロヤの顔をのぞきこんだ。全身から異臭を放ち、口からはさらに強い臭いを放つ。

これは・・・酒だ。

バルーシは、持っていた物を男に渡すと、男は物を口に当ててひっくり返した。そこからまた臭う異臭。おそらくバルーシが持っていたのは酒だろう。

しばらくして、バルーシは男に言った。

「その方はシアン様が招待した客人、シロヤ様です。」

「ああん？客人！？ただの農民にしか見えんが！？」

事実なだけに否定できないシロヤ。苦笑いしながら、ブルーパは本題を持ち上げた。

「それで本題なんだけど、ちょっと協力してほしいことが」

「断る！」

ブルーパの言葉を途中で遮った。

「待ってくださいレジオンさん！今回の件はレジオンさんの力が！」

「知らねえよそんなもん！大体俺は引退した身だ！そんなやつ力なんか借りずにてめえで何とかしやがれ！」

シッシッシつとバルーシ達を追い返し、再び詰め所の中に入る。

「まあ・・・予想通りでしたね。」

バルーシが苦笑いした。

「にしても・・・レジオンがいなきゃ話にならないわ。別の説得方法を考えましょう。」

ブルーパも同じく苦笑いしたのち、四人は詰め所を離れた。

「しかし・・・これじゃ手がありませんよ。」

バルーシは頭を抱えた。それを見ながら、ブルーパとリーグンが同じように考え込んだ。

「私・・・もう一回レジオンのところに行ってくるわ。バルーシ、あなたも行くわよ。」

「はい！」

再びバルーシとブルーパが部屋を出ていった。

「あの・・・レジオンさんっていったい・・・？」

シロヤはリーグンに尋ねた。

「レジオンさんは、砂の竜王時代に兵団長に配属になった方です。今は体のことを考えて兵団長を引退、現在は兵士達の剣術指南等を主とした活動をしています。」

それを聞いた直後、部屋の扉が開いた。バルーシとブルーパが戻ってきたのかと思って振り向くと、そこにいたのは違う人だった。

「シロヤ君・・・だったかな？」

立っていたのは、さっきまで泥酔していた男、レジオンだった。しかし、今部屋に入ってきたレジオンに酒気はない。シラフのレジオンだ。

「そう・・・ですけど。」

思わず声に緊張の色が混じる。シラフのレジオンからは強い威圧感が発せられていて、歴戦を乗り越えてきた事がわかる。

「さつきはすまなかつたな。それで改めて、君と話がしたい。一緒に来てくれないか？」

「は……。はあ……。」

シロヤはレジオンのあとについていった。しばらく歩いてたどり着いた場所は、城の見回り台だった。

「国ってなあ……。難しいと思わねえか？」

見回り台の上で砂の国の大地を見ていたレジオンは、突然シロヤに話しかけた。

「この国の砂漠には、たくさんの人達の命が眠っているんだ。もちろんそれは、砂の竜王時代に散っていった人達だけじゃねえ。国をよくしようと尽力した歴代国王、そしてそれを支えた国民達皆の命も含めてだ。」

レジオンは遠くを見ながら、再び語りだした。

「俺はこうして……。砂漠の風を感じながら砂漠を眺めるのが好きなんだ。」

砂漠の風がフワツとシロヤの髪を撫でた。

「今お前達が相手にしてる奴ってのは……。そんな大地を、国を壊そうとしている奴だ。」

シロヤは砂漠を見た。たくさん命が眠る大地。それを再び戦いの大地に変えようとしているのがレーグ。改めてシロヤは、戦っている相手が強大だということを再認識した。

「そんな奴ら相手と……。お前は戦うことができるか？」

レジオンはシロヤを見た。再度吹く砂漠の風。しかし、同じ風とは思えないほど、今吹いている風は重かった。

「誰も言わないから言うが、バルーシもブルーパもお前を過大評価しすぎだ。お前は戦士のように強いわけでもない。学者みたいに頭がいいわけではない。そしてお前はこの国の人間じゃないよそ者だ。」

はつきりと言うレジオン。しかし、シロヤはそれに聞き入ってい

た。

「こんなよそ者なんかを巻き込むなんて酷な話だぜ。それでもお前は、国を支配しようとしている脅威に立ち向かうことができるか？」
優しく吹く風がどんどんと強くなる。

「後戻りするなら今のうちだ。降りたきゃ降りろ。これは俺達バスのナダ国の問題だ。」

レジオンは見回り台を降りようとした。しかし、シロヤはレジオンの腕を握り、静かに呟いた。

決意

「俺・・・戦います！」

シロヤは凜とした声でレジオンに言った。対してレジオンは口を少し緩めた。

「関係ない話に首突っ込むのか？命を懸けてまで。」

シロヤは顔を引き締め、再びレジオンを見た。

「でも・・・目の前で人の命が危険にさらされているのを・・・見過ごすことはできません！」

「それが例え・・・見知らぬ他人でもか？」

「他人とかそんなの・・・関係ありません！」

シロヤは目線を緩めずにまっすぐとレジオンを見つめる。

「俺だって不思議ですよ・・・立ち寄った国でいきなりもてなされたり、かと思えば女王様の命を守れと言われたり・・・。」

「怖くないのか？」

「怖いです！下手すれば俺だって危ないのに・・・今からでも逃げ出したい気分です・・・。」

レジオンはシロヤを見た。うつむきながら話すシロヤの姿は、何故だか震えてるように見えた。

「でも・・・何だかこの国の人間とふれあったりしているうちに・・・何だか守りたいと思ってしまうんです。」

顔を上げたシロヤは、微笑みを浮かべていた。

「だから俺はできる限りのことをします。弱い俺は弱いなりに戦います。」

「ハッハッハー！よく言っただぜ兄ちゃん！」

さっきまでの雰囲気から一転、まるで酔っぱらったかのようにシロヤの背中を叩く。

「どうやら俺は兄ちゃんを過小評価してたみたいだな！あいつらの

目に間違いはなかったみたいだ！」

見回り台を降りて、シロヤを連れて歩くレジオン。

「お前になら・・・任せられるな。ついてこい！」

そう言ってレジオンはさらに奥へ歩いていった。

歩いた先にあつた場所は、暗くジメジメした狭い場所だった。

「あの・・・ここは？」

「城の各部屋の屋根裏に続いている隠し通路だ。作戦会議室だろうが屋根裏から覗けるぜ？」

レジオンとシロヤは、ほふく前進しながら奥へ奥へ進んでいった。
「城に長くいるからな、このくらいの知識はあつて当然だ。」

「でも・・・すごい狭いですよ・・・。」

「贅沢言つな。さあ、着いたぞ。」

レジオンが立ち止まつた場所は、通路の途中にある小さな小部屋だった。真ん中から光が漏れているのを見ると、おそらく小部屋の真ん中から作戦会議室を覗くことが出来るのだろう。

「声・・・聞こえますか？」

「静かにしてりや聞こえるさ。黙って聞くぞ、バレたらアウトだ。」

「では今回の会議での結果を最後確認します。」

わずかに聞こえる声、会議はどうやら終盤、ギリギリセーフだったようだ。そしてその会議を取り仕切る男の声、シロヤはよく知っていた。

「リーグ・・・。」

「あいつが計画に一枚噛んでいたとはな・・・。」

レジオンが呟いた。レジオンとリーグは、砂の竜王時代から人の上に立っていた、スピード出世した同期の二人だった。

会議はどうやら、議題とその話し合いの結果を最後に報告する段階だったようだ。

「では、星の入手方法を変更。リーグンを王族にすることで星を合

理的に入手する方法を断念、新たな計画として……。」

「シアン現女王の暗殺を実行しようと思います。」

「な！何だつムゲツ！」

「馬鹿……！でかい声を出すな……！」

慌ててレジオンがシロヤの口を塞ぐ。

しかし、レジオンも驚きの顔を浮かべていた。当然だ、今聞こえたリーグ達の計画は、”シアン女王の暗殺”なのだから。

「レジオンさん、どうにか止めないと……！」

「落ちて着け兄ちゃん、暗殺つたつてこれからやるわけじゃねえ。リーグもそこまで馬鹿じゃねえさ。」

レジオンはシロヤの横を通って、隠し通路を出ようとした。慌ててシロヤもついていく。

「暗殺するにも最適な場があるつてもものだ。おそらく時期はこれから……。」

「時期……近々何が？」

「ああ、おそらくそれは……バスナダ国最大の祭り……。」

「最大の……祭り……？」

「ああ、全国民が一日中ごった返し、その中を女王様がパレードカーで通るんだ。おそらくそこを狙うだろう。その方がばれにくいからな。」

二人は隠し通路を抜け、立ち上がって埃を払った。

「なあ兄ちゃん、暗殺の件はブルーシ達には言わないでくれ。事を大きくされると動きづらいからな。」

レジオンはシロヤにお願いした。

「え？でもしたら俺……一人になっちゃうんじゃ？」

「心配するな！なんかあったら俺のところに来な。」

その言葉を聞いたシロヤは、安心したのか快く頭を縦に振った。
「すまねえな。俺も何かあったら話すぜ。じゃあ頼んだぜ。」

レジオンはドアを開けたところで立ち止まった。

「兄ちゃん！」

「は！はい！」

「あんたのこと・・・気に入ったぜ！いつか剣術でも教えてやるよ。」

そう言っレジオンは走り去っていった。その背中には、元兵士団長の力強さを放っていた。

不安

「シロヤ様、おかえりなさいませ。」

部屋に戻ると、いたのはリーグンだけだった。

「あれ？ブルーシ様とブルーパ様は・・・。」

「まだ帰ってきていませんよ。そういうシロヤ様はどちらに？」

そうリーグンが聞いた瞬間、シロヤの後ろから二つの足音が聞こえた。

「相変わらずの石頭ね、レジオンを味方につけるのは難しいかもね。」

「はい・・・しかし、レジオンさんの力は強力です。リーグを相手取るためにもやはり・・・。」

頭を抱えながら話す二人が部屋に戻ってきた。

部屋に戻った四人は、再び話し合いを始めた。議題は、”リーグはいつ何かしらの行動を起こすのか”だ。

シロヤを除く三人は、リーグの目的を知らない。しかし、何かしらの行動を起こすことは目に見えている。ならば、その行動をいつどのタイミングで起こすのが鍵となるのだ。

「リーグは”星夜祭”を狙って行動をするんじゃないかしら？」

”星夜祭”・・・なるほど、それならば騒ぎに乗じて行動しやすい。」

「”星夜祭”・・・？」

シロヤは首をかしげた。

「星夜祭とは、この国最大の祭りです。星を祭りの中央に飾って恩恵を授かるという伝統的な祭りなんですよ。」

リーグンが補足してくれた。同時に、シロヤはレジオンの言葉を思い出した。もしリーグがシアン暗殺を実行するならば、国最大の祭り、星夜祭が怪しいと・・・。

「ならこつちも早く行動に移さないとね。星夜祭は三日後だから。」
「三日後!？」

シロヤは間の抜けた声を出した。暗殺決行の日時があまりにも早いと思い、シロヤは思わず声をあげてしまった。

「しかし・・・明日から兵団は祭りの準備をしなければ。」

「なら私とシロヤ君でなんとかやってみるわ。」

ブルーパはシロヤを見てウィンクをした。シロヤも頭を縦に振った。

「僕もお手伝いできることがあったら言ってください。」

同じくリーグンもバルーシに向かって頭を縦に振った。

「すいません、私もできる限り探ってみます。」

四人はそれぞれ意思を確認して、部屋を出ていった。

「・・・。」

時刻は夜。夕食を終えたシロヤは部屋で考えていた。

「シアン様の暗殺なんて・・・リーグは何が目的なんだ？」

元々は星が狙いはずなのに、リーグは星を諦め、シアン暗殺の実行を決めた。つまり、元々の狙いは星じゃないのかもしれない。

「リーグって・・・強いのかな・・・。」

リーグの用心深い性格上、間違っても暗殺者を依頼するとは思えない。ならばリーグが直接手を下すか、七人衆の誰かが手を下すかどうかだ。

「・・・。」

果たして勝てるのか。シロヤの頭にそんな事がよぎった。

ベッドから飛び降りたシロヤは、置いておいた愛用の剣を抜いた。鍛冶職人になった友人が旅立つ前にくれた剣だ。それを持って、軽く剣を振ってみた。

ぎこちないな・・・。とシロヤは思わず心のなかで呟いた。それも当然だ、シロヤの剣に型なんてない。

今までの旅でも、バシリスクやゴブリン、小さな鳥獣程度しか

相手にしたことがなかった。その程度なら、剣術を習っていれば誰でも倒せる相手故に、シロヤは力の弱さを痛感する。

実際、今日相手取った汚染植物には歯が立たなかった。プルーパーがいなければ、確実に自分は切りきざまれていたんだろう。「・・・外に出るか。」

急に外の風を感じたくなったシロヤは、そのまま部屋を出ていった。寝る前に戻ってくればクピンに心配をかけることもないだろう。シロヤは部屋を出た。

「あ！シロヤお兄様！」

部屋を出た廊下の先に、ローイエが立っていた。シロヤを見た同時に、ローイエはシロヤに向かってかけていった。

「お兄様、どうしたの？」

「ちよつと・・・夜風に当たりたくて・・・。」

「私、いいところ知ってるよ！今から行こう！」

ローイエはシロヤを引っ張って、城門とは逆方向に向かって歩き出した。

「この上！見晴らしいんだよ！」

やって来たのは、昼にレジオンと来た見回り台だった。

「あゝ！誰がいるよ？」

台に上がると、どうやら先客がいたようだ。

「クピンさん？」

「え？あ！シロヤ様に・・・ローイエ様！」

見回り台にいたのはクピンだった。メイド服のまま、風を感じながら景色を見ていた。二人を見るなり、急に萎縮し始めるクピン。

おそらく、王族であるローイエが目の前にいるというのが、萎縮してしまう一番の原因だろう。

「クピンちゃんも一緒！」

「わ！私なんかローイエ様のお隣だなんて！」

「もう！クピンちゃん緊張しすぎだよ！」

ほつぺたをぶにぶにするローイエ。背丈などを見る限り、二人は同じ年齢なのだろう。

緊張を落ち着けようと、ローイエはクピンの隣で景色を見始めた。それに合わせて、シロヤとクピンも景色を見た。夜の砂漠は神秘的で、それでいて優しかった。

「お兄様、この景色・・・好き？」

何故だが、今のローイエの声が幻想的に聞こえた。

予知

「私はこの景色大好き。でもね、最近砂漠が変わった気がするの。」
「砂漠が・・・変わった？」

目の前に広がる夜の砂漠は、確かに昼とは違った神秘的な印象があった。しかし、そんなことではないだろう。ローイエが見ているのは表面上だけではない、さらに奥深い何か・・・。

「何かが起こる・・・砂漠が壊れるような何かが起こる。」

ローイエの呟きはとてつもなく重く、それでいて暗い。

「・・・・・・・・・・。」

ふとシロヤは二人を見た。シロヤの目に映ったのは、体を震わせる少女の姿だった。しかしそれは寒さではない。これから起こるであろう未来を予知しているような震え、恐怖だ。

「ク！クピンさん！？」

「どうしたのクピンちゃん！？」

震えていたのはクピンだった。その震えは自分で止めようにも止められないようで、震えはさらに強くなりクピンの顔を青くする。

「いや・・・いやあ・・・いやああ！」

クピンは頭を抱えながら悲鳴をあげたのち、そのまま前に倒れこんだ。

「クピンさん！クピンさん！」

「お兄様！ブルーパお姉様のところに運びましょう！」

「気絶してるわ・・・。」

ブルーパがクピンの顔を覗きこんで言った。

「でも・・・どうして気絶なんか・・・。」

「・・・話しておいた方がいいかしらね。」

ブルーパはしばらく考えたのち、ゆっくりと語り出した。

「クピンをメイドとして雇ったのは、シアンじゃなくて私なのよ。」

クピンの顔を軽く撫でて、再び続けた。

「クピンには強い霊力があるのよ。それを自分で制御できないから、たまにこうやって暴走を起こすのよ。多分、今回の暴走が起こったことで未来が見えたんじゃないかしら。」

強い霊力を持つ者は、制御が難しく暴走を起こす。それはごく当たり前の話だ。

しかし、未来を見ることができるとは話稀である。よっぽど強い霊力がないと、未来を見るなんてことはない。

「まあ一日経てば目覚めるから心配しないで、さあローイエ、もう寝るわよ。」

ブルーパはローイエを部屋から出すと同時に、シロヤを見た。

「シロヤ君、ちょっといいかしら。」

ブルーパは重く言った。瞳が深く、それは見ているだけで吸い込まれそうだった。

「クピンは未来を見て気絶した。その意味がわかるかしら？」

シロヤは考えた。

「えっと・・・霊力が強すぎて負担になったからですか？」

「いいえ、原因は”見えた未来”よ。」

ブルーパは顔を伏せた。おそらく、ブルーパも信じたくないのだろう。

「クピンが見た未来は・・・おそらく星がレーグに奪われた未来よ。」

「ええ！じゃあ未来はもう決まって！？」

「いいえ、あくまでもその可能性が一番高いって話よ。クピンには耐えられない未来の映像だったみたいね・・・。」 心配そうにクピンを見る二人。青かった顔は少しずつ戻っているようだ。

「クピンは私が看病するわ。シロヤ君、今日はもう休みなさい。」

「は・・・はい。」

ブルーパに促され、シロヤは部屋を出た。

シロヤは少し考え込んだ。

「未来……。」

クピンが見た未来、恐怖に飲まれ気絶する程の未来。いったいどんな未来なのか。

「……。」

星が奪われ、シアンは暗殺され、バスナダがリーグの手に落ちたでしょう。そしたら他の人たちはどうなるだろうか。

おそらく、リーグの計画を知っている、そして知ろうとしている人は処刑されるだろう。ということは、ロイーエも、ブルーパも、バルーシも、レジオンも、そしてシロヤも……。

「……いやいや駄目だ！」

頭を軽く振って考えていたことを消す。マイナス方向に考えていてはキリがない。そう思って布団に入る。

「………！！！」

一度出たマイナス思考は消えない。布団に入って忘れようとすればするほど、どんどんと深く思考が頭をめぐる。

次第にシロヤは恐怖を覚えた。広い部屋に一人にいるということが、さらに恐怖心を強くする。

いつしかシロヤは、体をブルブルと震わせていた。

ガチャ……。

「……！！！」

急に開いた扉、シロヤは反射的に剣を握った。

「ど！どうしたのだ！？何かあったのか？」

シロヤは手を下ろした。

「シアン様……！」

部屋に入ってきたシアンだった。シアンはシロヤのベッドに上がり、シロヤに寄り添った。

「どうしたのだ？汗だくではないか。」

いつの間にか、シロヤは汗だくになっていた。

「私が・・・拭こうか？」

頬を少し赤くして、シアンは呟いた。

「いや！あ・・・遠慮します・・・。」

激しく拒否すると失礼だと思ったシロヤは、最後に小さく拒否の言葉を呟いた。

「ふむ・・・嫌ならいいだろう。」

シアンは寄り添いながら呟いた。

「そういえば、そなたにしかできぬことの話だが。」 シアンは、シロヤを見つめながら呟いた。

「私と共に・・・この国を支える王に・・・なってほしい・・・私と・・・結婚して・・・ほしい・・・。」

告白

「
・
・
・
・
・
・
ええええええ
!!!
」

シアンがシロヤに用意した席、それは国を統べる者の席、王の席だった。

「お！おお！俺が・・・おうに！？じよ！冗談ですよね！？」

「冗談ではない．．．私と．．．結婚して．．．王になって．．．ほしい．．．。」

シアンの顔がトマトのように赤く染まる。今、シアンが放った言葉は、間違いなく「告白」だ。

女王の告白を受け戸惑うシロヤは、口をパクパクさせて首を忙しく動かすことしかできなかった。

「……どうだ？それとも私は……魅力的ではないか？」

潤んだ瞳で上目使いをするシアン。

もちろんシロヤから見て、シアンが魅力的に映らないわけがない。ロングの髪の毛に華やかなドレス、綺麗な顔立ちにスタイルは誰もが魅了される。見た目だけではなく、性格や気配りも一級品。シアンは一国を統べる姫なのだから、そんなことは当然と言えるが、それはあくまでもシロヤからかけ離れた世界、王族や貴族などでの話だ。

単なる農民が姫と結婚、しかも恋愛結婚など、世界をひっくり返しても事例は出てこない。

「どうした……？私は早く……そなたの返事が聞きたい……」

シアンの腫がどんどん潤んでいく。じつとシロヤを見つめるが、当の本人はまだまだ正気を保っていられない状態だった。それに気づいたシアンは、シロヤの頬に手を当てた。

「むう……やはり急に王になると言われても……答えるのは難

しいか。」

シアンは優しく微笑んだ。

「ならば・・・そなたにこの国をもっと好きになってもらいたい。」

シアンはベッドから降りて、カーテンを開けて窓を見た。砂漠の夜の空は遮るものがなく、美しい星が国の空を彩っている。

「三日後、この国をあげて行われる最大級の祭り、”星夜祭”に、そなたを国賓として招待しよう。そこで、この国をもっと好きになつてもらいたい。」

星空の光が部屋に差し込み、シアンを照らす。シロヤは何故か、星の光を浴びるシアンが神秘的に見えた。

「私たちバスナダ国一同、最大限のおもてなしをしよう。そして、星夜祭の終わりに、そなたの答えを聞きたい。」

三日、それはシロヤが答えを出すために考える時間。そして、答えを出すためにリーグの野望を止めなくてはいけない制限時間。シロヤにとって残された猶予だ。

「わかりました・・・三日・・・考えてみます。」

シロヤは小さくうなずいた。それを見たシアンは、優しさを含んだ微笑みを浮かべていた。

「うむ、良い答えを期待しておるぞ。」

そう言つてシアンは、再びベッドに入り、シロヤに寄り添った。

「では今日はここで寝させてもらうぞ。」

シロヤの横にシアンも横になり、添い寝の形をとった。

あれから時間は経っていない。しかし、シロヤには何時間もの長い時間に感じた。シアンはずっとシロヤに寄り添っている。

ふと、シロヤはシアンに尋ねた。

「シアン様、この国の人たちは好きですか？」

「もちろんだ、民は皆、家族であると私は思っている。」

女王らしい答えだが、シロヤにとっては違和感しか生まれない答えだった。シロヤは続けた。

「もちろん・・・家臣も皆ですよね？」

「無論、家臣も皆バスナダの民だ。誰一人とて例外はない。」

シロヤの顔が曇った。聞いてはいけない質問をしたのではないか、という考えが頭をよぎる。そして、次にシロヤが口にした言葉も、また聞いてはいけない質問だった。

「もし・・・家族の誰かが・・・シアン様を暗殺しようとしても・・・ですか？」

即座にシロヤは後悔した。こんな質問はするべきではない。それがわかっていても、確認だけはしておきたかった。

曇った表情のシロヤとは対称的に、シアンの顔は微笑みを浮かべていた。

「もし私が狙われているのならば、喜んで受けよう。私は逃げも隠れもしない。命が欲しいのならば、くれてやる覚悟だ。」

覚悟、シアンの言葉に嘘偽りはない。清々しいくらいにまっすぐな答え。しかし、シロヤは清々しさを感じる余裕なんてなかった。

シアンは、今自分が狙われていることを知らない。当然の話なのだが、シロヤにはきつい現実だ。

「シアン様は・・・強いお方なのですな。」

「そなたも強いではないか。見ず知らずの私を魔の物から守ってくれたのだ。」

シアンはシロヤに向かって微笑んだ。しかし、シロヤは再び顔を曇らせた。

俺は強くなんかない・・・。助けたのは単なる良心、もし襲っていたのがバシリスクでなければ、シロヤは逃げていたかもしれない。シロヤは何も喋ることが出来なくなった。

そのまま、無音の空間が二人を包み込む。シロヤは、色々とありすぎた今日の出来事を思い出す前に、深い眠りについてしまった。その頬を撫でながら、シアンも深い眠りについた。

案内

爽やかな砂漠の朝日が窓から降り注ぎ、シロヤは朝日を感じながら、ゆっくりと目を開けた。

隣にいたシアンは、シロヤよりも早く起きて朝の会議に向かったようだ。

とりあえず起きようと、シロヤはベッドから飛び降りて、軽い運動を始めた。

「・・・シロヤ様。」

「・・・うわぁ！」

突然聞こえた声、ドアのところにいたのは、意外な人物だった。

「レーグ・・・様。」

やって来たのはレーグだった。相変わらず人を小バカにしたように嘲笑いながら、シロヤの部屋を見ている。

「・・・何ですか？」

「ヒヒヒヒヒ、女王様の命によりシロヤ様のお目付け役を頼まれましてね。ヒヒヒヒヒ。」

相変わらずムカつく笑い声だ。

「お目付け役・・・？具体的に何を・・・？」

「城の中の案内をするように頼まれましたので、今日は城の案内をさせてもらいます。ヒヒヒヒヒ。」

シロヤは不服そうに頷いた。よりによってレーグに案内されるとは・・・。

「なにかご不満ですか？ヒヒヒヒヒ。」

「いえ・・・何も・・・。」

「あら？レーグと・・・シロヤ君？」

部屋を出てすぐの廊下にいたのは、寝起きのブルーパだった。ボサボサの髪の毛のまま、レーグについていくシロヤを見ている。

「ヒビヒビヒ、プルーパ様。今日は私がお目付け役を任されましたからお気になさらず。ヒビヒビヒ。」

その言葉に、プルーパは顔をしかめた。シロヤと同じく不服そうに見つめている。

「まあ・・・いいわ。それよりも、いくら大臣でも宝物庫は入らないようにね。」

「おやおや？よそ者が入っているのに大臣はダメなのですか？ヒビヒビヒ。」

よそ者、それはおそらくシロヤのことだろう。昨日、プルーパに連れていかれて入った宝物庫、星が安置されている場所だ。

「あら？何のことかしら？あそこには王族しか入っていないはずよ？」

そう言っただけでプルーパは、小さくシロヤにウィンクをした。これはおそらく、シアンと結婚して王族になれただけのことだろう。

「ヒビヒビヒ、まあいいでしょう。では案内を続けましょう。」

そう言っただけで、プルーパは廊下を歩いていった。その後ろ姿を、プルーパは見えなくなるまで見つめていた。

城の中は思いの外広く、全階層を案内されるだけで朝の大半の時間を使ってしまった。

そしてたどり着いたのは、砂漠が見渡せる見回り台だった。

「ここはいいところですよ。砂漠の風を感じながら砂漠を見ることができるところから。」

プルーパは景色を見ながら呟いた。しかし、レジオンのように景色を、風を体一杯に感じながら言っただけの言葉とは正反対、うわべだけの感動だ。

シロヤは少し苦笑しながら景色を見た。街では、人がせわしなく動き回っている。

「あれは三日後に行われる星夜祭の準備ですね。」 見ると、バルーシも物資の運搬をしている。

「星夜祭は、我がバスナダ国の宝である星を崇める由緒正しい祭りなんですよ。星夜祭はバスナダ国民のみが参加できる祭りだと言われていましたね。何せ・・・大事な星を崇める祭りですからね。盗まれたりしたら一大事ですからね。」

これはおそらく、遠回しにシロヤに”早く消えろ”と言いたいのだろう。もちろんバスナダ国民のみが参加できるなんてのは嘘である。

見え透いた嘘をつくな、とシロヤは苦笑する。

「昨日、シアン様から正式に星夜祭に招待されました。」

含み笑いをしながら、シロヤはレーグに言った。それを聞いたレーグは、少し表情を曇らせた。

「そんな話は聞いてないんですがね・・・まあいいでしょう。」
してやったり、とシロヤは内心喜んだ。

「この先が王室です。」

最後に来たのは、豪華な造りの扉の前、シアンがいる王室の前だった。

「では私はこの辺で。お帰りの順路はもうわかりますよね？ヒヒヒヒ。」

そう言って、レーグはシロヤを置いて小走りで行っていった。

「え？ちよつとレーグさん！」

まるでさっきの仕返しかと言わんばかりだった。シロヤは豪華な部屋の前でボーッとするしかできなかった。

ようやく部屋についたシロヤは、ベッドに転がり込んだ。

そのまま寝てしまおうと思った瞬間、ドアがノックされた。

「シロヤお兄様〜！」

「シロヤ君〜！」

ドアの向こうからシロヤを呼ぶ声、声から察するにローイエとプルーパだ。

「は！はあい！」

慌ててシロヤはドアを開けた。ドアの向こうにいたのは、ローイとブルーパ、そして、

「昨夜は・・・よく眠れたか？」

「シ！シアン様！？」

三人の服装は地味なものだった。まるで街娘みたいな格好で、ローイは結んでいた髪を解いていた。

「これから三人で行くところがあるの。シロヤ君も来てくれないかしら。」

「行くところ・・・ですか？」

「そうだよ！お兄様も王様になるんだったら必ず行かないといけないんだよ！」

「こ、こらローイエ！・・・すまぬな、一緒に来てはくれないか？」

急な話ではあったが、シロヤは快く了承した。

墓前

地味な格好の三人とシロヤは、王室の奥へと歩いていった。

「あの・・・何をするんですか？」

そう聞いたシロヤがたどり着いたのは、王室の奥の通路のさらに奥だった。

「さあ、この奥だ。」

シアンが扉を開けると、正午の光が降り注いだ。どうやら屋外に繋がっているようだ。そしてその先にあったのは、たくさんのお墓だった。

「ここは・・・先代国王達が眠っている場所よ。私達王族は月に一回、先代達のお墓参りに行かないといけないの。」

シアンは王室から持ってきた花を出し、一番奥のお墓に花を手向けた。

「お父様・・・もうすぐ星夜祭が始まります・・・必ずや星夜祭を成功させます。どうか安らかに眠りください。」

軽く手を合わせて黙祷するシアン。それに続いて、後ろの三人も黙祷する。

「・・・先代国王は、バスナダ国を軍事国家にした国王なの。そして・・・私達を育ててくれたお父様なの。」

シロヤは声を出さずに驚いた。

「お兄様、シアンお姉様はね、ずっと一人で頑張ってきたんだよ。」

お父様の残した傷痕と戦いながらね・・・。」

「こら！ローイエ！」

ブルーパがローイエに怒鳴った。ローイエも幼いながら、言っではいけないことを言ったと直感で理解した。

「いや・・・いいのだ。確かにお父様は傷痕と呼ぶに等しいものを残していった。だからこそ私達が、私達で変えていかねばならぬのだ。」

シアンの目はまっすぐで、それでいて凜々しかった。

「今年の星夜祭はその第一歩だ。だから、ブルーパお姉様にも、ロ
ーイエにも協力してほしい。」

「何を今さら言ってるのよ、そんなの当たり前じゃない。」

「もちろんだよお姉様！私も頑張るよ！もちろんお兄様も！」

「う．．．うん。」

三人は互いになさきあった。そこには、国を変えようという強い意志があった。

「ではそろそろ行こうか。」

シアンは立ち上がって、王室に向かって歩き出した。その後ろについていくローイエとブルーパ。

「．．．．．ブルーパ君？」

ブルーパが後ろを振り向くと、シロヤが墓前に立っていた。後ろ姿は何故か、誰にも打ち砕かれないような強い力を感じる。あれは．．．決意だ。

「ブルーパ様．．．シアン様が望んでいるのはこの国の平和な未来なんですよね．．．。」

「．．．そうね。」

そう聞いたシロヤは、墓前に座り込んで手を合わせた。

「先代国王様．．．私は旅の者、シロヤという者です。」

淡々と語り出したシロヤ。

「今．．．シアン様が望む平和な未来を．．．脅かす者が現れています。ですがご安心ください。シアン様の体を任された以上、どんな脅威にも、俺は立ち向かいます。例え、この身が朽ちようとも．．．」
深々と頭を下げるシロヤ。その頭を、ブルーパは軽く撫でた。

「ブルーパ．．．様？」

「シロヤ君だけじゃないですよ、お父様。私達は皆、シロヤ君の味方です。そして．．．シアンの味方です。」

二人は再び黙祷した。
黙祷を終えた二人は、静かに立ち上がって歩き出した。

お墓参りを終えたシロヤは、王室の来賓用椅子に座っていた。用事があるとブルーパが残させたのだ。

しばらく待っている、ブルーパは奥から走って戻ってきた。

「お待たせ、これが星夜祭の動きよ。」

渡された紙の裏には、”超重要”と書かれていた。

表に書かれていたのは、どうやら星夜祭の全体の動きのようだ。出店の概要から、パレードカーの動きまで事細かに書いてあった。

「これがあれば、リーグの動きも予測しやすいでしょう？」

「でも・・・これって機密事項じゃ・・・。」

ブルーパは、そう言ったシロヤの唇にそつと指を当てた。

「ひ・み・つ・よ？シロヤ君。」

最後に軽くウインクをして、再び紙に目を戻した。

「さ、バルーシもないしさっさと済ませちゃいましょう。まずは・

・・・」

部屋に戻ったシロヤは、ブルーパからもらった紙に目を戻した。紙には、予測した時間やそれに合わせての動きがメモしてあった。

「・・・。」

しばらく見たのち、シロヤは目を背けた。

あと二日後、リーグと対決をする。その事実が、シロヤを震えさせた。

考えてみれば、長い旅の中で対人戦を経験したことがない。そして、未知数であるリーグの力。

「・・・。」

思っではいけないと思っても、自然と頭に浮かぶ最悪のシナリオ。だんだんとシロヤは、自分の頭の中に怒りを覚え始めた。

「・・・アー！」

怒りを言葉に変えたのち、力任せにドアを開けた。ドアの先にいたのは、勢いよく開いたドアにビックリして座り込んでいる少女だった。

「・・・・・・・・クピンさん？」

「シ！シロヤ様！」

すぐさま立ち上がり、服の埃を軽く払って、シロヤの方を向いた。
「さ！昨晩はシロヤ様やローイ工様のお手を煩わせてしまつて！本当に申し訳ありませんでした！」

震えながら頭を下げるクピン。その頭を上げさせたシロヤの顔は、安堵に包まれていた。

未来

「クピンさん！よかったー！目が覚めたんだ！」

シロヤはぴんぴんぴんと跳ねて喜んだ。

「本当に申し訳ありませんでした！シロヤ様のお手を煩わせて・・・。」

「そんなとんでもない！俺はクピンさんが無事で本当によかったですよ！」

クピンの手を握って一緒に跳ねる。シロヤと跳ねるクピンの顔は、キョトンとしていた。

「あの・・・。」

「あ・・・ごめんなさい・・・。」

我にかえったシロヤは、クピンの手を離して頭を下げた。

「と、とにかく、クピンさんが無事で本当によかった。とりあえず中で話しましょう。」

「それなら私も一緒にいいかしら？」

突然聞こえた声、声の主はブルーパだった。

「ごめんなさいね、シロヤ君。私まで加わっちゃって。」

今シロヤの部屋にいるのは、シロヤとクピンとブルーパだ。三人は円を描くように座っている。

「あの・・・ブルーパ様！看病していただき！ありがとうございます！ごさいます！」

王族の隣ににいるという緊張感でガチガチのまま、ぎこちなくクピンはブルーパに頭を下げた。

「固くなりすぎよ、クピン。リラックスリラックス。」

クピンの頭を撫でるブルーパ。しかし、クピンの緊張は解れていない感じがしない。

「それよりクピン、あなたにちょっと聞きたいことがあるんだけど・

「・・・いいかしら？」

ブルーパの顔が引き締まる。

「クピン、あなた・・・未来を見たのかしら？」

シロヤは目を丸くした。まさかブルーパからそれを引き出すとは思わなかった。

クピンの表情が曇る。何となく、ためらっているような表情だ。

「いえ・・・見ていません・・・。」

うつむきながらクピンは答えた。少し声が震えているようだ。

それを見たブルーパは、少しだけ微笑んだ。

「そう・・・わかったわ。ごめんなさいね。」

少し間を空けたのち、ブルーパはそのまま部屋を出ていった。

「あの・・・シロヤ様。」

静寂を破ったのはクピンだった。

「さっきの話なんですが・・・シロヤ様になら言える気がします・・・。」

今まで見たことない、クピンの強い表情。今まで見せていたおろおろとした表情とは全く違う表情だ。

「ク・・・クピンさん・・・？」

「お話しします。私があの時見た夢を・・・。」

クピンはゆっくりと語り出した。

暗くなつた空には、砂漠を照らす星も月も輝いていない。

「ヒヒヒヒヒ！ヒヒヒヒヒ！ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！」

暗い砂漠に響く含み笑い。そびえ立つ砂丘には、シロヤが今まで感じていた優しさは、欠片すらなかった。

「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！」

さらに響く含み笑い。その先にそびえる巨大な城には、絶望を宿した屍しかなかった。

その屍は多種多様だ。黒毛の馬、黄色い髪の少女、ドレスに身を

クピンはどうやら、自分に強い霊力があることを知らないようだ。シロヤはゆつくりと頷いて、言葉を探した。

「そうですか・・・ありがとうございます。」

そのまま会話を終えようとしたシロヤ。しかし、クピンがさらに言葉を続けた。

「シロヤ様・・・。」

クピンの声は震えていた。自分が見た夢が怖いのだろうか。

「シロヤ様・・・もう、頼めるのはシロヤ様しかないと思うんです。」

「え？だって他にもバルーシさんとかブルーパ様だって」

「何でかわからないんですが・・・シロヤ様なら・・・私達バスナダ国を守ってくれると思うんです。」

クピンしか感じない、第六感に似た何か。強い霊力があるクピンだからこそその直感だった。

その直感を信じたクピンが、顔を引き締め、ゆつくりと顔を上げた。

「お願いですシロヤ様！どうかバスナダをお救いください！」

砂丘

頭を下げるクピンを見たシロヤは、ゆっくりとクピンの頭を上げさせた。

「わかっていますよ。どこまでやれるかは分かりませんが・・・出来る限り戦ってみます。」

その言葉を聞いて、クピンは笑顔のまま目に涙を浮かべた。

「あ・・・ありがとうございます！」

シロヤは、近くにあったミニタオルでクピンの涙をぬぐった。

次の日、シロヤは部屋にいた。

「・・・。」

いよいよ明日は星夜祭、決戦の日だ。

バルーシ、プルーパー、レジオン、リーグンの協力があるとはいえ、自分の無力な力でどこまで戦えるのかわからない。

外を見てみると、街は明日の星夜祭を待ちきれないのだろうか、人々が忙しく街を走り回っている。

「・・・。」

何だか外に出てみたくなったシロヤは、ドアノブに手をかけた。

「・・・ですよ、ヒヒヒヒヒ・・・。」

「!!!!」

瞬時に手をドアノブから離す。

ドアの向こうから聞こえてきたのは、レーグの含み笑いだった。何かを話しているのだろうか、気になったシロヤはドアに耳をつけた。

「では明日の・・・時、パレードの時間・・・暗殺を・・・します・・・ヒヒヒヒヒ。」

誰かと話しているようだ。話している相手はわからないが、話している内容はわかる。どうやら、シアンの暗殺について話しているようだ。そしてその内容には、暗殺時間とその決行場所が話されていた。

「では手筈通りに・・・ヒヒヒヒ。」

含み笑いが近づいてきた。少しずつ近づいてきて、聞こえてきたのはドアを挟んで数センチの所。

「・・・ヤバイ！」

すぐさまドアから離れる。そしてその数秒後、ドアが開かれた。

「ヒヒヒヒヒ、シロヤ様、朝食の時間になりました。」

ムカつく含み笑いが部屋に響くが、シロヤの耳には入らなかった。それよりも気になったのは、レーグのさっきの会話だった。

「シロヤ君、気分はどう？」

「シロヤお兄様！明日一緒に祭り回ろう！」

席に座ると、すぐさまシロヤに近寄るブルーパとローイエ、その横で微笑んでいる（ように見える）シアンがいた。

「明日・・・そなたを目一杯おもてなししよう。それでこの国をもつと・・・好きになつてもらいたい・・・。そして・・・答えを聞かせてほしい。」

モジモジするシアンを見たブルーパが、ニヤリと笑った。

「あゝあ！私も側室に入れてくれないかしら？シ・ロ・ヤ・く・ん？」

「ぶふっ！」

飲んでいた牛乳を吹きこぼすシロヤ。

「な！何言うんですかブルーパ様！」

「クスクス、本当に可愛いわね。」

ブルーパは笑いながら、近くの牛乳に手を伸ばした。

シアンは顔を真っ赤にして俯いている。どうやら告白したのをブルーパに見透かされたことが恥ずかしかったのだろう。

「側室に入れるんだったら、私以外にもローイエとかクピンとかも・・。」

「バルーシとかレジオンも？」

「ぶふっ！」

ローイエの発言にシロヤ、そして今度はブルーパも吹きこぼした。

「ローイエ・・あなた少し黙ってなさい・・。」

ブルーパは半笑いしながらローイエに言った。

朝食を食べ終えたシロヤは、すぐさま身支度を済ませて城を出た。途中、ローイエがついていきたいと駄々をこねたが、ブルーパによって阻止された。おそらくブルーパは、シロヤが行こうとしている場所がわかっているのだろう。

シロヤが来たのは、もちろんブルーパが予測した場所だ。

賑やかな街を通り、準備に奔走していたバルーシに挨拶をしたのち、シロヤがついたのは砂丘だった。

「・・。」

砂漠の優しい風を体に受け、シロヤは砂丘の向こうを眺めていた。景色を見ているうちに、シロヤは心配していたことを忘れていた。

「・・シロヤは、後ろに人の気配を感じた。」

「よお、確か・・シロヤっていったかな？」

立っていたのは、シロヤがバスナダに来て一番最初に見た人だった。

「あ！確か・・ランブウさん？」

シロヤは思い出したように手を叩いた。それを見たランブウは、軽く笑いながらシロヤに語りかける。

「明日から星夜祭か・・、わくわくするな。」

子供のように楽しみにしているランブウ。

「安心しな。明日の星夜祭は危険なんか無いぜ？安全に祭りを楽しんでもらうぜ？」

ランブウはシロヤの背中をバンバンと叩いて高笑いした。

「危険・・・ですか・・・。」

シロヤは少し黙った。

そうだ、危険なんてないようにしないといけないんだ。シアンの命も、国の皆も守らなければならないんだ。

・・・ん？

「あの！？ランブウさんの役職って」

シロヤが後ろを振り向いた時、ランブウの姿はもうなかった。

「・・・？」

首をかしげるシロヤ。そんなシロヤを、砂漠の風は優しく包んだ。まるで、明日に向かう人達を、そしてシロヤを応援するかのよう
に・・・。

そして、星夜祭本番の日がやって来た。

成敗

街にはたくさんの人達が笑顔で歩いている。中には他国から来た人もいる。

街中を走り回る子供達や、恋人と肩を並べて歩く者など、本当に多種多様だ。

その中に、黒い馬に乗って街を回っている青年と、それについていく少女と女性がいた。

「シロヤお兄様〜！あそこ行こ〜！」

「こらローイエ！あまりはしゃぎすぎるんじゃないわよ！」

ブルーパの言葉を聞き流して、ローイエは一つの屋台に向かって走り出した。

「まだ約束の時間じゃないですから。祭りを楽しみましょう、ブルーパ様。」

シロヤがブルーパに微笑んだ。

「約束の時間……ですか？」 朝、シロヤはシアンから時間と場所を言い渡された。

「うむ、そなたの案内は私がさせてもらうことになった。だから……待ち合わせ場所を決めておこうと思ったのだ。」

”待ち合わせ”という言葉と言ったのち、シアンは頬を赤く染めた。

「それまでは……そなたの思うがままに祭りを楽しんでもらいたい。」

恥ずかしさを隠すようにシアンはうつむきながら言った。

「でも本当によかったの？約束の時間までローイエと一緒に回るなんて。」

「ええ、一人よりも皆で回った方が楽しいですから。」

ブルーパの問いに、シロヤは笑って答えた。

「お兄様〜！お姉様〜！こっちこっち〜！」 笑顔でローイエが手を振っている。その方向に向かって、クロトはゆっくりと歩きだした。

「ちょ！クロト！話してる最中なのに！」

「あらあら、クロト君も楽しみたいみたいね。」

クスクスと笑いながら、ブルーパはクロトの後ろを歩いていった。ローイエの所に着くと、シロヤはたくさんの人達が集まっているところに目をやった。

「あれは・・・食堂みたいなものか？」

歩きながら食べることができない物はあそこで食べるようだ。

ふとシロヤは、その奥がざわついているのに気がついた。どうやら、誰かに注目が集まっているようだ。シロヤはよく目を凝らして人混みの奥を見た。

「何だ〜てめえ〜！もう飲めないなんて抜かす気かあ〜こらあ！」

「うつ！ちよつと飲みすぎですよ！もうそのくらいに！」

どうやら、酔っぱらいを誰かが制しているようだ。しかし、シロヤは酔っぱらい、そして酔っぱらいを制している人の声に聞き覚えがあった。

「てめえバルーシ！もう一本持ってこい！俺とお前！どっちが飲めるか競争だ！」

「レジオンさん！ちよつと落ち着いてくださいってば！周りの方にも迷惑が」

「んだこらあ！俺が迷惑だつてんのか〜！」

そう言つて、レジオンは持っていた酒の瓶を振り回した。レジオンの瓶さばきは凄まじく、元兵団長の名は伊達ではないことがわかる。それに対してバルーシも、レジオンの瓶の軌道を読んで、交わしながらも反撃をうかがっている。

街中で始まった、元兵団長対現兵団長の対決に、シロヤは思わず興奮してしまった。

「はあ・・・しょうがないわね・・・。」

横のブルーパがため息を一つついた。それに気づいたシロヤは、ブルーパに視線を戻す。

ブルーパは、綺麗に一回転した。それと同時に、ブルーパから何かが放たれた！

放たれた物は人混みを高速で抜けていき、そのまま食堂の奥へと向かっていった。そして・・・。

「ぐわあ！」

「ぐっ！」

二つの悲鳴が聞こえたのち、食堂が一瞬静かになった。しかし、しばらくすると、人々は再び賑わいを取り戻した。

「ふう・・・。」

横のブルーパが軽く伸びをした。

「あの・・・ブルーパ様？」

今の出来事を見ていたシロヤは、恐る恐る聞いてみた。

「・・・何をしたんですか？」

ブルーパは微笑みながらシロヤを見た。何故だか、その微笑みに怖いものを感じたシロヤ。

「ただ単に酔っぱらいを黙らせただけよ？何も不思議なことはないわよ？」

シロヤはそれよりも、黙らせた方法が気になった。

ブルーパの戦闘能力は、この間の汚染植物との戦いで思い知っていた。まるで舞いのような動きから放たれた短剣は、汚染植物の急所を一撃で貫いた。短剣を急所に、しかも一撃で当てるほどの腕前だ。そんな腕前をもろに食らった二人を遠目で見て、シロヤは少しだけ顔をひきつらせた。

「安心して、投げたのは竹串よ。しかも尖ってない方ね。少しだけ眠ってれば自然と回復するはずよ。」

シロヤの心配を、ブルーパは優しく解決した。

「お兄様、どうしたの？」

どうやらローイエは、屋台に夢中でレジオン達に気づかなかったようだ。

「いえ・・・何でもないです・・・。」

クロトもローイエも、屋台で買った食べ物に夢中だった。シロヤも受け取って食べ始める。

ブルーパも受け取って食べ始めた。持っている竹串が凶器に見えたシロヤ。自然と背中に冷たいものを感じた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・って！ブルーパ様！何でブルーシさんまで！？」

「ん？ん・・・・・・・・喧嘩両成敗ってやつ？」

笑いながらブルーパは言った。シロヤは、ゆっくりとブルーシに手を合わせた。

土産

気絶者二人が運ばれていくのを横目に、三人は街中を進んでいた。

「約束の時間まではまだあるみたいね・・・シロヤ君、これからどこに行くのかしら？」

「お腹いっぱい！」

お腹がふくれた様子のローイエとクロト。

とりあえず辺りを見回してみると、シロヤの目に一つの屋台が飛び込んだ。

「野菜の・・・叩き売り？」

とれたての野菜を売っている屋台だ。

バスナダの砂は特殊な成分が入っているらしく、野菜を植えれば極上の野菜に、家畜に食べさせれば極上の肉になると言われている。バスナダが”隠れた美食大国”と呼ばれている理由がこれだ。

野菜の屋台をしばらく見ていると、シロヤの頭にふと二人の人物がよぎった。

「あ！そういえばお土産！」

よぎった人物、未開拓地帯でシロヤが助けた、そして助けられた二人の人物。

「ああそうね。私も忘れてたわ。」

そう言ってブルーパは、野菜の屋台に向かって歩きだした。

「ローイエ様、少しだけ付き合ってください。」

「ん・・・わかった！」

シロヤとローイエは、屋台へと走っていった。

買った野菜を持って、シロヤ達が未開拓地帯に向かった。

「ここ入ったことない！怖い！」

ローイエの体が震えている。心なしか、クロトも震えているよう

な感じがした。

「改めて見ると確かに不気味ね……。」

改めて未開拓地帯を眺めて、ブルーパは森に入ってしまった。

「あ！ブルーパ様！」

「お姉様早い！」

遅れて、二人も入ってしまった。

「あら？また来たの？」

森に入ってしまったら歩くのと、会おうとしていた人物にすぐに会えた。

「この間のお礼に来たわよ。はい、バスナダ自慢の野菜。」

「わあ！ありがとうございます！」

「本当に届けに来るなんて思わなかったわ。まあ、ありがたくもらうわ。」

目をキラキラされて野菜を受けとる妹、キリミドと、軽く頭を下げる姉、フカミ。この森に住んでいる精霊の姉妹だ。

「どう……かな？喜んでもらえるかな？」

「まあ……まああつて所かしらね。」

顔を背けて言ったフカミに、キリミドがクスクスと笑いながら呟いた。

「もう、お姉ちゃんったら……。素直じゃないんだから。」

「キ！キリミド！何言ってるのよあなた！」

「私知くらない！」

笑いながら野菜を持って逃げるキリミド。その後を、顔を真っ赤にしたフカミが追いかけていった。

「こらあ！待ちなさい！」

森を走り回っている精霊の姉妹。何だか微笑ましい光景だ。三人は、そんな姉妹をしばらく眺めていた。

未開拓地帯から出て街に戻ると、約束の時間が近くまで迫ってい

た。

急いで集集場所に向かうシロヤ達。クロトに三人を乗せて、砂漠を一気に走り抜ける。

結果、約束の時間ギリギリに集集場所に着いたシロヤ達。すでにシアンは集集場所に来ていた。

「むう・・・どうやら急がしてしまったようだな・・・すまない。」

「いえいえ！俺が時間にルーズ気味なだけですよ！シアン様が謝ることありませんよ！」

必死に頭を上げさせようとするシロヤに、クスクスと笑うプル―パとローイエ。

「まあ・・・そなたが無事でよかった。さあ、案内させてもらおう。」

シアンはシロヤの手を握った。ときどきしながら、シロヤはゆっくりとシアンをクロトに乗せる。そしてシアンは、ゆっくりとシロヤに身を預けた。

「そなたの背中・・・大きいのだな。」

「ええ！？あ！あの！どちらに行けば・・・！」

それを聞いてシアンは、ゆっくりと体を直し、クロトに語りかけた。

「クロト殿、すまぬが城の逆側に向かって歩いてほしい。・・・すまぬな、二人も乗っては重いであろう。」

クロトはその場で足踏みをした。まるで「気にしないで」と言っているかのようだ。

「じゃあシロヤ君。きつちりエスコートしなさいよ？」

「お兄様もお姉様もいつてらっしゃい！」

手を振って二人を見送るプル―パとローイエ。そんな二人を背に、シロヤとシアンは城の逆側の方角へと進んでいった。

城の逆側、方角で言うと北には、海が広がっていた。

「ここは・・・これから始まる祭りのイベントの穴場スポットだ。」

シロヤ達が来たのは、海にそびえる灯台だった。灯台の中に入り、長い階段を上がっていくと、城の向こうの街の明るさまで見渡せしてしまうほどの高さになった。

街の向こうを眺めるシロヤ。そんなシロヤに、シアンはゆっくりと寄り添った。

「・・・！」

そのまま、シロヤの肩に頭を乗せる。まるで恋人同士のようにあり、シアンにはそれが心地よかった。

「あの・・・シアン・・・様？」

「今、そなたと二人つきりなのだな。」

わずかに震える声。

「静かだな・・・まるで世界がそなたと私だけになったみたいだな・・・。」

体も小さく震えている。シロヤは、シアンの手を握った。

「ふふ・・・そなたの手・・・暖かいぞ・・・。」

突然、寄り添う二人が見上げる空に、光の華が咲いた。

開戦

「うわぁ……。綺麗……。」

シロヤとシアンが見ている空に咲く、光輝く大輪の華。街の向こうから上がっているのだが、その光は灯台まで届いている程に光輝いている。

「どうだ？我が国が誇る花火職人達の”砂火薬花火”だ。」

砂のようにサラサラとしたバスナダ特有の火薬は、他の火薬に比べて扱いやすい。それゆえに、昔からバスナダでは花火作りが盛んに行われていた。

他国の人々が、バスナダの花火はどこよりも美しいと言われている理由だ。

「バスナダってすごいですね。食べ物も美味しいし、花火も綺麗だし。」

「ふふ、気に入ってもらえたかな？」

シアンは、シロヤの腰に手を回して引き寄せる。自然と二人は密着しあっていた。

「名物は花火だけではないぞ？砂の酒なんかもこの国の自慢だ。」
バスナダに来てから、シロヤは様々な名物に触れてきた。そのどれもが素晴らしく、シロヤは全てに満足していた。

そして、このバスナダに住む人達は優しい人達ばかりだ。見ず知らずの旅人にここまでよくしてもらえるなんて、長旅の中で事例は一個もない。

だからこそシロヤは、このバスナダ国に特別な思いを抱き始めていた。

「私は毎年、こうして花火を見るのが好きなんだ。」

シアンは空を見上げながら呟いた。一瞬見えた横顔、花火に照らされたシアンの横顔には、形容しがたい美しさが秘められていた。

「どうだ？バスナダを好きになって……。くれたか？」

シロヤの方を向くシアン。目を合わせていると、自然とドキドキしてしまう。

「はい・・・好きに・・・なりました。」

それを聞くと、シアンはニコッ！と満面の笑みをシロヤに向けた。「うむ、我が国を好きになってくれて嬉しく思うぞ。バスナダはそなたを心から歓迎しよう。」

そしてシアンは、そのままシロヤの顔の方を向きながら、ゆっくりと目を閉じた。

「・・・！」

シアンは、シロヤの返事を待っていた。目を閉じてはいるが、唇は少し震えている。

「あ・・・あの・・・シアン様・・・？」

自然とシロヤの体も震える。シロヤは、体を震わせながら、ゆっくりとシアンに近づいていった。

「・・・女王様。」

「！！！！！！！」

突如後ろから聞こえた第三者の声。シロヤとシアンは同時に振り向いた！

「レーグ！！！」

「ヒヒヒヒヒ！探しましたよ女王様！」

いつからいたのかわからないのだが、確かに後ろに立っていたのはレーグだった。階段を上ってくる音も聞こえなかった。

「ヒーヒヒヒヒ！女王様、もうそろそろパレードの時間です。今すぐ城に戻っていただけますでしょうか？」

「もうそんな時間か、ならば・・・私はこのお方と戻ろう。」

シアンはシロヤの腕に抱きついた。それを見たレーグは、一瞬だけ顔を歪ませた。

「それには及びません。ヒーヒヒヒヒ！」

含み笑いをしたのち、持っていた杖を構えて何かを呟き始めた。
「待てリーグ！ 転移魔法を使わずとも間に合うであろう！」

「時間が惜しいんですよ。できるだけ早く準備を済ませてください。」

「
そう言った瞬間、強い光がシアンを包み込んだ。強い光に目をくらまされたシロヤ。向き直ったときには、そこにシアンの姿はなかった。」

「ヒーヒヒヒヒ！」

リーグは高笑いをしたのち、そのまま杖を構えて再び詠唱する。
リーグの体が淡く光ると、そのまま光の尾を残して灯台の窓から飛び出していった。

「しまった！ やられた！」

シアンを転移魔法で城に送り、自分は飛行魔法で城に向かって行ってしまった。

すぐさまシロヤは灯台を降りて、クロトに跨がった。

「クロト！ 今すぐ城に向かうぞ！」

そのまま走ろうとした瞬間、シロヤの頭上が光った。
流れ星かと思ったが、明らかにおかしい。軌道が地上に向かっていくような気がしたからだ。

シロヤの目は間違いではなかった。流れ星に似た何かは、高速で地上に向かって降ってくる！

「うわぁ！ クロト！ しゃがめ！」

流れ星に似た何かは、そのままシロヤ達の目の前に落ちていった。
軽い砂ぼこりが舞う中を、シロヤとクロトは確認した。へこんだ砂の中にいたのは、杖を持った人だった。

「ごほお！ ごほお！ ぐうぐつほお！」

人は軽く砂を払い、見に来たシロヤに声をかけた。

「シロヤ様！」

「あなたは・・・リーグン様！」

砂に埋まっていた流れ星に似た何かは、杖を持ったリーグンだった。

リーグンはすぐさま表情を引き締め、シロヤに言った。

「パレードが始まるうとしています！父上率いるバスナダ七人衆も控えています！」

シロヤは聞かされたと同時に走った。その後ろをついてくるリーグン。

「シロヤ様！転移魔法なら私も使えます！今すぐシロヤ様をプルーパー様達の元へ！」

リーグンは杖を構えて、詠唱を始めた。

「・・・シロヤ様、女王様の命をお願いします！」

リーグンの言葉が聞こえた瞬間、シロヤの体が光に包まれた。そして光が消えた頃には、シロヤの姿はなかった。

刺客

包んでいた光がゆつくりと消えて、視界が徐々に回復してきた。手足の感覚も徐々に回復してきた。シロヤはゆつくりと指を動かした。手を上げて見てみると、指の表面に砂が付着していた。

シロヤはようやく、自分が倒れていることに気づいた。

「シロヤ君！」

突如気づいた声、頭を上げて周りを確認すると、ブルーパとバルーシがシロヤに駆け寄ってきた。

「ずいぶん遅かったわね。」

「すいません・・・リーグがシアン様を転移魔法で・・・。」

「なるほど、シロヤ様を灯台に置き去りにしたわけですか。」

「リーグンに話をつけといて良かったわね。」

ゆつくりと立ち上がって、シロヤは服についていた砂をはたき落とした。

「じゃあ急ぎましょう！パレードが始まっちゃうわ。」

三人は、星が飾られている広場にたどり着いた。パレードを見るために、街の人達は皆城の前に集まってしまったためだろうか、人の気配はない。

「リーグの目的が何にしろ、星の近くに来る可能性は非常に高いわね。」

「ならばここで奇襲をかけるのが得策でしょうな。」

ブルーパとバルーシはが、星を見ながら作戦会議を始めた。

「・・・。」

二人の作戦会議を聞いていたシロヤは、苦い顔をして黙りこんだ。二人は、リーグの目的が暗殺だということを知らない。だから、今こうやっていることがリーグの目的に対して有効だとは言えない。しかし、暗殺の話をしてはいけないとレジオンに言われている。

「うう……。」

言わなければ駄目な気もする。しかし言っではいけない。そんな板挟みをくらって困惑するシロヤ。

「シロヤ君？どうしたの？」

「え？ああいや！何でもないです……。」

どうやら葛藤が表に出てしまっていたようだ。シロヤは慌てて笑顔で答えた。

……。やはり言った方がいいのかもしれない。シロヤは激しい葛藤の末、重い口を開こうとした。

「あ……。あの！」

ヒュン！

「！！！！伏せて！」

ブルーパが叫ぶと同時に、シロヤとバルーシが伏せる。二人の直線上から、銀色の何かが飛んできた。

「く！誰だ！」

すぐさま体制を立て直したバルーシが、飛んできた方向に向かって叫んだ。

「交わされましたな。」

「あはは！本当だー！」

「あんな的を相手に外すとは……。」

「だからこいつに任せるのはやめようと言ったのに……。」

「まあいいんじゃない？どっちにしろ運命は変わらないんだしさ。」

「しかし奴らは苦しみながら死ぬ方を選んだようだな。」

「……。」

そこに立っていたのは、七人の老若男女だった。

「貴方達は……。バスナダ七人衆！」

「ええ！あれがバスナダ七人衆？」

高齡の政治家ばかりだと思っていたが、立っている人達は若い人

もいるし女性もいる。そして、七人全員が武器を持っていた。

「レーグ様の命令で三人を殺すように言われました。」

「私達が最優先すべき相手がここにいて好都合だわ。」

そう言つと、一人がボウガンをシロヤに向けた。

「貴方達まさか・・・シロヤ君が目的なの？」

「そうだよ！今度は外さないからね！」

ボウガンの引き金が引かれ、矢がシロヤに向かって高速で放たれた！

「うわあああ！」

シロヤは思わず目を閉じた。

・・・・・・・・・・。

暫しの静寂、一番に声を出したのは、ボウガンを放った人だった。

「うつそー！」

シロヤは目を開けて、前を確認した。

矢は自分には届かずに、第三者によって受け止められていた。

「ぐう・・・。」

矢を止めたのはバルーシだった。バルーシは放たれた矢をキャッチしていたが、高速の矢を受けてしまったことで、手からはかなりの出血をしていた。

「バルーシさん！」

「くっ・・・目的は星じゃないのか・・・。」

「その通りだ！」

またもや聞こえた第三者の声。それは、七人衆がいる側とは反対側の所からだった。

「ブルーパ！バルーシ！レーグの本来の目的は星じゃない！シアン女王の暗殺だ！」

「なんですって！」

「それは本当ですか！レジオンさん！」

声の主はレジオンだった。そして、リーグの本来の目的を聞かされた二人が目を丸くした。

「狙いはパレードの最中だ！今すぐリーグの場所に行かなきゃ手遅れになるぞ！」

それを聞いた瞬間、レジオンが走り出した。それについていくプルパ。しかしシロヤは、走るのをためらった。

「バルーシさん！」

「シロヤ様！ここは私が！」

いくら兵団長と言えど、七人同時に相手取るのは無理がある。

「シロヤ様、ご心配なさらずに。すぐに後を追います。」

後ろを見て、軽くうなづくバルーシ。それを見たシロヤは、決心して走り出した。

「あはは、本当に大丈夫だと思ってるの？」

バルーシは軽く顔をしかめた。

バスナダ七人衆を同時に相手取るのは容易ではないのは、バルーシが一番よくわかっていた。

「わかってますよ・・・そのくらい！」

バルーシは、七人に向かって突撃した。

戦中

「レジオンさん！暗殺の件はブルーパ様達には言わないって！」

レジオンの後ろを走って追うシロヤ。

「七人衆がお前を狙ってたんだ！一人にしておくとお前もシアン女王と同じように暗殺されてたところだったんだ！」

走りながらレジオンが叫んだ。

「シロヤ君の暗殺？レーグは何がしたいのかしら？」

同じく走りながら、ブルーパが首をかしげた。

「きゃははは！死んじゃえー！」

「ぐっ！」

放ったボウガンがバルーシの頬をかすった。かすった部分から、ゆっくりと少量の血が流れる。

しかし、バルーシは怯むことなく突っ込んだ。

「・・・！」

「うわわわ！」

剣を持っていた二人に飛びかかる。二人は同時に飛び退いた。バルーシの拳が空を切るが、そのままの勢いを殺さずに一人に向かって突っ込む。

「うぐっ！」

一人の腹にバルーシの拳が炸裂した！腹を押さえ込んで倒れる一人の剣を、バルーシは空中でキャッチした。そのまま空中で一回転して、地面に着地したと同時に振り向いて剣を構えた。

「これで・・・互角だ。」

剣を構えたと同時に、六人は体を震わせた。剣を持っただけで、バルーシの威圧感が変わったからだ。

「急に変わったわね・・・。」

「なるほど、水を得た魚というわけですか。」

威圧感に圧倒される相手。しかし、その中の一人が突然叫んだ。
「こんなの・・・ハツタリだ！」

激昂して銃を構える。しかし、銃口を向けられてもバルーシは一切動かない。

そんなバルーシを見て、相手はこめかみをピクリと動かした。

「調子に・・・乗るな！」

激しい銃声が三回鳴り響く。銃口から出る煙が、発砲したことを表していた。

しかし・・・。

「・・・なっ！」

その場にいた全員が啞然としていた。確かに弾は放たれた。しかし、バルーシは全くの無傷だった。

弾を放った相手は驚いたような顔をしたが、すぐさま表情を爆発させた。

「ふざけるなあ！」

またもや激昂。そして銃声。

キンキンキンキイーン！

鳴り響く銃声と金属音。そして、立っているのは無傷のバルーシ。

「まさか・・・剣で銃を・・・。」

バルーシの足元には、六発の弾丸が転がっていた。そして、バルーシの剣からは煙が上がっていた。

「うそー！」

「さすがは兵団長・・・。」

「・・・。」

「侮れませんな・・・。」

思わず全員がバルーシに向かって、感心したような声を上げた。

「関係ない！俺が仕留める！」

うずくまっていた一人が立ち上がって、バルーシに向かって飛び

かった。

「無茶ですよ！」

後ろにいたもう一人も、バルーシに向かっていく。

「軌道が・・・まるわかりだ。」

飛びかかった一人の拳の軌道を読んで、ギリギリで交わして蹴りを入れる。

「ぐふ・・・。」

気絶したのを確認したのち、足でぶっ飛ばす。そして、向かってくるもう一人に目を向けた。

「一直線に突撃か・・・。」

倒れた一人の後ろから飛び込んできたもう一人を、バク転で交わす。飛び込んできた勢いでよろけているのを狙って、前転をして頭にかかと落としを叩き込む。

「ぐっ！」

バルーシは前転の勢いを殺さずに跳躍して、ボウガンを持っている一人を狙った。

「うわぁ！」

虚を突かれて動けなくなった相手に、剣を降り下ろした。

キン！

「しまった！」

突如横から鳴り響く銃声。地面に落ちる剣。弾は、バルーシの持っていた剣を弾き飛ばした。

「よそ見しすぎだ！」

「くっ！」

急いで剣を拾おうと体制を立て直す、その一瞬の隙を狙って、ボウガンが構えられた。

「チャーンズ！」

ボウガンがバルーシに向かって、空を切って進った。

「ぐああああ！！！」

「あれー？」

心臓を狙って放ったボウガンは、バルーシの脇腹を貫いた。空中で急いで体制を変えて、直撃を避けたのだ。

しかし、ボウガンをまともに食らったことに変わりはない。バルーシの脇腹が瞬時に赤くに染まる。

「くっ……！」

苦痛の表情を浮かべながら、バルーシは剣を拾って構えた。

「……。」

剣を持った一人が、バルーシに向かって切りかかる。バルーシも負けじと剣で応戦する。しかし、ダメージを負っている分、バルーシの動きは鈍くなっていた。

「くっ！」

「……。」

徐々にダメージを負っていくバルーシ。どんどん体が斬られていき、身体中から血を流していく。

剣だけではなく、横から来るボウガンや銃も、バルーシに更なる傷を負わせている。

徐々に追い詰められていくバルーシ。

「くそ……このままでは……長くは持たない……。」

諦めが頭をよぎる。即座にバルーシは頭を振って考えをやめた。

そうだ！もし今、戦っているのがシロヤ様なら、諦めたりはしない！ならば自分が諦めてはいけないんだ！

「長く持たないなら……刺し違えてでも倒す！」

バルーシは、頭を狙って降り下ろされた剣に向かっていった。

「うおおおおお！！！」

根性

「・・・！」

剣を持った相手は固まった。それどころか、他の四人も同じく固まっていた。

バルーシの頭を狙って降り下ろされた剣は、確かにバルーシにヒツトした。

「くう・・・ううう！」

ヒツトしているが、バルーシは倒れない。バルーシは、向かってくる剣を頭で受け止めたのだ。

そしてそのまま、頭に剣の刃が食い込んでいる状態から、バルーシは反撃した。

「・・・ぐっ！」

今まで声を出していなかった相手が、初めて苦しみの声を上げた。鳩尾に打撃を食らった相手は、そのまま膝について倒れた。

「あ・・・あり得ない・・・。」

「すごい出血量・・・。」

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・。」

肩で息をするバルーシ。

「でも、そろそろヤバんじゃないかしら？」

「そうですね。それだけダメージがあれば・・・。」

今、バルーシは立っている。しかし、今立っていることが奇跡だということとは、バルーシが一番よくわかっていた。

全身に刻まれた剣、銃、ボウガンの傷。ボウガンが貫通したことで真っ赤に染まる脇腹。そして、頭には剣を真っ向から受け止めたためにできた深い傷。

流れ出る血は、バルーシの体、頭を真っ赤に染めあげている。

そして、バルーシは目がぼぼ見えていない。失明ではないが、視界はぼやけていて周りを認識していない。

しかし、バルーシは立っている。そして、残った七人衆の内の四人に向かつていった。

「な！まだ動けるの！？」

「こいつ・・・不死身か？」

ボウガンと銃をそれぞれ構える。

今のバルーシに、戦術をその場で考えるような力は残ってない。

バルーシを動かしているのは、シアンやシロヤ等、この国に住む人々、守らなければならない人々への忠誠心。

そして、生まれながら人が持つっている力。バルーシ特有とも言える、バルーシの心の力。

”根性”

「うきや！」

「うぐあ！」

バルーシに恐怖した二人は、一瞬の隙を作ってしまった。バルーシはそれを見逃さなかった。すかさず繰り出された打撃は、二人を地に伏せさせた。

向き直って、残りの二人に向かつて突撃するバルーシ。

「どこまで恐ろしいの・・・？この男は。」

「油断なりません・・・。」

二人は武器を素早く取り出し、素早く構えた。

一人は槍、もう一人は片手斧、どちらも近距離戦用の武器だ。

すぐさま、バルーシは剣を取り出して槍と片手斧を防いだ。そして始まる二対一の競り合い。バルーシが不利なのは言うまでもないが、バルーシはただひたすらに競り合いを続けた。

「くっ！」

「・・・！」

二人は、いつの間にかバルーシに圧倒されていた。次第に後ろへと後ずさっていく二人。

そして・・・。

ガキイイイン！

「うっ！」

「ぐわぁ！」

二人の武器を弾き飛ばしたバルーシは、そのままの勢いで蹴りを放った。

綺麗な弧を描いて、二人は飛んでいった。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

激しく息をしながら、バルーシは周りを見回した。

バルーシには見えていないが、七人衆は全員倒れていた。

「後を・・・追わなければ・・・」

ふらふらのまま、バルーシは三人が向かっていった方角へと歩きだした。

ヒュン！

「えっ・・・？」

突如後ろから聞こえた、空気を切り裂く音。音の正体は・・・。

「ボウ・・・ガン・・・？」

そしてそのボウガンは、ふらふらのバルーシの足を貫いた。

「キャハハハ！油断しすぎだよ！」

「まさかここまで油断しているとは・・・」

「まさか私達が立ち上がるなんて思いもよらなかったでしょうね。」

「詰めが甘いとはこのことでしょうか。」

「・・・」

立ち上がったのは五人だった。

「立ち上がったのは我々だけですか？」

「最初の二人はダメージを受ける前に気絶させられたからでしょうね。」

「キャハハハ！ダッサーイ！」
全員、武器を構え直す。

そしてバルーシは、新たに与えられたダメージによって完全に意識を手放そうとしていた。

「キャハハハ！早く死んじゃえ！」

さらにバルーシを追い詰めようと、ボウガンをさらに構える。

もはや真っ直ぐ歩けないバルーシは、それに抗うことができない。

「キャハハハ！」

笑いながら、ボウガンの引き金を引いた。

キン！

「え！？」

確かにバルーシの背中を狙って放ったボウガンは、空中で方向転換したかと思えば、そのまま勢いをなくして砂の上に落ちた。

そして、落ちたボウガンの傍らには、同じく勢いをなくして落ちた物体が落ちていた。

「これって・・・銃弾？」

そんな事が起きてることを知らないバルーシは、そのまま勢いをなくして倒れこんだ。

「よくやったな、バルーシ。」

倒れこむバルーシを受け止める一人の男。もちろん、バルーシはその男を知っていた。

「バルーシに変わって、今度は俺がお相手しよう。」

そして男——ランブウは銃を取り出して構えた。

銃士

「お前は確か・・・ランブウ！」

「ご名答。」

返事と同時に、ランブウは持っていた銃を発砲した。

キン！

「ひ！」

相手が持っていたボウガンを弾き飛ばす。それを見た他の四人が、ほぼ同時に武器を構え直す。

「・・・遅い。」

相手が構え直すと同時に、ランブウは懷に手を入れながら引き金を引いた。

「ぐ！」

「・・・！」

素早く放たれた二発の銃弾が、二人の武器を弾き飛ばした。

それと同時に、懷から勢いよく手が引き抜かれた。引き抜かれた手には、銃が一丁握られていた。ランブウは華麗なガンスピンを決めながら、もう一丁の銃を素早く放った。

「わ！」

「う！」

引き抜かれた方の銃で、残り二人の武器を弾き飛ばす。

「流石ね・・・。」

素早く武器を取ろうとした五人。しかし、五人の手が武器に触れることはなかった。

「くう！」

「きゃあ！」

「うう！」

「ぐわっ！」
「・・・！」

ほぼ同時に五人がうずくまる。五人の手が、みるみるうちに真っ赤に染まる。ランブウは、五人の手に狙いを定めて、ほぼ同時とも言える速度で銃を五発放ったのだ。

ランブウは、静かに銃をしまった。

「ま！待て！」

一人が立ち上がって、震える手で武器を持って叫んだ。

「まだだ！まだ利き腕をやらただけだ！」

「そ！そうだ！俺はまだやれる！」

一人がそう言うのと、銃口をランブウに向けた。しかし、ランブウは動かない。

「やめとけ。怪我じゃすまなくなるぞ。」

「黙れ・・・！」

放たれる銃弾。それと同時に、ランブウも銃弾を放つ。

キイイン！

一際甲高い音が響く。放たれた敵の銃弾は、ランブウが放った銃弾によって勢いをなくして、ふわりと宙を舞った。

「まさか・・・放たれた銃弾を・・・。」

ランブウは、相手が放った銃弾を銃弾で弾いたのだ。

それだけでは終わらないと、ランブウはさらに発砲する。

ランブウが放った二発の銃弾は、またさらに空中で甲高い音を放った。

ヒュン！

「うわあああ！」

「きゃあああ！」

ランブウが放った銃弾は二発だが、二人を掠めたのはそれぞれ二発の銃弾だった。

訳がわからない二人は、そのまま体が膠着してしまった。

「ランブウ・・・舞っていた銃弾に銃弾を当てたのね。」

「よくわかったな。」

涼しい顔をしているが、ランブウが行ったのは高等技術と言ってもまだ足りないぐらいの技だ。

単に弾が当たっただけでは、勢いをなくした弾の勢いを戻すことはできない。当てる角度や当てる場所等も計算しなければできない芸当である。さらにランブウは、勢いをなくした弾と新たに放った弾の軌道を、四つの銃弾をぶつけることで操作したのだ。

これだけの計算を一瞬で行えるのは、銃士としての才能。そしてランブウが持っている特有の力。

” 集中力 ”

「くそ！お前らなんなんだよ！」

そう言つと、五人が武器を構え直した。

「まだやるのかい・・・しょうがないなあ・・・。」

ランブウは足を軽く振りかぶつて、地面を蹴りあげた。

「うわあ！」

上がる砂埃は、どんどんと強くなつていった。

五人は、完全に砂で封じられた空間に分断されてしまった。

「くそ！どこだ！どこにいる！」

一人が激昂しながら周りを見渡す。しかし、どんどんと悪くなつてく視界は、砂以外を捉えていない。

「なめやがつて・・・うおらあああ！」 銃を乱射する。その音を聞いたもう一人が、慌てた様子で叫んだ。

「ダメ！こんな砂埃が舞つてる中で銃を撃つては！」

「うるせええええ！」

銃口から放たれる銃弾は、空しく空を切って落ちていく。そして、銃弾が放たれたと同時に出てくる、小さな火花。

当人がそれを危険なことだとわかったのは、五人が突然の大爆発に巻き込まれた後だった。

「やれやれ……。」

砂埃が、ランブウの後ろで突然爆発した。その爆発は、外から見たら小規模に見えるが、砂埃の中の者にとっては大爆発と感ずるだろう。

「銃士なら……戦う環境を考えて銃を扱わなければな。ましてや……バスナダの銃士にでもなつたらな。」

砂埃が舞う中で銃を放つことは、バスナダの銃士にとっては危険行為だとされている。それも当然、そんな状況下で銃を撃つとどうなるのかというのは、何回も教えられていることなのだ。

バスナダという環境であるからこそその銃士の弱点。

「撃った時に出る小さな火花は、舞う砂の一粒に引火したと同時に連鎖反応を起こし、爆発する。」

俗に言う”粉塵爆破”と呼ばれている現象だ。

「冷静さを欠いたからこうなるんだぜ。覚えておきな、バスナダ七人衆。」

爆発した所を見ると、まだ煙が上がっていて確認できない。

「まあ……死んではいないだろうな。あいつらも……こいつも。」

「

ランブウは、足元で倒れているバルーシに目をやった。

「ほら起きろ！後を追うんだろ？」

倒れていたバルーシは、いつの間にか小さな寝息をたてていた。

分断

レジオンは、城に向けて走っていた。それを追うブルーパとシロヤ。

しばらくしてたどり着いたのは、城から少し離れた砂丘だった。

砂丘に登りきった瞬間、レジオンは背中の大剣の柄に手をかけた。

「さて・・・そろそろ出てきてもらおうか？レーグ。」

「えっ？」

レジオンが呟くと、突然砂丘の一部が大きく盛り上がった。

「うわぁ！」

急に盛り上がったことによって、足元の砂が暴れまわる。耐えきれずに、シロヤはバランスを崩した。

盛り上がった砂が徐々に落ちていき、その中が明らかになっていく。その中にいたのは、自分の身長よりも長い杖を持っている小柄な老人だった。

「ヒヒヒヒヒ！よくわかりましたね！」

「当然だ。お前とは城に入ってから同期生だからな。」

対峙する二人。レジオンは今にも大剣を抜こうとしている。レーグも同じように構えたが、一瞬で構えを解き、含み笑いを始めた。

「ヒヒヒヒヒ！あなたと戦うのは次の機会にさせてもらいましょう。」

そう言うと、レーグはレジオンの方に向かって、杖を軽く振った。

ゴゴゴゴゴ！

「何だ！？」

そう言った瞬間、レジオンの周りの砂が動き始めた。レジオンを包み込むように盛り上がる砂。その場から離れようと地面を蹴った。
「無駄ですよ！ヒヒヒヒヒ！」

さらに砂が盛り上がり、一つの大きな柱となってレジオンに向か
ってきた。

「ちっ！」

間一髪で向かってきた柱を避けるが、その瞬間に、レジオンの体
は砂の檻の中に封じられた。

「くそ！叩き斬ってやる！」

レジオンは、背中の大剣で何度も砂の格子を斬りつけるが、叩き
斬るところかひびすらはいらない。

それを見たレーグは、再び含み笑いをしながら向き直った。

「ヒヒヒヒヒ！あともう一人！」

レーグは再び杖を振った。その瞬間、プルーパの周りがレジオン
と同じように盛り上がった。

「プルーパ様！」

みるみるうちに形成されていく砂の檻。

「くっ！」

砂の格子を蹴りつけるプルーパ。しかし、大剣で斬りつけても効
果がないほどの強度を持ったため、蹴り程度ではダメージは無いに等
しかった。

「なら・・・これはどう!?」

プルーパは、ドレスの足元から短剣を取り出した。手一杯に短剣
を持ちながら、プルーパは激しい舞を踊った。

だんだんと激しくなる舞、そして勢いが最高潮になったとき、プ
ルーパは持っていた短剣を全て放った。

しかし・・・。

「ヒヒヒヒヒ！無駄無駄！」

短剣はレーグには届かず、レーグの前に現れた砂の柱が、飛んで
きた短剣を砂の中に封じ込めた。気づけばプルーパは、完全に砂の
檻に捕らえられていた。

「ヒヒヒヒヒ！」

しばらく続く含み笑い。

気づけば、そこにはシロヤだけが残っていた。

「ヒビヒビヒ！何故自分だけが取り残されたのかわからない、といった表情ですね。」

レーグは含み笑いを続けながら、タバコを吸い始めた。

「俺は・・・閉じ込めないのか？」

そう聞いた瞬間、レーグは今までにないくらいに高笑いを始めた。

「ヒーヒツヒツヒツヒ！何を言っているのですか！私の今の狙いはあなたなのですよ？」

「今の狙いだと・・・俺が目的ってどういうことだ！？」

レーグは再び高笑いしながら話を続けた。

「私達が望むのは、シアン現女王の失脚、そして死。」

「それと俺がどう関係しているんだ？」

レーグはさらに高笑いをした。

「ヒーヒツヒツヒツヒ！まだわからないのですか！？」

高笑いをしながら、レーグはタバコの前で指を鳴らした。その瞬間、タバコの火が一瞬にして消え去った。

加えていたタバコを投げ捨て、レーグはさらに続けた。

「まだわからないんですか？あなたが死ねば、シアン女王がどうなるのかというのを！」

シロヤは固まった。

「わからないようですね。まあ、わからないなら好都合です。このまま死んでください！」

レーグが軽く杖を振ると、砂の槍が現れてシロヤに向かって放たれた。

棒立ちのシロヤに向かって高速で飛んでいく砂の槍。

「シロヤ君！」

「シロヤ！」

檻の中の二人が叫ぶ。

間に合わないと思った直後、シロヤと槍の間に突然、黒く大きな影が割り込んだ。

ヒュン！

槍が突き刺さる。しかしそれはシロヤではなく、間に割り込んだ黒い影にだった。

「お前……。」

割り込んだのはクロトだった。砂の槍をともに食らったクロトの体が、少しずつ血の色を含んでいく。

「クロト！しっかりしろクロト！」

倒れるクロトに駆け寄る。しかし、近づいた瞬間にクロトは大きく叫んだ。

まるで、クロトが「僕の事は気にしないで！」と言っているようだった。そしてシロヤには、今のクロトの叫び声がそう聞こえた。ゆっくりと立ち上がり、背中 of 剣を抜いて構える。

「まだ……俺はシアン様に」 答え ” を出してない。 答えを出すつて……シアン様に言ったんだ！」

決意を固め、シロヤはレーグに向かって飛び出した。

防戦

突撃してくるシロヤをみて、レーグが軽く含み笑いをした。

「ヒヒヒヒヒ！攻めが単調すぎですよ！」

レーグが杖を振るうと、突然砂が盛り上がって塔となり、シロヤとレーグの間に立ちふさがった。急な障害が出現して、シロヤは立ち止まった。

「ヒヒヒヒヒ！」

砂の塔の向こうから含み笑いが聞こえた。その瞬間、砂の塔が盛り上がり、そこから砂の針が放たれた。

「うわぁ！」

飛んでくる砂の針を避けようと、シロヤは横に跳んだ。

避けきれなかった分の針がシロヤの体を掠めて、軽い傷がいくつも刻まれた。

「なるほど、反射神経は中々のものですね。」

砂の塔の奥からさらに聞こえるレーグの声。

その声が聞こえると同時に、シロヤに向かってさらに針が放たれた。

すぐさま体制を立て直して、横に跳ばうと足に力を込めたした瞬間、シロヤの足元の砂が盛り上がった。

「！」

盛り上がった砂がシロヤの脇腹に向かって伸びていった。

「うっ！」

足元からの急な攻撃に対応できず、直撃を食らったシロヤ。よけるシロヤに向かって、放たれた針が襲いかかった。

「くっ！」

真正面から飛んでくる針。構えた剣で体を守るが、腕や足に針が刺さり、シロヤの服を赤く染めていく。

「ヒヒヒヒヒ！随分と粘りますね。」

「ぐっ・・・このままじゃ・・・。」

これ以上は持たないと思ったシロヤは、何かを決心するかのよう
に目を閉じた。

カッ！と目を見開き、シロヤは自分の体を守っていた剣を下ろし
た。

「シロヤ君！？」

「くう！」

思わずブルーパが叫んだ。

剣で守っていた体に針が刺さり、シロヤの顔が苦痛に歪んでいく。
「ヒヒヒヒヒ！諦めて死ぬ気になりましたか？」

さらに笑うレーグ。そんなレーグを見たシロヤの顔が、一瞬笑み
に変わった。

「誰が・・・そんなこと言った！」

叫ぶと同時に、シロヤは足を前に出した。

「シロヤ！まさかお前・・・進む気か！？」
思わずレジオンが叫んだ。

シロヤは、針が飛んでくる方に向かって歩き始めた。勢いを増し
ていく針を身体中に受けながら、シロヤは一步一步踏み出していっ
た。

「むう！針は効果なしですか。」

途端に針が止み、さらに大きく砂の塔が盛り上がった。

「ヒヒヒヒヒ！これはどうですか！？」

盛り上がった砂から、巨大な砂の剣が現れ、シロヤに向かって伸
び始めた。巨大な砂の剣を前にして、シロヤは下ろしていた剣を再
び構えた。

「ヒヒヒヒヒ！止める気ですか？無駄ですよ無駄！ヒーヒヒヒヒ！」
高笑いをするレーグ。

しかし、シロヤの表情は決意に満ちていた。

「止める・・・止めてみせる！」

砂の剣が勢いを増し、シロヤに襲いかかる。それに向かって、シ

ロヤは剣を振るった。

「シロヤ！」

レジオンが叫んだと同時に、砂の剣はシロヤに到達した。

「ぐううう！！！」

シロヤの剣と砂の剣がぶつかり合う。砂の剣の勢いを真つ向に受け止めるシロヤの体は、どんどん後ろに押されていく。剣を持つ手がカタカタと揺れ、次第に力が入らなくなる。

「そろそろ限界のようですね。ではトドメといきましょうか！」

砂の剣がさらに大きくなり、勢いも増していった。

「くう！」

「ヒヒヒヒヒ！」

シロヤの体がブレ始める。勢いを増した砂の剣を真正面から受け止めているシロヤの体は、予想以上にスタミナを消耗していた。

しかし、シロヤは手の力を弛めなかった。

一方、砂の剣を維持し続けているレーグは、どんどんと表情を歪ませていた。

「くう・・・なぜここまで持ちこたえうとは・・・。」

対象物（ここだという砂）を形にして維持するのは、術者に対して予想以上の負担をかける。それは、“賢者”であるレーグも例外ではない。

「仕方ありません・・・。」

小さく呟くと、レーグは砂の剣の勢いを止め、間に立ちふさがっていた砂の塔を崩した。

それと共に、砂の剣が形をなくして落ちていった。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・。」

肩で息をするシロヤ。

「砂の剣を受け止めるとは・・・よほどの名刀でなければ不可能なはずですが・・・。」

もちろん、シロヤの剣が名刀ではないのは、シロヤが一番よく知っていた。

「何で・・・？」

剣を見つめるシロヤ。すると、剣が急に言葉を走った。

「ロ・さ・・・シロ・・・ま・・・シロヤさま・・・シロヤ様！」

か細い声がシロヤの耳に響く。その声を、シロヤは聞いたことがあった。

「この声は・・・クピンさん？」

声の主がクピンであることがわかった瞬間、頭に映像が流れこんだ。

「クピン！これを握って！」

「これって・・・シロヤ様の剣？」

「ほら、早く！」

ブルーパに促され、クピンは剣を持って目を閉じた。

その瞬間、剣にクピンの霊力が流れこんだ。

「クピンさん・・・。」

映像が止み、シロヤは再び剣を見つめた。

「・・・ありがとう。」

剣を見つめたまま、シロヤはクピンへのお礼の言葉を呟いた。

策略

クピンが靈力を注ぎ込んだ結果、シロヤの剣は名刀と言えるレベルにまで上がっていた。

「ヒヒヒヒヒ！無名の名刀が相手ですか。これはお厳しい・・・ヒヒヒヒヒ！」

口では厳しいと言っているが、その表情には余裕があった。

「それならば手加減はいらないでしょう。ヒヒヒヒヒ！」

軽い含み笑いをしながら、レーグは再び杖を振るった。

身構えるシロヤの前に現れたのは、四体の砂の人形だった。

「さあ、サンドール達よ。お相手して差し上げなさい。」

そう言った瞬間、四体の砂人形が同時にシロヤに飛びかかった。

砂人形の動きは早く、さらに四体同時に相手しているシロヤは、明らかに不利だった。

剣がレベルアップしたとはいえ、シロヤ自身の力が上がったわけではない。四体の砂人形を同時に相手取り、シロヤは苦戦を強いられて苦い顔をする。

「ぐっ・・・。」

「ヒヒヒヒヒ！」

四体の砂人形に翻弄されるシロヤ。それを見ながら、レーグはさらに含み笑いを続けた。

次第にシロヤの体に傷が増えていく。

「くそっ！」

決死の覚悟で剣を振るう。剣が砂を捉え、一体の砂人形がその姿を崩した。

「えっ？」

確かに剣は砂人形を捉えたが、切っても手応えを感じずに崩れてしまった。

明らかに脆い。さっきの砂の剣に比べると、その差は歴然だ。

「まさか・・・魔力を節約してるのか？」

一瞬の閃きがシロヤによぎる。

レーグは、先程の砂の塔と砂の針と砂の剣で、魔力をかなり使っていた。さらに、レジオンとブルーパを封じている砂の檻の維持コストを加えると、レーグの魔力は半分以上は減っていた。

しかし、賢者は自然と魔力が回復する。そして、今使っている砂人形の維持コストは非常に低い。つまり、レーグは今、魔力を回復する時間稼ぎを砂人形に任せているのだ。

砂人形が脆いのは、砂人形の耐久力はレーグが消費する維持コストと比例するためである。現在レーグが消費している維持コストは、砂人形の形を保たせて戦わせる程度しか消費していない。

シロヤはそれに気づき、すぐさま攻撃の体制に入る。

一体を失ったことによって、砂人形のコンビネーションに隙間ができて始めていた。タイミングを見計らい、シロヤは隙間を狙って剣を振るう。

砂人形一体が形を崩す。

「ヒヒヒヒヒ！」

「！」

含み笑いが聞こえた。見てみると、レーグの目の前に何かが現れた。現れたものは、高速回転しながらシロヤに向かってくる円盤状の砂だった。

「砂の・・・ノコギリ！」

すぐさま体制を変えて飛び出すシロヤ。続けて二体の砂人形もシロヤを追う。

「ヒヒヒヒヒ！逃げてても無駄ですよ！」

ノコギリがもう一つ増えた。日本の砂のノコギリもシロヤのあとを追う。

「ちっ！」

逃げ回るシロヤ。それを追う砂人形と砂のノコギリ。時には砂人形を誘導するかのように、時には砂のノコギリを撒くかのように動

き回る。

しかし、どれだけの動きをしても、砂人形も砂のノコギリも諦めてはくれない。

「・・・うわぁ！」

急に転んだシロヤ。その前には、二体の砂人形が待ち構えていた。「ヒビヒビヒ！もう終わりですよ！やってしまいなさい！」

砂人形の手が伸びていき、先が針のように尖った。それを見たシロヤは、後ろに手をつきながら笑い出した。

「ヒビヒビヒ、死の直前が怖くて壊れてしまいましたかな？」

「フフフフ・・・。」

笑みを止めないシロヤ。

そして、二体の砂人形がシロヤに向かって、尖った手を突き出した。

「！！！！やめろ！」

急な叫び。その叫び主は、シロヤに・・・ではなく、シロヤの前の砂人形のさらに後ろに叫んだ。

「お前達！避ける！避けるんだ！」

叫び主は、今度は砂人形に向かって叫んだ。

叫び主はレーグだった。レーグが叫んだのは、二回目は砂人形だが、一回目は砂のノコギリに向かってだった。

砂のノコギリは、シロヤに向かってどこまでも着いてくる。そして、今のノコギリの位置とシロヤの間には、砂の人形がいた。

どんどんと近づいていく二枚のノコギリ。後ろにノコギリが迫っていることを知らない砂人形。

そして・・・。

ザシュ！！！！

シロヤの前で、二体の砂人形が切れるような音と共に形を崩した。砂人形にぶつかっていった二枚の砂のノコギリも、同じく形を崩した。

「よし！何とかなった！」

体制を立て直したシロヤは、小さくガッツポーズをした。

「むう・・・まさか・・・人形とノコギリの位置を誘導してしましたね？」

ノコギリが出現してからのシロヤの動きは、人形とノコギリをぶつけるために誘導するためのものだったのだ。

再び剣を構えるシロヤ。それに対して、レーグは始めて表情を歪ませた。

「少々油断しましたね・・・では、そろそろ本気でいきましょうか！ヒヒヒヒヒ！」

レーグは杖を振るった。その瞬間、レーグの足元の砂が盛り上がり、レーグの腕を包み込んだ。

攻防

腕を包む砂が、次第に形となってくる。レーグの腕に現れたのは、
またもや巨大な砂の剣だった。

「また剣かよ・・・。」

「ヒヒヒヒヒ！ただの剣ではないですよ！」

そう言うのと、レーグは剣を振り上げて地面を切った。

「！！！！！！」

激しい音が鳴り響き、思わずシロヤは目を閉じた。

「ヒヒヒヒヒ！現実を確認しなさい！」

ゆっくりとシロヤは目を開け、レーグが切った地面を確認した。

「っ！！！！」

思わず後ろに下がる。

シロヤが見たのは、レーグが砂の剣で切った地面だった。砂の地
面は激しく切り裂かれ、まるで地割れのようになっていた。

「ヒヒヒヒヒ！では・・・行きますよ！」

間髪入れずに飛び出してくるレーグ。右肩を狙って繰り出された
剣を、シロヤは咄嗟に剣で受け止めた。

「ぐう！」

「ヒヒヒヒヒ！」

不気味に含み笑いを続けるレーグと拮抗するシロヤ。

砂の大剣を受け止めた時とは比べ物にならないくらいに重い一撃。
剣を持っている手に強い衝撃が走る。

「ちっ！」

「隙有り！」

強い衝撃を受けたシロヤの手が、一瞬弛んだ。その一瞬の隙を狙
って、レーグは体制を変えた。空中で重心を軸にして体を横回転さ

せ、シロヤが構えていた逆側に剣を持っていった。

ヒュン！

「なっ！」

受けが間に合わないと思ったシロヤは、身を屈めてしゃがみこんだ。レーグの剣が豪快に空を切る。

すかさずレーグに一撃を与えようと、思いっきり地面を蹴るシロヤ。勢いをつけて、シロヤは剣を振った。

ザシュ！

「！？」

手応えがなかった。空中で剣を振り切っているため、レーグは隙だらけなはずだ。しかし、シロヤの剣が捉えたのは砂の塊だった。砂の塊は、真つ二つに割れて地面に落ちていった。

「ダミー・・・？」

「ヒヒヒヒヒ！」

同じく剣を振り切って、隙だらけになったシロヤの後ろに現れたのは、同じく砂の塊だった。砂の塊はシロヤに向かって飛び込んでいき、射程距離内に入った時には、砂が無くなりレーグの姿が現れた。

「後ろとつたり！ヒヒヒヒヒ！」

シロヤを後ろから切りつけようと、レーグは剣を振り上げた。その瞬間、シロヤが動いた。

「っ！」

一瞬ためらったレーグ。しかし、シロヤは目立った動きをしなかった。

気にせずレーグは、シロヤの背中めがけて剣を降り下ろした。

キイイン！

「っ！？」

振り下ろした剣はシロヤには届かず、力によって軌道を変えられてしまった。空中でよろめきながら見てみると、シロヤは剣を左手に持ち替えていた。

「ぐう！なぜ左手に・・・。」

レーグは空中で体制を整えようとするが、その一瞬の隙に、シロヤは地を蹴っていた。

「しまった！狙いはそれか！」

「当たり前！」

空中で無防備な状態のレーグに、渾身のパンチを入れる。

「ぐう！」

後ろに吹き飛ぶレーグ。

シロヤは、後ろから来た剣を左手で持った剣で返すことで、その勢いを利用した右手での攻撃を狙ったのだ。

確かに、シロヤの利き手である右手で剣を受けた方が力を加えやすいが、左手の攻撃は慣れていないため、威力が落ちてしまう。

逆も同じだが、勢いをつけることで利き手じゃない方の手の力をカバーして、慣れている方の右手の攻撃の方には、さらなる勢いを足すことができたのだ。

「うう・・・戦闘中にそれだけの策を練ることができるとは・・・。」

「

よろめきながら、レーグが立ち上がる。

「ふう・・・やはり接近戦なんてアホらしいですね・・・。」

レーグはやれやれと言わんばかりに、両手を横にしてため息をついた。

「考えてみれば、賢者が剣での接近戦なんてバカみたいな話ではないですか？」

問いかけてきたレーグに、シロヤは無言のまま剣を構えた。

「そもそも、私は国を思っているからこそシアン様暗殺を決行したんですよ。」

「はあ？何言ってるんだ！」

さっきまでの戦意は消え去っていて、普段のリーグのような口調で淡々と語り続けた。

「シアン様は本来、いてはいけなかった存在。しかし、今日のバスナダを束ねる女王となっている。皮肉なものですな。ヒヒヒヒ！」
相変わらず、人をイライラさせる口調と含み笑いだ。シロヤは聞き流そうと剣を持ち直した。

「まあ・・・私はバスナダが好きですからね。願わくは私が新たな王となり、よりバスナダを住みやすく発展させようとしていたのですが・・・。」

「黙れ！お前は・・・バスナダを軍事国家にして全世界の頂点に！」

ドス！

「・・・えっ？」

突如現れた痛み。それは、シロヤの心臓部近くの痛みだった。

「もういいでしょう。あなたとシアン様の二人が死ぬことで、一番この国は平和になるのですから。」

「な・・・に・・・？」

「この国は私が責任を持って管理いたしますから。」

リーグは杖を軽く振るった。その瞬間、シロヤの胸に刺さっていた砂のトゲが、形を崩して地面に落ちていった。

窮地

「シロヤア！！！」

「シロヤ君！！！」

「ヒヒヒヒヒ！ヒヒヒヒヒ！ヒーヒヒヒ！」

レジオンとブルーパが同時に叫ぶ。その先にいるのは、高笑いを続けるレーグ。そして、まるで糸が切れたように膝から崩れ落ちるシロヤの姿があった。

「レーグウウウ！！！」

ドドドドドドドド！！！！

「！？」

突然、怒号とともにレーグの足元で砂が舞い上がった。

「誰だ！？」

レーグは、何かが飛んできた方向を向いた。

「貴様は・・・何故ここに・・・？」

レーグの向いている方向にいたのは、傷だらけの青年を抱えた男だった。

「若い新芽を摘むなんて・・・悪趣味すぎないか？レーグ。」

突然の乱入者——ランブウが、レーグに二丁の拳銃を向けた。

しかし・・・。

「ヒーヒヒヒ！誰が来たかと思えば・・・古株の門番風情の役立たずですか！ヒーヒヒヒ！」

嘲笑うかのように高笑いするレーグに、無言でランブウは銃弾を放った。

「ヒヒヒヒヒ！」

高笑いしながら、レーグは杖を振って砂の壁を作り出した。銃弾は砂の壁に阻まれ、壁の後ろにいるレーグには届かなかった。

「ちっ……。」

「ヒヒヒヒヒ！わからないんですか？銃士なんて低級クラスの間が賢者に立ち向かうこと自体が愚かだと言っことを！」

「黙れ……。」

構わず発砲しようと引き金に力を加えるランブウ。

「！？」

しかし、ランブウがいくら引き金に力を加えても、銃口から弾は発射されなかった。

ランブウが銃口を確認すると、銃口には砂が奥まで詰められていた。

「くそっ……。」

二丁の拳銃を素早くしまつて、流れるような素早い動作で、背中にかけてあつた散弾銃に手を伸ばした。

しかし、レーグにとっては今のランブウの動きは遅すぎるぐらいだった。

すぐさま杖を振るレーグ。その瞬間、ランブウの足元が鋭く盛り上がり、砂の針が出現してランブウの腕を貫いた。

「っ！」

砂の針を伝つて、ランブウの血が地面に落ちていく。血がだんだんと落ちていくにつれて、腕の力が無くなっていき、いつの間にか散弾銃を地面に落としてしまつていた。

「ヒヒヒヒヒ！腕破壊は銃士相手に一番効果的ですからね！」

再び杖を振ると、出現したのは砂の拳だった。砂の拳は、素早くランブウの鳩尾を狙つて伸びていった。

ドス！

「ぐう！」

そのまま後ろに吹つ飛ばされるランブウ。そして、ランブウに支えられていたバルーシは、支えを失つてしまい前のめりに倒れた。

「うう……。」

「そのゴミも処理しておきましょう。」

倒れた衝撃で目を覚ましたバルーシに向かって、リーグは軽く杖を振った。

その瞬間、バルーシの胸をめがけて、砂の針が素早く突き刺さった。

「ぐわああ！！！」

再び前のめりに倒れるバルーシ。倒れている所の砂が徐々に赤く染まっていった。

「リーグ……。シロヤ君だけじゃなくランブウとバルーシまでも……。許さない！」

檻の中のブルーパが激昂して、短剣を構えた。

「ヒヒヒヒヒ！さっき無駄だとわかったのではないのですか？」

リーグの言葉が終わる前に、ブルーパは短剣を高速で投げていた。「だから無駄だと言っているでしょう！ヒヒヒヒヒ！」

すぐさま砂の壁が出現して、ブルーパの短剣はそこで阻まれてしまった。

「ヒヒヒヒヒ！檻の中にも危険ですね……。ならば……。」

リーグは再び杖を振った。それはブルーパに向かってではなく、その後ろの砂の檻に向かってだった。

「危ない危ない！まさか砂の格子を破壊しようなんて……。」

見ると、砂の格子がひしゃげていた。ひしゃげた格子を破壊しようと、閉じ込められていたレジオンは、格子に何度も大剣をぶつけていた。

「ヒヒヒヒヒ！出られてはたまりませんから……。」

その瞬間、レジオンを包む檻が変化した。再び復活した格子。そして、新たに現れたのは、まるで拷問器具のような針の壁だった。

「ちっ！また破壊すればいいだけだろうが！」

再び大剣をぶつけた。

その瞬間、砂の格子から新たに砂が現れ、大剣もろともレジオン

を絡めとった。

「くそ！離しやがれ！」

暴れて砂から逃れようとしているレジオンに向かって、容赦なく近づいてくる。

そして・・・。

「ぐあああああ！！！！」

無情に貫かれるレジオンの体。おびただしい量の血が針の壁を真っ赤に染まる。

「レジオン！！！！」

ブルーパが叫んだ。

次の瞬間、ブルーパを閉じ込めていた砂の檻が変化した。

「えっ？何！？」

怯えた声を出すブルーパに向かって砂が伸び、ブルーパの体を絡めとった。

「いやあ！シロヤ君！シロヤ君！」

「無駄ですよ無駄！シロヤは死んだんですよ！ヒヒヒヒヒ！ヒーヒヒー！」

すでに目の前まで迫っていた砂の壁。解けない砂の拘束。ブルーパは思わず目を閉じた。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・。

絶望

目を閉じて死を覚悟したブルーパ。しかし、体に痛みは訪れてこなかった。

・・・自分はもう死んでいるのだろうか？

そんな考えが頭をよぎる。

「・・・。」

ゆつくりと目を開けるブルーパ。目の前の景色が頭に流れ込む。

「！！！！！！！！」

瞬間、ブルーパは声にならない叫びを上げた。針の壁は、ブルーパと壁の間に現れた第三者によって止められていた。第三者は壁の針を全身に受け、おびただしい量の血を出しながら壁の進行を止めていた。真っ赤な血がブルーパにまで届く勢いで吹き出し、ブルーパの頭をわずかに染めた。

「う・・・。」

「シロヤ君！！！！！！！！」

針の壁を、シロヤは体で止めていた。自分の血で服や髪を真っ赤に染めながら、シロヤは必死に壁を止めていた。

「ブルーパ・・・さ・・・ま・・・。」

「シロヤ君・・・！！！！！！」

消えそうな声で名前を呼ぶシロヤを見て、ブルーパはぼろぼろと涙を流した。そんなブルーパに、シロヤは必死に微笑んだ。

「もうやめて・・・！！シロヤ君・・・！！」

涙を流しながら懇願するブルーパだが、シロヤは何も言わずに微笑み続けた。

本来なら絶命してもおかしくないぐらいの傷を受けながらも、シロヤはまだ生きている。そんな事実を受け止められないレーグは、今までに見たことない程の叫びを上げた。

「うぬう！何故まだ生きているんですか！！！！」

軽く杖を振って砂の檻を壁ごと崩す。それによって、シロヤとブルーパは外へと出された。

すぐさまレーグは杖を震い、シロヤの足元に砂の針を作り出した。砂の針が勢いよくシロヤの両足を貫いた。

「ぐうう！」

「いやあ！もうやめて！」

ブルーパが叫んだ瞬間、新たに現れた砂の針が、同じくブルーパの足を貫いた。

「きゃあああ！！！」

「ぐ・・・ブルーパ様・・・！」

両足の支えを失って、ブルーパはそのまま前のめりに倒れこんだ。

「ヒヒヒヒ！素直に全身を貫かれて死んでいればいいものを！」

「レーグ・・・！レーグ！」

貫かれた足に精一杯の力を込めて、思いっきり地面を蹴る。そのままレーグめがけて、シロヤは我が身を投げ出すかのように走り出した。

「まだ動けるんですか？なら・・・こうしましょう！」

シロヤの進路の砂が盛り上がり、またもや砂の針が勢いよく飛び出て、シロヤの右胸を狙った。

「ぐ・・・うおお！」

走りながら叫ぶシロヤ。叫んだ衝撃で全身の傷から血が吹き出るのが、お構いなしにシロヤは走り続けた。

「右胸・・・狙いは・・・右胸！」

右胸を狙って飛び出てきた砂の針を避けて、その勢いのままレーグに体当たりした。

「うぐっ！」

シロヤの体当たりを受け、レーグは後ろに吹っ飛んだ。

「ぐうう！少しあなたをなめていたみたいですね！」

レーグはさらに杖を振るった。その瞬間、地響きと共に大量の砂がレーグの周りで浮き始めた。

「ヒヒヒヒヒ！」

また杖を振ると、大量の砂が大量の砂の槍へと変化した。

「ヒーヒヒヒ！これだけの砂の槍！避けられますかな！？ヒーヒヒヒ！」

三度杖を振ると、砂の槍がまるでマシンガンのようにシロヤに向けて放たれた。

「くうう！」

剣でその身を守りながら、ゆっくりと前に進もうと足を前に出す。しかし、その足を狙って砂の槍が降り注ぎ、シロヤの足をまるでサボテンのような姿に変えた。

「ううう！！！」

苦痛を訴えるような声が漏れる。しかし、攻撃は全く止まない。

踏み出した足だけでなく、もう片方の足や腕にも砂の槍が突き刺さり、頭を掠めた砂の槍は、わずかに先端を血で染めて地面に還っていく。

「そろそろ・・・幕を下ろしましょう！」

一際大きな拳動で杖を振ると、大量の砂の槍が一点に向かって降り注いだ。

「これで終局です！」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

リーグ以外の全員が同じ方向を見ていた。そして、声はおろか息すらままならない状況に陥っていた。

「シロヤ・・・君・・・。」

「シロヤ・・・シロヤ・・・！」

ブルーパとレジオンの声がどんどんと震えていく。もはやその声からは、冷静さを完全に欠いていた。

「ヒヒヒヒヒヒヒヒ！ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！ヒーヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！」

無情に響く高笑い。その先にいたのは、槍に上半身の大半を貫かれて、完全に力を無くしたシロヤの姿があった。

「シロヤ君・・・シロヤ・・・君・・・。」

倒れながら、いつまでも名前を呼び続けるプルーパー。いつの間にか地面の砂を握っていた。砂はいくら強く握っても、まるで流れるようにプルーパーの手から落ちていった。

サラサラと流れ落ちる砂。それはいつの間にか、小さな山を作っていた。

「シロヤ君・・・シロヤ君・・・！」

名前を呼び続けるプルーパーの目に、一瞬だけ砂の山が光ったように見えた。

一瞬だと思った光は、どんどんと強くなっていく。

「っ！」

一瞬強い光の後にプルーパーが目にしたのは、大量の光が砂丘の向こうから流れてくる光景だった。

呼応

砂丘の向こうから流れてきた光は、瞬く間に砂漠を包み込んでいく。光はさらに増えていき、やがて、倒れているレジオンやランブウやバルーシ、そして、全く動かないシロヤも包み込んだ。

「何ですかこれは！！何が起こっているんですか！？」

レーグは光に包まれながら、疑問の言葉を発している。

ブルーパは力を振り絞り、光輝く砂をすくって、霞む視界で砂を見つめた。

「これ・・・まさか・・・。」

ブルーパは砂を見つめながら、信じられないと言うような表情を浮かべていた。

ブルーパがすくった砂は、一粒一粒が光輝いていて、見ているだけで力が湧いてくる。

「砂じゃない・・・やっぱりこれは・・・！」

ブルーパが言葉を発しているのに気づいたレーグは、すぐさまブルーパに近づいて叫んだ。

「これは・・・何なんですか！答えなさい！」

レーグが杖を振るう。しかし、砂の針が出現することはおろか、砂は一切の動きを見せなかった。

「何故！？何故砂を操れない！」

焦りを見せるレーグに、ブルーパは倒れながらゆっくりと語りだした。

「簡単よ・・・だってこれ・・・砂じゃないもの・・・。」

「砂じゃない！？ならば何だと！」

「自分で・・・確かめなさい・・・！」

レーグはすぐさま砂をすくった。途端に、レーグの顔が青ざめていった。レーグの手のひらの上の物は、”星の形をした砂金”だった。そしてこの砂金の正体を、レーグはよく知っていた。

「これは・・・まさか！」

「そうよ・・・！あなたが求めていたもの・・・星よ・・・！」

砂漠に広がる光は、全ては星が放っていた砂金の光だったのだ。

リーグの手から星が降り落ちるが、拾おうともせずにリーグはさらなる疑問を投げ掛けた。

「しかし・・・何故急に・・・！」

「流星・・・。」

霞むような声でブルーパが呟いた。

流星。百年に一度、星の形をした砂金が出現する現象。ブルーパもリーグも初めて見る現象だったが、それは当然の話だった。

「しかし・・・まだ百年経ってないはずでは！」

「ふふふ・・・。」

ブルーパは静かに笑った。まるで全てが分かっているかのように呼び寄せたのよ・・・星に選ばれた戦士が・・・ね。」

その瞬間、リーグの後ろで光の柱が上がった。光はゆつくりと砂金となって落ちていき、現れたのは一人の戦士の姿だった。

「ぐう！くそ！」

「あう！」

ブルーパの頭を全力で踏みつける。気絶する直前のブルーパは、何故だか微笑んでいた。

気にせずに何度も頭を踏みつけるリーグ。

「・・・おい。」

声が聞こえた瞬間、リーグの肩に誰かの手がかかった。その手には一切の傷がなく、星と同じように光輝いているようだった。

「その足を・・・離せ。」

すぐさま魔法で距離をとるリーグ。ブルーパが光に包まれていくのを見守りながら、選ばれた戦士は星に向かって優しく微笑んだ。

「貴様が選ばれた戦士なのか！シロヤ！」

リーグの叫びに選ばれた戦士が反応し、ゆつくりと口を開いた。
「ああ、気づいたら傷も何も無くなっていた。」

そして、選ばれた戦士——シロヤはゆつくりと剣を構えた。

しかし、リーグは構えようとせず、嬉々とした表情を浮かべた。

「素晴らしい・・・素晴らしいよ！君は星の素晴らしさを教えてくれたのだ！」

リーグはそのまま星を掴んだ。

「さあ！その素晴らしき力を私にも！これがあれば無敵！敵無し！最強だ！ヒヒヒヒヒ！」

高笑いしながら、どんどん星を撒き散らしていくリーグ。しかし、星はリーグの周りでゆつくりと落ちていくだけで、力を与えるようには見えなかった。

「何故だ・・・何故私の力は増えないのだ・・・。」

愕然とするリーグ。一瞬まばたきをした瞬間、リーグの目にはシロヤの顔が映りこんだ。

「しまっ！」

防御をしようとしたが間に合わず、シロヤの剣がリーグの上半身を横に斬りつけていた。

「うああ！」

後ずさりをしながら、リーグは切られた傷跡に魔法をかけようとする。しかし、その一瞬よりも短いと思われる瞬間に、シロヤは第二撃をリーグに与えた。

「くっ！」

足を切られ、思うように動けなくなったリーグは、そのまま地面に倒れこんだ。

「くう！何故だ！何故なんだ！」

またもや一瞬間を見せたリーグ。その一瞬のうちに、シロヤはもう間合いを詰めていた。

「さっきのはバルーシさんの分、今のはランブウさんの分だ。」

ゆつくりと、シロヤは腕に剣を突き立てた。

「ぐああああ！！！！」

「これが・・・レジオンさんの分。」

突き立てた剣を引き抜き、右足を高く上げた。そのまま高く上げた右足を、レーグの頭めがけてまっすぐに勢いよく降り下ろした。

「がはっ！」

「これが・・・ブルーパ様の分だ。」

頭を踏みつけられたレーグは、ゆっくりと立ち上がって再び構えた。

しかし、構えるという戦闘での一動作すら、今のシロヤにとって間合いを詰めるには十分な時間だった。

願意

「うぬっ！」

目の前に現れたシロヤに、リーグは思わず身震いした。

賢者のリーグにとつて、今日の前にいるシロヤという存在は異質でしかなかった。戦士の様な腕っぷしの強さとも違う。魔術師の様な魔力を秘めた強さとも違う。全く未知数な”強さ”に、歴戦を越えてきたリーグは恐怖していた。

しかし、小さく震えるリーグを見ても、シロヤは表情を変えなかった。

「・・・まだだ、お前への制裁はまだ済んでいない。」

シロヤは拳を振り上げた。

「ヒヒヒヒヒ！諦めてなどいませんよ！」

拳を振り上げたシロヤを目の前にして、リーグはいつもと何も変わらずに高笑いした。

「まだわからないのですか？私が何故、何もせずに黙っているかが！」

瞬間、リーグの後ろで砂金が盛り上がった。

「・・・！」

砂金は巨大な柱となり、シロヤを上から見下ろしていた。

「ヒヒヒヒヒ！あなたのお陰で星を操る程の魔力を手に入れることができました！ヒヒヒヒヒ！」

「俺の・・・お陰？」

シロヤは剣を構え、疑問を口にした。

「あなたが私を痛めつけたお陰で、私の魔力の上限がさらに上がりました！ヒヒヒヒヒ！」

リーグの隠し玉、与えられたダメージ分だけ魔力を回復・上昇させる賢者のスキル、”ダメージリリース”を発動させたのだ。星の力によって与えられたダメージは、リーグにそれ相応の魔力を与え

ただ。

「ヒビヒビ！わかる、わかるぞ！力が増大していく！力が我に！ヒビヒビ！」

レーグを包み込むように、砂金が舞い上がる。砂金に包まれたレーグは、さながら金の繭で羽化を待つ蝶のようだった。

「ヒビヒビ！星が私に力を与えてくれる！素晴らしい！素晴らしい！……素晴らしい！」

金の繭の一部が盛り上がり、そこから砂金の針が現れた。

「哀れだな……貴様は。」

「ほざけるのも今だけですよ！ヒビヒビ！」

砂金の針がシロヤめがけて放たれた。

シロヤは一瞬目を閉じ、何かを祈りながら走り出した。

「遅い……。」

ヒュンヒュン！ヒュンヒュン！

「何！？」

高速で放たれた砂金の針を、シロヤは何事もないかのように交わす。それはまるで、砂金の針がシロヤを避けているようだった。

「何故だ！何故当たらない！」

激昂しているレーグ。その瞬間の間に、シロヤはすでに金の繭の前にいた。

「何故だ！何故貴様に星の針が当たらない！」

叫ぶレーグを包む金の繭の前で、シロヤはゆっくりと剣を振りかぶった。

「言っただろう？星に選ばれた者じゃないと星は操れない。」

「ほざくな！」

突如、シロヤの目の前で砂金の針が現れ、シロヤの腹部を貫いた。わずかに傷口から血が流れるが、シロヤは倒れるような気配は全くなかった。

しっかりと大地に足をつけるシロヤ。そんなシロヤを、足元の砂金が優しく包み込んだ。シロヤの腹部を貫いた砂金は崩れ、貫かれた腹部は一切の傷を残さずに消え去った。

「！」

「人が星を選ぶんじゃない。星が人を選ぶんだ。」

シロヤは剣を振り上げた状態で止まり、一点を見据えながら口を開いた。

「星は・・・ただ力を増幅させるだけの道具じゃない。それは星と共に生きてきたバスナダの民ならばわかるはずだ。」

「ヒビヒビ！星が道具じゃない！？」

さらに現れた針がシロヤを貫く。右足、左足、腹部、左胸と、まるで苦しめるかのように貫いていく。

しかし、貫かれた傷跡はすぐさま星によって癒され、まるで何事もなかったかのようにしてしまふ。

「まだわからないのか。星が望むのはこんなことじゃないんだ。」

「うるさい！うるさい！」

針は何度もシロヤを貫くが、傷跡は星が全て癒されていく。

そして、新たな針がシロヤの左目を貫いたとき、シロヤは初めて表情を変えて動いた。それと共に、空気が一瞬静まった。

「星が望むことに耳を傾けないお前に！」

「星は操れない！」

振り下ろされた剣が金の繭を切り裂いた。

「うがああああ！！！！」

苦しむような断末魔が、星が包む大地に響き渡る。

シロヤの剣が光を放ち、金の繭が音を立てて崩れ落ちる。

光はさらに世界を包み込むかのように広がっていく。シロヤとレ
ーグは、そんな光に包まれながら意識を手放した。

．．．．．

．．．．．

．．．。

ゆっくりと目を開けるが、まだ視界には眩しい光が映っていた。

何も見えない真っ白な世界に、シロヤは一人で立っていた。

歩き出してみるが、地面を踏んでいるのかもわからない。まるで
別の空間の中に迷いこんでしまったかのように。

しばらく歩いていると、白い光の向こうに何かを見た。その何か
が、光ではない何かと認識した瞬間、音も立てずに何かはシロヤの
前にやって来た。

「はじめまして．．．白の勇者よ．．．。」

そこに立っていたのは、巨大な剣を持った白い全身鎧の男だった。

哀別

「白の・・・勇者？」

謎の人物の言葉に、シロヤは思わず首をかしげた。自分が勇者と呼ばれる意味がわからずに考えていると、謎の人物はそのまま言葉を続けた。

「白の勇者よ、この砂は好きか？」

突然の問いに、シロヤは戸惑いながら首を縦に振った。それを見た謎の人物は、思った通りの返事が聞けたのか、嬉しそうに微笑んだ。

「白の勇者よ、まだこの地は平和にはなっていない。白の勇者の選択は、まだ試練の段階を越えてはいない。」

試練の段階とは何なのか。様々な疑問が頭をよぎるが、謎の人物はお構いなしに言葉を続けた。

「白の勇者よ、耐え難い困難がこの先に待ち受けているだろうが、白の勇者は立ち向かうか？」

シロヤは首を縦に振った。もちろん、シロヤはバスナダのためならばどんな困難にも立ち向かうつもりでいた。それは、シアンやプルーパやバルーシらに対するお礼の意味でもある。しかし、やはり大半を占めるのはシロヤ自身の選択。だからこそ、シロヤは立ち向かう勇気が得られるのだ。

期待した通りの答えを得て満足したのか、謎の人物は微笑みながらシロヤの頭を撫でた。

「白の勇者よ、望んだ世界は自身が作るのだ。白の勇者が紡ぐ世界を・・・しばし見学させてもらおう。」

その瞬間、謎の人物の体が光の粒子となって消えていった。

そして一際強い光がシロヤの視界を奪い、シロヤの意識は再び暗黒に包まれた。

．．．．．

．．．．．

．．．。

いつしか暗黒が、瞼の裏の世界へと変化した。

シロヤはゆっくりと目を開けた。

「ん．．．」

目を開けて最初に目に入っただのは、無機質な石の天井だった。そして体を包む布の感触。どうやらあのあと、誰かの手でここに運ばれたようだ。

「目が覚めたか．．．」

突如、横から声が聞こえた。驚いて顔を上げると、そこにはシアンが立っていた。その表情は、色んな感情が幾重にも重なってできたような表情をしていた。

「あの．．．ここは？ブルーパ様やバルーシさんは．．．？」

シロヤの質問に、シアンは重そうに口を開いた。

「全員治療を受けている所だ。」

そう呟いたシアン。

シロヤはゆっくりと体を起こし、周囲を確認した。自分が寝ている簡易ベッドの他にあるのは、冷たくシロヤを見張る鉄格子だった。

「ここは．．．牢屋？」

牢屋の中にいるという事実を受け止められないシロヤ。よく見ると、鉄格子の向こうから数人の兵士が、シアンを心配そうに見つめていた。

不安な表情を浮かべたシロヤを見て、シアンは悲しい顔を浮かべた。

「そなたがあのような悪事を働くとは．．．」

シロヤにはシアンの呟きを聞き取ったが、何を言っているのかわ

からなかった。

「惡事……？」

シアンはさらに続けた。

「星夜祭の夜、バスナダ七人衆に大怪我を負わせ、さらにはそれを止めに来たお姉さまをも手につけ、最後には大臣であるリーグまで手につけようとしたという情報が入ったのだ。」

「えっ？」

シロヤは耳を疑った。あの時の出来事が、全て自分を引き金にして起きた犯罪行為という形になってしまっている。どうやら、鉄格子の向こうの兵士達が向けていたのは、犯罪の疑いがかけられているシロヤに対する疑心の目だったのだ。

訳がわからないといった表情を浮かべているシロヤ。それを見つめていたシアンの中には、いつの間にか涙が溜まっていた。

「私も信じられぬ・・・そなたが国を潰そうという・・・テロリス
トであることなど・・・!」

まるで泣きつくかのように、シアンは目でシロヤに訴えかけていた。

⌈
•
•
•
!
⌋

その瞬間、シロヤは悟った。

「違うのなら……違うと言つてほしい……！あらぬ疑いをかけたことを謝ろう……。」

その言葉を聞いた瞬間、シロヤは悟ったことをそのまま口に出した。

「……………」
「本当です。」

シアンの表情は変わらない。しかし、シアンの思考は狂っているだろう。身が小さく震え出していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうか。」

涙を押し殺しているようなシアン。

そして、表情を変えないままシアンはシロヤに言った。

「そなたをA級犯罪者と認定し、今後バスナダ国の入国を禁ずる。」

シロヤは、ゆっくりと頷いた。

「ならば・・・これから関所に向かってくれ。私はまだそなたが犯罪者であることを信じたくない。そなたは見ず知らずの私に優しくしてくれた方。だから・・・せめて関所までの道にそなたへの見張りはつけないつもりだ。」

それが、シアンがシロヤに対する最後の愛情なのだろう。シロヤは再びゆっくりと頷いた。

互いに涙をこらえながら部屋を出た二人。そして、シアンは王室に向かって、シロヤは城門に向かってそれぞれ別れて歩き出した。

「う・・・うう・・・。」

シロヤの後ろから泣き声が聞こえたが、シロヤは振り向かず、城門を開けて外に出た。

伝書

城門前には、クロトがシロヤを待っていた。体には包帯が巻かれていて、背中にはシロヤが持っていた荷物が積んであった。

「クロト……。」

悲しそうな顔をするシロヤに、クロトはゆっくりと顔を寄せた。

「ハハハ……そうか、暗い顔してても始まらないよな。」

無理矢理笑顔を作ったシロヤは、クロトにまたがってゆっくりと歩き出した。

「街はまだ祭りの片付けが終わってないみたいだな。」

日はまだ出始めで人の姿はない。祭りの片付けが済んでないのを見ると、星夜祭の日からそれほど時間が経ってないみたいだ。

「バスナダの名物とも……お別れか……。」

クロトが悲しそうに鳴いた。それを聞いたシロヤは、微笑みながら周りを見回した。

「せめて最後に何か買っていったかったけど……犯罪者なんだし……やめた方がいいかな。」

クロトも事情を察したのか、すこし早歩きで関所を目指した。

「クロト……せめて最後にバスナダの街並みをゆっくり見てから行こう。」

シロヤがそう言うと、歩みをゆっくりにして、二人はバスナダの景色を見ながら歩いていった。

街外れの森に入ると、シロヤは立ち止まって一点を見つめた。

「確かここで……シアン様を助けたんだっけ。」

それからパレードに参加したら、豪勢なもてなしを受けて城にまで招待された。バルーシやブルーパやクピンに会ったり、リーグと的一件に関わってしまったのもその日だった。

さらにはローイエやリーグン、フカミとキリミドやレジオンにも会った。

そして・・・シアンがシロヤに告白したりもした。街をさらに好きになってもらおうと、星夜祭に招待された。

そして・・・シアン暗殺を企てるリーグとの戦い。シロヤは服の下を見てみるが、あの時に貰かれた傷などは残っていなかった。

星に選ばれ、今までにないぐらいの力を手にしてリーグを倒すが、待っていたのは犯罪者のレッテル。

「でも・・・何でなんだろう。」

そんなことを思っているうちに、シロヤとクロトは関所についた。そこにいたのは、シロヤとクロトがバスナダで初めて会った人だった。

「よお、シロヤ。」

「ランブウさん！」

関所にいたのは、あの時と変わらずランブウだった。

「まあ・・・なんだ、気にするな！俺達の力が弱かったのもあるが・・・。」

どうやら、シロヤがかなり沈んでいるように思っているらしい。

シロヤは笑いながら口を開いた。

「いえ、気にしてませんよ！元々よそ者だったんだから・・・。」
暗い雰囲気漂う。

「・・・ああ、スタンプ押さないとな。シアン様から預かってるんだ。」

ランブウは、バスナダのスタンプを取り出した。

「あ、はい。ええっと紙はどこだ・・・？」

ポコッ！

「うわぁ！」

紙を探している最中に、急に地面が盛り上がり、何かが顔を出

した。

「ん？ああ、伝書土竜でんしょもぐらだよ。どれどれ・・・。」

伝書土竜が持っていた紙を受け取り、目を通すランブウ。

「・・・。」

読んでいくうちに、顔をしかめていくランブウ。

「あの・・・ランブウさん？」

気になったシロヤは、勇気を持って話しかけてみた。するとランブウは、無言のまま持っていた紙をシロヤに手渡した。

「なんだろう・・・。」

シロヤは、ゆっくりと紙に書かれている内容に目を通した。

”緊急命令書”

この命令書が届いた時間から、最高責任者の命があるまで関所を封鎖せよ。

どんな事情があろうとも、国から人を出すことを一切禁止とする。

なお、関所管理・出国禁止命令に関する最高責任者を、女王シアンと認定する。

シアン・ラーカ

「出国・・・禁止命令？」

出国禁止命令、つまり国から出ることを禁じること。

「でも俺は犯罪者なんだから・・・。」

「どんな事情があろうとも・・・って書いてあるだろ？」

口を閉ざす二人。

しばらく沈黙が流れたあと、またもや伝書土竜が姿を現した。

「またか・・・今度はなんだ？」

再び紙に目を通す。すると今度は、訳がわからないような表情を浮かべている。

「あの・・・どんな内容なんですか？」

しばらく黙りこむランブウは、やがて口を開いた。

「俺にもわからない・・・ただ、ここに書いてあるのは単純なことだ。」

そう言って、ランブウは奥からテレビを持ってきた。

「数分後に行われるシアン様の演説をシロヤに見せてくれって内容だった。」

そう言ってランブウは、すぐさまテレビをつけてアンテナを合わせる。

やがて、台が置かれた城門前の映像がテレビに映った。

「演説・・・？」

「よくわからないが、まあ見ればわかるだろう。」

しばらくすると、テレビにシアンが映った。

「シアン様！」

食い入るようにテレビを見つめるシロヤ。

テレビの向こうのシアンは、大きく深呼吸をした。

「皆の衆！急にこのような場を設けたのには理由がある！」

シアンの演説が始まった。

急変

「皆の衆！昨夜の星夜祭は大成功に終わった！皆の頑張りが大成功に導いたのだ！」

凜とした声で演説を始めたシアン。

「しかし・・・昨夜、大臣のリーグとバスナダ七人衆が重症を負うという事件が起きた。我々は、以前にバスナダを訪れた旅人、シロヤをA級犯罪者に認定、国を追放することにした。」

少し前に起きた出来事を淡々と語るシアン。話しているうちに、シアンは目に涙を溜めていた。

「しかし・・・。」

そう呟いた瞬間、シアンの頬に一筋の涙がこぼれ落ちた。

「しかし！その後、リーグの部屋からこの署名が見つかった！」

シアンは紙を取り出して、その紙を高くあげた。

「これには、リーグとバスナダ七人衆の署名がなされている。そしてこの署名された紙に書かれた内容は、私の暗殺を企てるための計画書だった！」

「っ！」

テレビを見ながら、シロヤは絶句した。

「おかしい・・・なぜあの署名がシアンの手元に・・・？」

ランブウが驚いたように呟いた。

テレビの向こうのシアンはさらに演説を続けた。

「私は愚かな間違いをしていた！あのお方はリーグやバスナダ七人衆を手にかかけようとしていたのではなく、私を助けようと尽力してくれたのだ！」

そして、シアンはぼろぼろと涙を流した。泣きながらも、涙を拭おうとせずにシアンは演説を続けた。

「私は・・・実に愚かだ！命を二度も助けてくれた者を犯罪者と認定して追放するなど・・・実に愚かだ！」

どんどんと強くなるシアンの演説。涙を流しながらも、その声は凜としている。

「この愚かな所業を犯したことを・・・私はあのお方に謝りたい・・・。しかし、あのお方はもう戻ってこないだろう・・・。」
強くなっていた演説がどんどんと涙声に変わっていく。

「だから・・・私は今、ここに宣言しようと思う！私のこの判断が皆に被害を与えるのではないかと思うが、私の最初で最後のわがままだと思って聞いてほしい！」

深呼吸を一つして、さらに凜とした声で宣言した。

「再びあのお方を城に迎え入れるため、出国禁止命令を出すことに決定した！」

「えっ!？」

シロヤは驚きの声を上げた。

「やばいな・・・女王は本気みたいだな・・・見る。」

ランブウが一つの方角を指差した。その先にいたのは、銀色の鎧を見にまとった兵士の集団が歩いていた。

「まさか兵団を出してくるとは思わなかったぜ・・・おそらくあれを率いているのは・・・。」

ランブウがさらに指差すと、そこにいたのは、立派な銀色の鎧に身を包んだ男が先頭になって兵団を率いていた。しかし、その男は体に包帯を巻いていて、苦痛の表情を浮かべていた。

「バ！バルーシさん!？」

先頭のバルーシは、明らかに怪我が完治していないようだ。動く度に鎧が傷口を開かせ、その度にバルーシは苦痛の表情をさらに強

めていた。

「シロヤ、今すぐここから逃げる。丸一日でも逃げ切れればなんとなる。」

ランブウはテレビを消して、バルーシら兵団がいる方向とは違う方向を指差した。

「このまま関所の壁を頼りに走っていけ。この先は街からは見えないうようになっていく。」

シロヤはすぐさまクロトに乗り、ランブウが指差していた方角に向かつて走り出そうとした。

「ランブウさん！ランブウさんはどうするんですか！？」

シロヤは立ち止まってランブウに声をかけるが、ランブウはその場を動かずに手だけを動かした。どうやら”早く行け！”と言っているようだ。

「ランブウさん・・・ありがとうございます。」

シロヤは小さく会釈すると、ランブウが指差していた方角に向かつて走り出した。

「ランブウさん、もういいですか？」

草影から、数人の男が顔を出した。男達はそれぞれ違った形の銃を持っていた。

「ああ、さて・・・少し荒くなりそうだな。」

そう言つて、ランブウは背中に隠していた散弾銃を構えた。それと同じように、男達も持っていた銃を構えた。

「言っておくが殺すなよ。相手は同じ国の人間、言うなれば家族みたいなものだからな。」

そう言つと、男達が一斉に銃を構えた。

「っ！皆伏せろ！」

銃を向けた方向にいるバルーシが叫んだ。しかし、ランブウの叫びの方が一瞬早かった。

「撃てえええ！」

一斉に銃弾が放たれ、兵士達の鎧にぶつかり光となった。

「くう！閃光衝擊弾か！」

閃光衝擊弾は、強い光と衝擊を放ち、被弾した敵を気絶させる弾である。

「第二射用意！撃てえええ！」

さらに放たれた閃光衝擊弾により、兵団達は次々と倒れていった。

後ろから聞こえる銃声。しかしシロヤは振り返らずに走り続けた。振り向けばランブウの思いを無駄にする。そう思い、シロヤは振り返りたい気持ちを必死に押さえ込んだ。

「ランブウさん・・・無事でいてください。」

走り続けるシロヤは、やがて大きな岩の前にたどり着いた。

ヒュン！

「！」

岩の前に着いた瞬間、横から謎の衝擊がシロヤの前を走り抜けた。

決断

「うわぁ！」

思わずのけ反ってしまい、シロヤはクロトから落ちた。

起き上がった岩を見ると、岩の三ヶ所が細くえぐれていた。

「何だ・・・これ？」

そう呟いた瞬間、さらに謎の衝撃が飛んできた。

「っ！」

しゃがんで衝撃を避けるが、衝撃はシロヤの後ろの岩にさらにえぐった。

「くっ！誰だ！」

謎の衝撃が飛んできた方向を見ると、馬に乗り槍を構えている少女が立っていた。

「ダメ！この国から出ちゃダメなの！」

少女は目に涙を浮かべながら叫んだ。

「ロ！ロ！イエ様！？」

立っていた少女はロ！イエだった。ドレスを着ていた普通のロ！イエから一転、防具を身に付け、手にはロ！イエの身長よりも長い槍が握られていた。

「お兄様！お兄様は・・・私達を助けてくれたんだよね！？私達を救ってくれたんだよね！？」

ロ！イエは涙をこぼしながら叫んだ。

「・・・俺は・・・犯罪者・・・。」

「嘘！お兄様はリーグを倒してくれたんだよね！？」

ロ！イエは槍を再び構え、目にも止まらぬ速さで槍で空を突いた。その瞬間、槍からシロヤめがけて衝撃波が放たれた。

「くっ！」

辛うじて避けるも、シロヤではついていくのが精一杯で、反撃をする余裕すらなかった。

「ローイエ様！俺はこの国の人間じゃないから・・・俺が！」

「そんなの聞きたくない！私は命を救ってくれたお兄様が大好きなの！」

シロヤの叫びが、ローイエの涙の叫びによってかき消される。

「お兄様が・・・大好きなの！もっとお兄様と一緒にいたいのお兄様も絶対同じだよ！」

「・・・。」

黙りこむシロヤに向かってさらに叫ぶローイエ。

「私もお姉様も・・・もっともっとお兄様とお話したりお食事したりしたいの！一緒にいたいのに！間違いないかですと会えないなんて嫌なの！お別れしたくないの！」

泣き叫ぶローイエは、さらに槍での攻撃を早めた。

「っ！」

何とか避けようとするが、速い上にどんどんと加速していく槍の連撃。

「ぐわっ！」

ついに避けきれずに、シロヤは槍の衝撃波をまともに受けた。

「うう・・・。」

受けた部分が赤く染まる。岩のようにえぐれはしなかったものの、衝撃波でかなり深手を負ってしまったようだ。

「お兄様！絶対に私達が幸せにするから！一緒に幸せになろうよ！」

さらに叫ぶローイエだが、シロヤはそんなローイエに顔色を変えなかった。

「でも・・・俺はよそ・・・者だ・・・から・・・。」

その言葉を聞いて、ローイエはさらに涙を流した。

「いやぁ！嫌だよぉ！お兄様！うわぁぁん！」

さらなる槍の衝撃波が放たれた。

キィィン！

「っ！」

「何！？」

突如、槍の衝撃波が何者かによって力を失った。

「シロヤ君！無事！？」

茂みの奥から声が聞こえた。声と共に出てきたのは、ドレスに身を包み、手に短剣を構えた女性だった。

「ブルーパ様！」

「シロヤ君！無事みたいね、うっ！」

駆け寄ってきたブルーパが、突然うずくまった。見ると、両足の包帯がみるみるうちに赤く染まっていつている。

「ブルーパ様・・・怪我、完治してないんじゃない？」

「今はそんなこと・・・心配してる暇じゃないわ！」

ブルーパは、ロイーエの方を向き直し、短剣をさらに構えた。

「シロヤ君、ここは私に任せて早く行って！」

「そんな！怪我をしているブルーパ様を置いてくなんて！」

シロヤの言葉を聞いたブルーパは、シロヤに向かって満面の笑みを浮かべた。

「いいのよ。シロヤ君のためだもの、この程度の傷で止まったりしないわ。」

そう言って、ブルーパはシロヤの背中を強めに叩いた。

「さあ！行きなさい！」

シロヤは口から出そうだった言葉を飲み込み、無言のままクロトに乗って走り出した。

「シロヤ君・・・頑張ってね。」

小さくなっていくシロヤの背中に、ブルーパはウィンクをした。

「お姉様！何でお兄様を逃がしちゃうの！？」

納得のいかないロイーエは、ブルーパに槍を向けた。

「ロイーエ！シロヤ君は私達のために国を出るって言ってるのよ！」

「そんなの嫌だよ！お姉様だってお別れしたくないでしょう！」

ブルーパは少し黙った。確かにブルーパも、シロヤがこの国に留まってくれているのは嬉しいことだ。

しかし、シアンがやっていることが正しいとは思っていなかった。「確かに私も・・・シロヤ君ともっと一緒にいたいわ・・・。」

「だったら何で！？何で逃がしちゃうの！？」

言われたと同時に、ブルーパは短剣を持ち直した。

「わかってるわよ・・・でもね！一番辛いのは・・・辛い思いをしているのはシロヤ君なのよ！私達のために国を出ていくって決断したシロヤ君が・・・一番辛い思いをしているのよ！」

思いを叫んだブルーパは、いつの間にか涙を流していた。

「いやあ！お兄様ともっと一緒にいたいのに！」

ローイエがブルーパに向かって槍の衝撃波を放ち、ブルーパがローイエに向かって短剣を投げた。

強襲

ただひたすらに走った。ランブウもブルーパも、自分のために戦ってくれている。思いを無駄にしないためにも、ただひたすらに走り続けた。

やがて、シロヤとクロトは砂浜に出た。

「あれ？この海って・・・。」

シロヤはこの海に見覚えがあった。この海は、星夜祭でシアンと二人で花火を見た灯台がある海だ。この海は、シロヤ達が最初にいた関所とちょうど反対側にある所だった。

「このまま行けば・・・未開拓地帯か・・・。」

シロヤ達は灯台と森を目印に、再び走り出した。

「・・・？」

しばらく走っていると、シロヤはある異変に気づいた。

「クロト・・・？」

森を抜けた辺りから、クロトの走り方がぎこちなくなっていた。

変に思ったシロヤは、クロトから降りて足を見た。

「！」

クロトの足は、かなりの量の出血をしていた。シロヤ達が通ってきた道は、道とはまだ呼べないぐらいに荒れていた。木の枝や草を掻き分けていくうちに、クロトの足はかなり傷ついていたのだろう。

「クロト・・・無茶すぎだぞ。」

シロヤの言葉を聞いたクロトは、鳴きながら足踏みをした。おそらく「まだ走れる！」と言っているのだろう。

「クロト・・・ごめんな。」

シロヤはクロトに跨がり、再び走り出した。

ヒュン！

「！」

突如、シロヤの耳に空を切る音が響いた。その瞬間、シロヤの視界が揺れた。

「うわあああ！」

視界はどんどんと傾き、シロヤは砂浜に倒れこんだ。

「いてて・・・。」

ゆっくりと立ち上がるシロヤだが、体に新しい傷はついていなかった。シロヤはただ、地面に倒れこんだだけのようだ。

「クロト、大丈夫か？」

シロヤはクロトの方を向いた。その瞬間、信じられない光景がシロヤの目に映った。

「クロト！！！」

シロヤはクロトに駆け寄った。クロトは砂浜に倒れていて、その足からはおびただしい量の血が溢れていて、砂浜を赤く染めていた。「何だよこれ・・・どうなってるんだ？」

さらに酷くなる出血。シロヤの目に映ったのは、クロトの足に刺さっている何かだった。

「これ・・・矢だ。」

クロトの足に刺さっていたのは、木で作られた矢だった。矢はクロトの足を貫通し、砂浜に刺さってクロトの動きを止めていた。

「何で・・・急に矢が？」

そう呟いた瞬間、さらに空を切る音がシロヤの耳に響いた。空を切る音は、すぐさま砂を裂く音に変わった。

「！」

見ると、シロヤの前にさらに矢が突き刺さっていた。まだ矢を放っている人物が近くにいます。

シロヤはすぐさま剣を構えた。

矢が飛んできたと思われる方向、砂丘の向こうから、ゆっくりと何かが近づいてきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ？」

シロヤは目を疑った。砂丘の向こうから現れた人物は、シロヤにとっては予想を遥かに越えた人物だった。

「見つけたぞ……。」

シロヤは、口元を震わせながら現れた人物の名を呼んだ。

「シアン……様……。」

砂丘に立っていた人物は、まぎれもなくシアンだった。ドレスに身を包んではいるが、手には長弓が握られている。その長弓は、使い次第では強力な武器になり得る代物だった。そしてシアンは、その使い方を完全に熟知していた。

シアンを見て、体が固まってしまったシロヤ。

それに向かって、シアンは三本の矢を手にとって弓を引いた。

「！」

避けようと思った瞬間、シアンの手から三本の矢が放たれた。しかし、三本の矢はシロヤの体を越え、その先の地面に刺さった。

狙いを外したのかと思ったシロヤだったが、すぐさまそれが何なのかわかった。

「くっ……体が……。」

シロヤの体は、シロヤの意思では動かなくなっていた。

「……。」

シロヤの体が動かなくなったのを見て、シアンは弓を下ろしてゆっくりと近づいてきた。

「！」

シロヤは目を疑った。近づいてきたシアンの目は、初めて会った時の凜とした目ではなかった。色の無くなった無機質な目に、シロヤは恐怖を募らせていった。

「ああ……愛しいお方よ……。」

無機質な目をしたシアンは、いつの間にかシロヤの一步前まで来ていた。ゆっくりとシロヤの顔に触れるシアン。

「そなたが……愛しい……。」

いつの間にか、シアンは目から涙を流していた。無機質な目から

流れる涙は、ゆつくりと頬を伝って砂浜に落ちていく。

「シアン様……。」

「う……うう……。」

抑えられずに涙を流し続けるシアン。そして、シアンは矢を一本握った。

「痛くはしない……。全てを私に委ねてくれ……。」

「えっ……?」

シアンは矢を構え、シロヤに突き立てようと振りかぶった。

「シアン……様?」

「そなたを愛しているぞ……。」

そして、シアンは矢を振り下ろした。

好意

強く目を閉じるシロヤ。痛みに耐えようと必死に体を力ませるが、痛みはやってこなかった。

「・・・？」

ゆっくり目を開けてみると、シアンのは自分の腹部に届く直前で止まっていた。そして矢を止めているのは、砂だった。

「シロヤ様！大丈夫ですか！？」

支えていた砂が落ちたと同時に、矢も一緒に地面に落ちた。

いつの間にか、シアンもシロヤから距離をおいていた。そしてその間に、緑髪の男が立っていた。

「シロヤ様、ご無事で何よりです。」

緑髪の男はすぐさまシロヤの後ろに回り込み、地面に刺さっていた弓を破壊する。同時に、シロヤの体が動きを取り戻した。

「シロヤ様、遅れて申し訳ありません・・・。」

すまなそうに言葉を低くする緑髪の男に、シロヤはすぐさま言葉を返した。

「こちらこそ、助けていただきありがとうございます。リーグンさん。」

そして、シロヤは緑髪の男——リーグンの横に立った。

「リーグン・・・裏切り者の息子が何の用だ？」

シアンは今にも弓を引かんとしている。リーグンは表情を変えようとせずに、シアンを一心に見つめていた。

「・・・シロヤ様、ここは私が引き受けます。」

「リーグン様？」

リーグンは杖をクロトに向けて振った。その瞬間、クロトの足の矢が抜け、傷がどんどん閉じていき、出血が完全に止まった。

「さあ、早く！」

さらに杖を降ると、シロヤの体が宙に浮いた。

「うわわわ！」

そのままシロヤは、立ち上がったクロトの背中に乗せられた。

「待ってくださいリーグン様！」

「シロヤ様・・・私達の心配は無用です。シロヤ様の背中には任せてください。」

しかし、シロヤは納得がいかないといった表情を浮かべていた。

「何で・・・何で皆・・・俺のために戦うんですか・・・？」

溜まっていた疑問を投げ掛けるシロヤ。それに対して、リーグンは振り向いて笑顔を向けた。

「そんなこと・・・単純なことですよ。」

笑顔のまま、リーグンは疑問への答えをシロヤに言った。

「皆、シロヤ様のことが好きなんですよ。」

さらにリーグンは続けた。

「私にはわかるんです。皆、シロヤ様と一緒にいる内に好意が芽生えてきたんですよ。」

シアン様はあなたの強さに、

ブルーパ様はあなたの純真さに、

ローイエ様はあなたの包容力に、

バルーシさんはあなたのまっすぐな心に、

レジオンさんはあなたの誠実さに、

ランブウさんはあなたの諦めない心に、

クピンさんはあなたの優しさに、

フカミさんとキリミドさんはあなたの勇敢な心に、

そして私も、あなたの立ち向かう心に、それぞれ好意を抱いているんですよ。」

固まるシロヤ。

「私達がシロヤ様を守るのは、私達の単なる自己満足でもあるんで

す。

私達はシロヤ様が好きだからこそ、シロヤ様の選んだ選択を無理矢理変えるようなことはしません。」

リーグンの杖を握る手が強くなる。

「だから・・・私達を信頼してください！」

話を聞いたシロヤは、うつすらと涙を目に溜めていた。

「リーグン様・・・ありがとうございます！」

シロヤは涙を隠すように叫んだのち、未開拓地帯に向かって走り出した。

小さくなっていくシロヤを、リーグンは森に入っていくまで見つめていた。

「余計なことをしよって・・・！」

怒りを露にするシアン。それを見て、リーグンはさらに杖を握る力を強めた。

リーグンは直感で、シアンは自分よりも実力が上であると分かった。

しかし、リーグンは逃げるようなことは一切しない。シロヤの背中を守るために。

「リーグン、本気で貴様を潰しにかかる。命の保証はしないぞ。」

矢を出し、弓を構える。ただそれだけの動きが、リーグンの緊張をさらに高めさせた。額から汗を流すリーグンだが、杖を握る手を一切弛めなかった。

「シアン様が本気なら、私も本気を出すだけです！」

すかさず杖を振るい、砂を槍に変えてシアンに向けて放った。

「単調だな・・・。」

すかさずシアンは矢を放った。シアンの放った矢が砂の槍を貫き、すぐさま形を失って地面に落ちた。

「ならば次はこちらからだ・・・。」

シアンはすぐさま矢を五本持ち、不規則に放った。

不規則に放たれた矢は、不規則な動きでリーグンに向かっていく。
「っ！」

不規則な軌道を予測できず、一本の矢がリーグンに突き刺さった。
「くう！」

腕に刺さった矢に一瞬気がいってしまい、さらに襲ってくる四本の矢に気が回らなかった。

反応できずに動きが止まるリーグンに、四本の矢は容赦なく貫こうと向かってきた。

そして・・・。

「ぐわあああ！！！」

リーグンの体を、合計五本の矢が刺し貫いた。

おびただしい量の血を出しながら倒れるリーグン。

「勝負あったな・・・リーグン。」

シアンはゆっくりと歩み寄り、倒れているリーグンの体に向けて矢を向けた。

滝壺

「……。」

後ろを振り向かないように、必死に前だけを見つめてシロヤとクロトは走った。

戻りたいのならば今すぐ戻って、ランブウやブルーパ、リーグンを助けに行きたい気持ちで一杯だった。しかし、シロヤはリーグンの言葉を信じ、走り続けた。

「リーグン様が信じてるんだ……俺も……皆を信じないと……。」

ただひたすらに一人と一頭は、未開拓地帯を走り続けた。

「……！」

シロヤの耳に、森とは違う音が響いた。草や枝を踏んだ時に生じる音とは違う、森とはかけ離れた男だった。

「何だ……？」

いつの間にか、足元の草や枝が無くなり、荒れ果てた土が現れた。徐々に枝も無くなっていき、視界が開けてきた。その先で、クロトは急停止した。

シロヤとクロトは、開けた場の前に広がる景色を見た。

「これって……滝？」

シロヤ達の前には、巨大な滝が広がっていた。滝は思ったよりも高く深く、その道の先は崖となっていた。崖から滝壺を見ると、滝壺までの距離は想像以上のものだった。

「道なんて無いだろ……。」

シロヤは周りを見渡してみた。すると、崖の一つが道みたいになっていたのに気づいた。しかし、それは途中で途切れていた。

「危険だな……他を探そう。」

クロトに引き返すように促し、崖に背を向けた。

「……！」

急に、シロヤは森の奥から人の気配を感じた。しかもそれは、一人ではなく複数人の気配だった。

ゆっくりと隠れながら気配の出所を探すと、森の奥にいたのは、鎧に身を包んだ集団だった。そしてその先頭には、関所でも見た銀色の鎧を纏った戦士がいた。

「バ……！バルーシさん……！」

関所でランブウと戦っていると思っていたバルーシ率いる兵団が、未開拓地帯に足を踏み入れていた。

「ランブウさん……まさか……。」

そこでシロヤは思考を止めた。負の方向に考えてしまつてはキリがないと思い、すぐさま頭を切り替えた。

「まずい……この先は行き止まりなのに……。」

シロヤは滝を見た。道らしい道はなく、あるとすれば途中で途切れている道だが、万が一滝壺に落ちれば命はないだろう。

「！」

考えているシロヤの背中に、クロトは頭をつけた。何かを言いたげのようだが、シロヤがクロトの方を向いた瞬間、クロトは黙りこんだ。

「……クロト？」

クロトはシロヤの服を引っ張り、無理矢理自分の背中に乗せる。その瞬間、クロトは助走をつけて走り出した。

「おい……まさか……！クロト！」

シロヤは叫んで引き返させようとするが、クロトは無視して走り続けた。その先にあつたのは、途中で途切れている道だった。

「クロト！あの道は不安定だ！万が一崩れたりしたら！」

途切れている分の距離は、全速力で助走をつけて飛ぶぐらいの距離とほぼ同じくらい。つまり、一瞬でも気を抜けば落ちてしまいかねなかった。

「クロト！まだ道があるはずだ！だから！」

シロヤの叫びを無視して、クロトは高く跳躍した。

クロトの助走は十分であつたため、道を飛び越えることができた。
「クロト！」

そのまま着地して走り出そうと足を前に出す。
しかし……。

ガラッ！

「！！！！」

急に足元が揺れた。

着地の衝撃で、向こう側の着地位置の道が崩れたのだ。

「うわあああ！」

バランスを失い、滝壺に向かって落ちていくシロヤとクロト。しかし、クロトは背中中のシロヤを空中で振り飛ばした。

「ク！クロト！何を！」

クロトはすぐさま体制を変えて、空中のシロヤを後ろ足で蹴り上げた。

「ぐわあ！」

蹴りの衝撃で上に飛ぶシロヤ。それを、道の向こうから現れた手が掴んだ。

「シロヤ！」

手はしっかりとシロヤを掴んでいたが、掴まれているシロヤは、滝壺に向かって悲痛の叫びを上げていた。

「クロトオ！クロトオ！クロトオオオ！」

「落ち着けシロヤ！今お前まで落ちたら！」

「うるせえ！クロトオオオ！クロトオオオオオ！！！！」

悲痛な叫びは滝の向こうの森にまで響いた。

「シロヤ様！」

「向こうから声がしました！」

森の奥にいた兵団が滝を目指して走り出した。

「ちっ！このままじゃマズイ！」

もはや正気を保っていないシロヤを背負い、男——レジオンは森に向けて走り出した。

レジオンは、ただひたすらに森を走った。背負ったシロヤは、もはや何も喋らずに固まっていた。

星夜祭での傷が開き、新たに足や手に傷を負いながらも、レジオンはひたすら走り続けた。

やがてレジオンは、森の奥にひっそりと佇む小屋の前についた。

誰もいないことを確認して、レジオンはゆっくりと小屋の扉を開けた。

「！」

扉を開けた先にいた少女が、体を硬直させた。それを見たレジオンは、少女に軽く微笑んだ。

「俺だよ俺！レジオンだよ！」

「あ！レジオン様！申し訳ありません！」

そう言って、少女——クピンはレジオンに深く頭を下げた。

小屋

レジオンは、小屋の扉をゆっくりと閉じた。

小屋の中はそれほど広くはないが、必要最低限の生活をするには十分な物が一通り揃っていた。しかし、長く使っていないのだろうか、大半の物が埃を被っていた。

レジオンは、背負っていたシロヤをベッドに横たわらせた。しかし、シロヤは何かを発することもなく、何も映らない瞳のままで動きを止めていた。

シロヤを見つめる二人。

「一体・・・何があつたんですか？」

シロヤを見つめながらクピンが訪ねた。

「・・・。」

少し黙ったのち、レジオンは口を開いた。

「クロトが・・・滝壺に落ちちまったんだ・・・。」

「！」

クピンは絶句した。

「そんな・・・！シロヤ様とクロト様は兄弟同然の存在なのに・・・。」

シロヤはまだ脱け殻のように横たわっている。それを見ながら、レジオンは唇を噛み締めた。

「もう少し・・・俺がもう少し早く来ていれば・・・！」

クロトも一緒に助けられたかもしれない。その言葉を発する前に、レジオンは強く握った拳を地面に叩きつけた。

「くっ・・・俺がもう少し・・・。」

自分を攻め続けるレジオン。その横では、クピンがシロヤとレジオンをずっと見つめていた。

「・・・シロヤ様・・・。」

名前を呼んでも、ベッドの上のシロヤは反応しなかった。

．．．．．

．．．．．

．．．。

大分時間が経っただろうか。

レジオンは何とか立ち直ったものの、シロヤは以前目を覚まさない。

「まだ目を覚まさないか．．．。」

「はい．．．食事も口にしません．．．。」

今だ目を覚まさないシロヤの額に、そつと手を置くクピン。

「ああ．．．どうにかしないと．．．時期に見つかっちゃう．．．。」

「

この小屋は、滝からかなり離れた所にある。しかし、いつかは兵団がここまでやってこないとは限らない。

そつとレジオンは、壁にかけてあつた大剣に手をかけた。

「いざとなれば．．．戦うしかないか．．．。」

レジオンは大剣を構えた。

「！」

突如、レジオンが動いた。体制を低くし、今にも大剣を振り下ろさんとばかりに構えた。

「クピン！隠れてろ！」

クピンはすぐさま、小屋の奥に身を隠した。

ゆつくりと扉が開いていく。レジオンは額から汗を一滴流しながら、相手が現れるのを待った。

「．．．．．！！」

扉が開き、人が入ってきた。それを見た瞬間、レジオンは戦闘体制を解いた。

入ってきた人物は、杖を持った緑髪の男だった。

「リーグン……。」

リーグンはゆっくりと小屋に入り、ゆっくりと扉を閉じた。

そして……。

「……。」

「リーグン！」

リーグンは、レジオンの前で前のめりに倒れた。

レジオンがリーグンに駆け寄ると、小屋の床が赤く染まっていた。

「リーグン様！」

すぐさまクピンが飛び出し、リーグンをもう一つのベッドに寝かせた。

クピンはすぐさまリーグンの服を脱がして、薬を取り出した。

「……っ！」

リーグンの体に刻まれていた傷。数は少ないものの、その一つ一つが深く、そこからさらに血が流れている。

「リーグン……まさかシアンと戦ったな？」

リーグンの傷口を見たレジオンが、驚いたように言った。

リーグンの傷口が弓矢によるものだというのを、レジオンは瞬時に理解した。しかし、リーグンにここまで深い傷を与える弓矢使いは、シアンしかない。

「シアンと戦うなんて無茶すぎだ……俺でさえ勝てないかもしれないのに……。」

シアンの強さは、バルーシやブルーパはおろか、レジオンやランブウですらも凌駕する。それを知っていながら、リーグンはシアンと戦ったのだ。シロヤを守るために……。

「うう……。」

小さく声を上げるリーグン。クピンはリーグンに応急処置をしていた。

「シアン・・・本気でヤバイみたいだな・・・。」

応急処置を終え、リーグンは眠りについた。

「もうちよつと遅ければ・・・輸血が必要でした。」

「ギリギリセーフってところか。」

リーグンとシロヤを見つめる二人。

「シアン様・・・私達を殺すつもりなのでしょうか・・・。」

心配そうに呟くクピン。

「・・・心配するな。信じるんだよ、仲間を・・・シロヤもな・・・。」

その言葉に、クピンは安心した顔を浮かべた。そして、レジオン
も少し微笑んだ。

「!!!」

レジオンの表情が一変する。すぐさま大剣を手にとろうとする。

「!?!」

小屋の中にいた二人は、今起きた現象を理解するのに時間がかか
った。

ただ単に窓ガラスが割れた、それだけの現象だが、レジオンは隙
を作った。

ヒュン！

「うあっ！」

レジオンが腕を押さえてしゃがみこんだ。見ると、レジオンの腕
には矢が刺さっていた。

「ぐっ・・・速すぎだぜ・・・。」

レジオンは苦痛の表情を浮かべながら立ち上がり、大剣を手にし

て戦闘体制をとった。

忠義

クピンは怯えながら、小屋の外に目をやった。そこにいたのは、レジオンに向けて弓矢を構えるシアンの姿があった。

「シアン・・・様・・・。」

シアンの凄みに怯え、腰を抜かして座り込むクピン。その前に、レジオンが立ち塞がった。

「レジオン・・・貴様・・・邪魔をする気か！」

シアンはすぐさま矢を構えた。

「シアン様！」

突如、シアンの横から声がした。

見ると、シアンを固めるように兵団の兵達、そしてブルーシが現れた。

「シアン様！これ以上城の者達を傷つけてはいけません！」

ブルーシがシアンに指摘すると、シアンは構えていた弓矢をブルーシに向けた。

「貴様・・・私に指示するのか？」

シアンは今にも矢を放たんとしている。額に汗を浮かべながらも、ブルーシはその場を動かなかった。

「これ以上傷つけては、今後の国事に支障を来す可能性があります。」

その場に緊張が走る。

「ただでさえ国土を二人も失い、暗殺事件の事後処理などもこなさなければならぬ今、レジオンさんやクピンさんを失っては国事が滞ってしまいます。」

何とか説得しようとしているブルーシ。

しかし、レジオンが反応したのは言葉の中にあつたある一文だっ

た。

「おいバルーシ、国土を二人失ったってどういうことだ！」

レジオンが大剣を振り上げて構えるが、バルーシはレジオンを見つめるかのように視線を外した。

「シロヤ様の方は我々兵团にお任せください。必ずや城にお戻します。」

シアンに向かって敬礼するバルーシ。

それを見て、シアンはゆっくりと弓矢を下ろした。

「うむ・・・ならば任せよう・・・。」

バルーシから視線を外し、レジオンの方に視線を向けた。

「あのお方はどこだ！」

シアンはレジオンの言葉を聞く前に、割れた窓から小屋に入った。

「・・・!!!」

シロヤを探すシアンは、ベッドに視線を向けた瞬間に固まった。

「あ・・・ああ・・・。」

シアンの目に映ったのは、自分を助けてくれた時の面影を一切無くしたシロヤの姿だった。

「ああ・・・シロヤ・・・シロヤ・・・！」

名前を呼びながらシロヤに寄る。動きが次第におぼつかなくなり、最後は倒れるようにシロヤに寄り添った。

「うう・・・!うう・・・!」

寄り添って号泣するシアン。誰の声も届かずにただ泣き続ける。しかし、そんな泣き声もシロヤには届かなかった。

「バルーシ・・・さっきの話を聞かせてもらおうか!失った国土は誰なんだ!」

レジオンがバルーシにつかみかかる。苦い顔をしながら、バルーシは重い口を開いた。

「ランブウさんと・・・ブルーパ様です・・・。」

「何だと!？」

今にも殴りかからんと詰め寄るレジオンに、バルーシはさらに表情を暗くした。

「ランブウさんは私達兵団との戦いで軽症で済みましたが、国事をするのには無理があります……。」

そしてバルーシは、表情をまたもや暗くした。

「プルーパ様は……ロイーエ様との戦いで……。」

そこまで言つて、バルーシは口を閉ざした。

「プルーパがロイーエと戦つてなんだってんだ！ 言え！」

バルーシを睨み付け、つかみかかっていた手の力を強めた。しかしバルーシは、口を開かず口を閉ざし続けた。

「バルーシ……てめえ……！」

殴りかかろうとしたバルーシの手を、バルーシはしっかりと掴んだ。

「もう……いいでしょう！」

レジオンを振り払い、兵団に向かって右手を上げた。

「この小屋にいる人間全てを城に連れて行ってください！」

「はっ！」

兵達がバルーシに向かって敬礼すると、一斉に小屋へと入っていく。

「やめてください！ 離してください！」

兵がクピンを抱えて城に向かっていくのに続き、リーグン、シアン、シロヤを抱えた兵も城に向かっていった。

「おいバルーシ！」

またもや掴みかかろうとするレジオンをバルーシが制した。

「わかっていますよ……これが正しい道ではないことを……。」

震えながらバルーシは叫んだ。目には涙をうつすらと浮かべていた。

「俺は兵団長……女王に忠義を誓った者なんです……。」

右手を上げたまま、腰にかけてた剣を抜き、高く振り上げた。

「だから……！ 女王の意思に反する考えを持つてはいけないので

す・・・！」

カタカタと震えながら、バルーシはさらに言葉を続けた。

「だから・・・シアン様のやっていることが正しい道ではないと思
った時点で・・・忠義に反しています！」

「おいバルーシ・・・。」

レジオンがバルーシを見て固まる。今からバルーシが何をしよう
としているのか、全くわからなかった。

「忠義に反するのは騎士、兵団長としての恥・・・ならば！」

バルーシは剣を持っていた左手に力を込めた。
そして・・・。

「！！！！！」

ぼとっ！

「ううう！！！！！」

一瞬の静寂が二人を包む。

静寂の中で二人の間にあったのは、おびただしい量の血と、バル
ーシの右腕だった。

治療

「バ！バカかお前は！！！」

レジオンはすぐさまバルーシに駆け寄る。右腕があつた部分からどんと血が流れていき、土を真っ赤に染め、血の臭いを強烈に放っている。

「忠義を守れぬ腕など・・・不要・・・ぶ・・・つ・・・。」

そう呟き、バルーシは目を閉じた。

「畜生！！！」

レジオンはバルーシの腕を縛り、切り落とした右手を広い、さらにバルーシを背負って走り出した。

「くそ！一体・・・何が起こつてるって言うんだ！！！」

身の回りで色々なことが起きすぎていて、レジオンは混乱していた。しかし、そんなレジオンの言葉を、森が嘲笑うかのようにかき消した。どこにも響かないレジオンの叫びは、ただむなくレジオンの周りに響くだけだった。

・・・。。。

・・・。。。

・・・。

「失礼します・・・。」

一つの部屋に入る。その部屋の先にいたのは、動かずに何かを呟いているだけの存在となつたシロヤだった。

そんなシロヤに、クピンは持っていたトレイの上の食事を置きながら、ゆつくりと話しかけた。

「シロヤ様・・・朝食の用意ができました。」

しかし、シロヤは動かない。それを見て、クピンは寂しそうな表情を浮かべた。

「・・・お体に障りますので、せめて果物の一つは召し上がってください・・・トレイはまた後程、取りに伺います・・・。」

クピンはゆっくりと部屋から出ていき、扉を閉める前にシロヤに向かつて頭を下げた。

「・・・失礼します。」

「・・・どうだ？」

シロヤの部屋の前にいたレジオンの問いに、クピンは無言で首を振った。

「・・・そうか。」

暗い表情をするレジオン。二人の間に重い空気が流れた。

「・・・シアン様も以前、部屋から出ていません・・・もちろん食事も・・・。」

あの小屋での一件から、ちょうど一日が経った。

シロヤは以前変わらずに、まるで人形のように動かない。

そんなシロヤを見たシアンも、あれから部屋に出てこない。

「シロヤをあんなにしたのが自分のせいだ・・・っていう罪の意識から塞ぎこんじまったのか・・・。」

レジオンは歩きだした。その後ろをクピンがついていく。

向かったのは医務室だった。医務室の中は、たくさんの医者や僧侶が忙しそうに走り回っていた。

そんな医務室の奥の二つのベッドに、特に人がこった返していた。

「大丈夫なんでしょうか・・・。」

クピンが心配そうに二つのベッドに横たわっている二人、リーグンとランブウを見た。

ランブウは剣での切り傷が身体中に刻まれていて、僧侶が治癒魔法で小さな傷口を治していた。

一方リーグンは、矢で貫かれた傷を医者が必死に処置していた。

「ああ、あいつらの腕を信じようぜ。」

そう言って、レジオンは医務室のさらに奥に向かって歩きだした。
「それより心配なのは……。」

レジオンとクピンは、目の前の大きな扉を開けた。

「ロイーエ様……？」

大きな扉の先の部屋はガラス張りで、さらに向こう側の部屋が見えるようになっていた。

「……ずっと……ロイーエはあの状態か……。」

ロイーエは、向こう側が見えるガラスをずっと見つめていた。

「ごめんなさい……お姉様……ごめんなさい……ごめんなさい……。」

向こう側を見ながら、ロイーエはずっと呟いていた。

「どうだ……？」

レジオンは近くにいた医者に話しかけた。

「……輸血は間に合いましたが……お二人とも、特にブルーパ様は非常に危険な状態です。」

医者は無表情のまま答えた。

この部屋は集中治療室。特に腕のある医者や僧侶のみが治療を行う場所であり、危険な状態の患者が集まる場所だ。

今集中治療を受けているのは、バルーシとブルーパだ。

バルーシは自らの右腕を自分で切り落としたことによる大量出血と、傷口からの感染症の治療。そして、切断された右腕の結合手術が行われていた。

ブルーパは、ロイーエとの戦いによって受けた傷の治療が行われていた。しかしその傷は想像以上に深く、箇所が多かった。「ロイーエ様も……罪の意識でしょうか……？」

「……かもな。」

またもや二人の間に流れる重い空気。その空気を引きずったまま、二人は集中治療室を後にした。

レジオンとクピンは、長い城の廊下を歩いていた。

「今・・・シロヤ様やシアン様の看病をできるのは・・・私とレジオン様だけになりましたね・・・。」

「ああ・・・。」

二人はまだ重い空気を背負っていた。

そして二人が着いたのは、シアンの部屋の前だった。シアンの部屋の前には、クピンが置いた朝食があった。

「やっぱり・・・目を覚まさないのか・・・。」

レジオンが呟くと、クピンは食堂に向かって走り出した。

「私、替えをお持ちしてきます！」

小さくなるクピンの背中を見ながら、レジオンは捨てる予定のシアンの朝食のサンドイッチに手を伸ばした。

「・・・固いな。」

復帰

レジオンとクピンが看病を続けて、さらに一日が経った。

依然、シロヤもシアンも食事を口にせず、二日前に比べて痩せていた。

「・・・シロヤ様、今日の昼食です。」

クピンは二日間、欠かさず三食をシロヤに届けていた。毎回来ても無くなっていない食事を下げ、新しい食事を持つてくることをずっと続けていた。

「シロヤ様、お体に障ります。少しでもいいので召し上がってください。」

しかし、シロヤはその場を動かずに、ただずっと呟いていた。

「わかんねえ・・・わかんねえよ・・・。」

シロヤはただ、同じことをずっと呟き続けていた。

そんなシロヤを見ながら、クピンは涙をこらえて部屋を後にした。

「・・・失礼しました。」

クピンは悲しそうな顔をしながら、シロヤの部屋を離れていった。

集中治療室の前で、レジオンは手を組んで座り込んでいた。

「・・・。」

バルーシとブルーパが運ばれてきてから丸一日が経った。手術自体は終わったものの、まだ医者と僧侶が側についていなければ危険な状態だった。

「・・・。」

レジオンは、集中治療室からの報をずっと待っていた。かれこれ五時間は待ったであろうか・・・。

その時・・・。

「！」

集中治療室のドアが開き、中から数人の医者と僧侶が一斉に出てきた。

レジオンはすぐさま立ち上がった。

「バルーシとプルーパの容態は！？」 掴みかかるように前に出るレジオンに向かって、一人の医者が首を縦に振った。

「・・・そうか！」

城に来てから初めての笑顔を浮かべ、レジオンはすぐさま集中治療室の中に向かっていった。

「バルーシ！プルーパ！」

ガラス張りの向こう側から叫ぶ。

バルーシの切り落とされた腕はしっかりと結合されていた。

対してプルーパは、あらゆる箇所に包帯が巻かれていて、口には呼吸器がつけられていた。

その傍らには、プルーパのベッドの側で泣き続けているローイエがいた。

「お姉様・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・！」

泣き続けながら、ローイエは昨日からずっと同じ言葉を呟き続けていた。

「・・・。」

その光景を見て、レジオンは無言のまま集中治療室を後にした。

「レジオン様・・・どうでしたか？」

集中治療室前にいたクピンが心配そうな声で話しかけた。レジオンは無言のまま、ゆっくりと首を縦に振った。

「・・・！」

クピンも同じように笑顔を浮かべたが、すぐさま表情を変えた。

「まだ・・・目覚めないんですね・・・。」

クピンは、レジオンがなぜ無言だったのかが分かり、浮かべていた笑顔をすぐさま暗くした。

「気長に見ていこうぜ・・・。」

それを聞いて、クピンは軽くうなずいて医務室を出ようと走り出した。

その瞬間……。

バタツ……。

「クピン！」

レジオンが叫ぶ。その先にいたのは、走り出した瞬間に前のめりに倒れたクピンの姿があった。

すぐさまレジオンはクピンに駆け寄った。

「おいどうした！クピン！」

激しく呼吸をするクピン。レジオンはクピンの額に手を置いた。

「熱っ！」

クピンの体は高熱を出していた。息を荒くしていて、手足を動かすのがやつとな程に弱っていた。

「ハア、ハア……シロヤ様の……看病を……ハア、ハア。」

レジオンから離れ、フラフラになりながら医務室を出ようとするが、足はまっすぐ前にいかず、壁に何回も激突しながら部屋を出た。

「おいクピン！無理するな！」

医務室を出ると、クピンは医務室の前で前のめりに倒れていた。

「ハア、ハア、シロヤ……様……！」

うわ言のように呟くクピンを抱えあげ、レジオンは医務室へと引き返した。

「……とりあえず落ち着いたか。」

クピンを医務室に寝かせたレジオン。レジオンらしい荒い応急処置だが、楽になったのか、クピンの荒くなっていた呼吸は収まり、静かに寝息を立てていた。

「無理しすぎだぜ……。」

レジオンは近くにあった椅子に腰掛けながら呟いた。

「これで・・・前線に出れるのは俺だけになっちまったな・・・。」

クピンが倒れたため、看病や事後処理をすることができるのがレジオンだけになってしまった。

「やれやれ・・・。」

ため息混じりに呟くと、誰かが医務室に入ってきた。

「レジオンさん・・・。」

「ん？お前・・・。」

レジオンはやって来た人物を見て、驚いたような表情を浮かべた。

「やはり・・・状況は芳しくないようですね・・・。」

「ていうか・・・何でお前歩いてるんだ？」

レジオンはやって来た人物を不思議なものを見る目で見つめた。

「ああ、僕だったら大丈夫ですよ。傷はもう塞がりました。」

そう言っ、やって来た人物——リーグンは腕を巻くって見せた。まだ包帯は巻かれてはいたが、血は出ていない。

そして、リーグンは表情を引き締めて言った。

「僕はお二人の看病をしますので、レジオンさんは事後処理をお願いします。」

国事

「お前・・・本当に大丈夫なのか？」

レジオンは心配そうに聞いた。病み上がりのリーグンを前線に復帰させる事が、レジオンにとっては抵抗があつた。

しかしリーグンは、そんなレジオンの心配の視線を気にしていなかった。いかにように笑つた。

「僕なら大丈夫ですよ。国に関わることなんですから、これぐらいの無茶は当然です。」

リーグンはずっと笑顔だつた。

「それに・・・シロヤ様に気持ちよく目覚めてもらうためにも、国のいざこざは早めに解決しなければ、うっ！」

言葉の途中で、リーグンは腕を押さえてうずくまつた。

「リーグン！」

レジオンが駆け寄ると、リーグンの着ていた服の袖が赤くなつていき、腕を伝つて指先から血が滴り落ちていた。

「だから無理するなつて！出血多量で死ぬぞ！」

すぐさま近くにあつた包帯に手をかけたが、リーグンは無言でその手を掴んだ。

「・・・リーグン・・・。」

ただ無言でレジオンを見つめるリーグン。自分は大丈夫だということは無言で伝える。

「・・・死ぬような真似はするなよ。」

「・・・はい！」

二人は同時に立ち上がり、医務室を出ていった。

「とは言つたものの・・・。」

レジオンは作戦会議室にやって来て、数人の兵士と学者を集めて頭を抱えていた。

国事を任されたが、頭を使う仕事を得意としていないレジオンにとっては、かなりの大仕事であった。

今レジオンが見ているのは、星夜祭後に調査兵团によってまとめられたリーグ側の人間のリストだった。

「しっかしまあ・・・意外と裏切り者が多いなあ・・・。」

リストに乗っていた人物は五十人を遥かに超えていた。その中には、砂の竜王時代から城に出入りしている学者や、一般市民と多種多様な人達の名前が書かれていた。

「とりあえず、暗殺にどれだけ関わっているのかを三段階評価で全員まとめよう。三の評価がつけば封印獄か処刑、二の場合は投獄、一の場合は軟禁処分だ。」

レジオンはその旨を伝え、学者と兵士に評価を一任した。その間にレジオンは、別の紙に目を通した。

今日を通しているのは、暗殺直前に書いたと思われる予算案だった。おそらく、新たな王が即位した時に通そうとしたのだろう。

「・・・学ばないな。」

予想通り、軍事予算が例年の予算案に比べてはね上がっていた。

「・・・ん？何だこれ。」

ふとレジオンは、一番下の項目に目を通した。そこには、例年にはなかった新たな予算が組まれていた。

「・・・”封印護衛”？」

新たな項目の名前は、”封印護衛”と書かれていて、他の予算と比べて少し予算が多かった。

「リーグ・・・一体何がしたいんだ・・・？」

そう思ったレジオンは、近くにいた学者に話しかけた。

「おい、リーグの評価は？」

「もちろん三です。おそらく処刑になるかと・・・。」

「いや、リーグは封印獄処分で頼む。」

「元七人衆の処分はいかがなさいますか？」

「判断に任せる。」

そう言って、レジオンは予算案の紙を置き、違う紙に目を通した。

一方その頃、リーグンはシロヤとシアンの部屋の食事を厨房にもって行く途中だった。

もちろん、二つの食事は一つも減っていなかった。

「・・・シロヤ様、シアン様・・・。」

運びながら呟くリーグンは、悲しい表情を浮かべていた。

厨房に着くと、リーグンは悲しい表情のまま食事を置いた。

「あの・・・リーグン様？」

心配したのか、近くにいた料理長が話しかけてきた。

「やはり・・・お二人とも召し上がりませんでしたか・・・。」

「・・・はい・・・。」

しばらく二人の間に沈黙が走る。

「・・・あ、それとお願いがあります。」

「はい・・・なんでしょうか？」

「メイドのクピンさんが過労で倒れていますので、何か元気になれるようなものを作ってあげてください。」

「クピンさんがですか！？分かりました！」

すぐさま調理にかかった料理長達を後ろに、リーグンは厨房を後にした。

暗い表情のまま、シロヤの部屋に向かうリーグン。

「何か・・・いい方法はないのかな・・・。」

そう呟いて道を曲がった。その時、リーグンの目の前に人が映り込んだ。

「リ！リーグン様！」

ビックリしたような表情を浮かべる人物は、リーグンの名前を叫んだ瞬間に膝を崩した。

「何で・・・寝てないんですか！クピンさん！」

立っていたのはクピンだった。顔を熱で真っ赤にしながらも何と

か立とうと足に力を入れるが、熱で体力を奪われているクピンにとつては、体制を維持するのは困難なことだった。

「早く・・・シロや様の・・・部屋に・・・。」

「そんな！無理しすぎですよ！」

介抱しようと抱き抱えた瞬間、さらに奥から人の気配がした。

「クピンちゃん・・・無理はしないで・・・。」

奥からやって来た人物は、ふらふらになったクピンの肩をゆつくりと持ち上げて、ゆつくりと医務室へと向かっていった。

選択

集中治療室で、ロイーエはずっとブルーパの隣で泣き続けていた。
「ごめんなさい・・・お姉様・・・ごめんなさい・・・！」

ロイーエは、ブルーパが集中治療室に運ばれてからずっと、同じ言葉を呟きながら泣き続けていた。

誰の声も聞こえず、その場を動かない。

「バルーシ！ブルーパ！」

ガラス張りの向こうから声がしたが、ロイーエには全く聞こえない。そして、その言葉の後の扉を閉めた音も聞こえない。

集中治療室の中には、ロイーエの泣く声が響き続けていた。

「お姉様・・・ごめんなさい・・・！」

泣き続けるロイーエ。

スー・・・スー・・・スー・・・。

「お姉様！！！」

何も聞こえなかったロイーエの耳に響いた音。弱々しいが、しっかりと聞こえる呼吸の音。

ブルーパの呼吸の音が、ロイーエの耳にはっきりと聞こえた。

「お姉様！お姉様！お姉様！」

何度も呼び掛けるロイーエ。弱々しかった音が次第に強くなっていき、それはか細い声に変わった。

「ロー・・・イエ・・・。」

非常にか細く、弱々しい声。普段なら聞き逃してしまうような小さな声だが、はつきりと聞こえた。

「ロイーエ・・・。」

「お姉様！！！」

何かを喋りかけるように強くなる声。

「ローイエ……聞いて……。」

「お姉様!？」

ブルーパは、震える手をゆっくりと持ち上げて、ローイエの頭の上に乗せた。そして呼吸器をつけたまま、ブルーパはゆっくりと語り始めた。

「私……夢を見たの……。」

「夢……?」

語り出したブルーパの目には、次第に涙が溜まり始めていた。

「うん……シロヤ君がいなくなる夢……。」

「お兄様が……?」

「うん……何も言わないでね……一人で国を出ていっちゃうの……。」

「そんな!私そんなの……嫌だよ……。」

ローイエは再び泣き出した。

「私も……嫌……かな?」

「え……?」

「あんなこと言ってたけどね……私もやっぱりシロヤ君が好き……シロヤ君にずっといてほしい……。」

それは、ブルーパもローイエも、もちろんシアンやバルーシらも思っている皆の総意であった。

「だって……私を命懸けで守ってくれたんだもの……惚れて当然よ……。」

星夜祭での戦いで、ブルーパに向かってきた針の壁を、シロヤは満身創痍の状態で受け止めていた。

話を聞きながら泣き続けているローイエの頬を、ブルーパはそつと撫でた。

「ローイエ……あなたの選択が正しいとも間違ってるとも言わないわ……私もシロヤ君が留まってくれたら嬉しいもの……。」

「お姉様……。」

「うん……だからね……ローイエが思うように進んで……。」

ローイエが何故泣き続けていたのか。

それは、ローイエが自ら選択した道、”シロヤを城に連れ戻す”という道が正しかったのかわからなかったからだ。この道を選んだが故に、自分はブルーパを傷つけたのだという自責の念が、ローイエを追い詰めていた。

「ローイエが選んだ道なんだから・・・自信持って・・・ね。」

「お姉様・・・お姉様・・・。」

どんどんと溢れてくる涙を抑えきれずに、ブルーパの手を濡らしていった。

そんなブルーパの手を、ローイエはぎゅっと握った。

「お姉様・・・私やつぱり・・・お兄様と一緒にいたい！」

「私もよ・・・ローイエ・・・。」

涙を流しながら、ブルーパは精一杯の笑顔を浮かべた。それに答えるように、ローイエもぼろぼろと涙を流しながら笑った。

「お姉様・・・私・・・お兄様が大好き！」

「私も大好き・・・だから・・・今はシロヤ君を気にかけてあげて・・・ね。」

ブルーパは最後に小さくウィンクをして、再び目を瞑った。

「う・・・うう・・・うわああああん！！！」

ローイエはブルーパの手を握りながら、ただひたすらに泣き続けていた。

「お姉様・・・。」

ローイエは立ち上がって、ブルーパの頬を軽く撫でた。これがローイエなりの、ブルーパへの決意表明だった。

まだ流れてこようとする涙を抑え、ローイエはゆっくりと集中治療室を後にした。

「・・・！」

集中治療室を出て一番最初に目に映ったのは、誰かがふらふらになりながら医務室を出ていく姿だった。

「・・・クピン・・・ちゃん!？」

医務室に運ばれて寝ていたクピンが、ベッドから降りて医務室を出ていこうとしていた。

「クピンちゃん!無理しちゃ!」

ローイエの声を聞かず、クピンは医務室を出ていった。

「クピンちゃん!」

慌ててローイエはクピンを追いかけた。

ちょうど曲がり角を曲がろうとした時、クピンは急に立ち止まった。

「何で・・・寝てないんですか!クピンさん!」

見ると、同じく曲がり角を曲がろうとしたリーグンが立っていた。

ローイエはすぐさまクピンに駆け寄って、肩を貸してあげた。

「クピンちゃん・・・無理はしないで・・・。」

ローイエはゆっくりと医務室へと向かった。

怒号

「ハア・・・ハア・・・ロイーエ・・・様・・・。」

荒く呼吸をしながら、クピンは目の前の人物の名前を呼んだ。

「クピンちゃん、無理はしないで、ね？」

ゆっくりと額の上にタオルをかける。

「じゃありーグンさん、クピンちゃんの看病をお願いします。」

「はい、分かりました。」

リーグンはロイーエに小さく敬礼をした。

そのままロイーエは、クピンとリーグンに背を向けて歩き出した。

「あの・・・ロイーエ様？」

医務室を出ていこうとするロイーエに、リーグンは後ろから声をかけた。

「ロイーエ様・・・どちらへ？」

「・・・会いに行きたいの・・・お兄様に。」

「し！しかしシロヤ様は今！」

慌てた様子で説明しようとするリーグンに、ロイーエはゆっくりと頷いた。

「うん・・・分かってる・・・お兄様のこと・・・。」

「それならば・・・。」

「でもね！」

ロイーエはリーグンの方を勢いよく向いた。その目には、並々ならぬ決意が秘められていた。

「私・・・お兄様に話したいことがたくさんあるの！それに、聞いてなくてもいいから・・・私のお話を聞き流してくれてもいいから側にいたいのに！」

それを聞いたリーグンは、少し表情を緩めた。

「そうですね・・・ロイーエ様なら・・・。」

そして、リーグンはゆっくりと頷いた。

「ローイエ様、シロヤ様のこと・・・よろしく願います。」

「・・・はい！」

頷き合う二人。そして、ローイエはシロヤの部屋に向かって走り出した。

「・・・。」

部屋の前で、ローイエは小さく深呼吸した。プルーパと約束したものの、やはり自分のせいだという意識が強いため、シロヤに会うことを多少ためらっていた。

「・・・！」

拳を握りしめ、ローイエはゆっくりと扉を開けた。

「！！！」

目の前にいたシロヤの姿を見て、ローイエは脱力した。今までに見たことのないようなシロヤの姿がそこにあった。

「お兄・・・様・・・。」

涙が目から溢れようとしてくるが、ローイエはそれを必死に止めた。今、自分は泣くべきではないと、ローイエは必死に自分に言い聞かせた。

「わかんねえよ・・・わかんねえよ・・・。」

ただ呟き続けるシロヤに、ローイエはゆっくりと近づいていった。

「お兄様・・・。」

「わかんねえよ・・・わかんねえよ・・・。」

ローイエの声に気づかず、ただ同じことをローイエは呟き続けていた。

「・・・お兄様、聞いて。」

「わかんねえよ・・・。」

「私もプルーパお姉様も・・・もちろんシアンお姉様もお兄様のこと大好きなんだよ・・・それだけはわかってほしいの・・・。」

しばらく無言になるローイエ。

「・・・それが・・・わかんねえんだよ・・・。」

城に来てから初めて、シロヤが違うことを口にした。次第にシロヤの声は、呟きから怒号に変わった。

「それが・・・それがわかんねえんだよ!!!」

抑えきれずに溢れだしたシロヤの怒りに、ローイエは思わず怯えて体を震わせた。

シロヤの怒りはさらに強くなる。

「シアン様は・・・何がしたいんだ！俺を殺そうとしてるのか!？」

「それは違うよ！お姉様はシロヤ君と一緒にいたいから!」

「一緒にいたい!？殺してでも一緒にいたいって言うのか!？」

「そうだよ!」

ローイエの叫びとシロヤの叫びが交差する。

「俺が嘘さえつかなくや・・・!ランブウさんやブルーパ様やリーグン様が傷つくことはなかったんだ!それに・・・クロトが死ぬこともなかったんだ!」

「お兄様を選んだ道なんだから間違ってるなんて思わないで!私達はお兄様を責めたり恨んだりしないんだから!」

その言葉を聞いて、シロヤは急に黙りこんだ。

「・・・そもそも、何で俺のことを・・・。」

「お兄様がお姉様を助けたからだよ。」

しかし、シロヤは再び頭を抱えてうずくまった。うずくまったまま、シロヤは悲痛に似た声を上げた。

「たかがバシリスク一匹だぞ・・・あんなの倒したくらいで・・・もう・・・訳がわからねえよ・・・。」

シロヤは次第に嗚咽を漏らし始めていた。今まで涙を流さなかったシロヤが、急に涙を流し始めた。

「・・・お兄様・・・。」

ローイエは静かに呟いた。

「・・・私達は本当にシロヤ様が好きなんだよ?」

「信じられるかよ・・・ましてやシアン様が俺のことなんて・・・。」

「うん・・・絶対に好きだよ。それだけは分かる。」

「何だよ・・・何でそう言い切れるんだよ!？」

怒りをローイエにぶつける。ローイエはこらえていた涙をゆつくりと流した。

「・・・お兄様・・・聞いて。」

口調穏やかに、ローイエはゆつくりと語りだした。

「お兄様・・・聞いてほしいことがあるの。」

「聞いてほしい・・・こと?」

シロヤは顔を上げた。涙で顔をぐしゃぐしゃにしていた、髪は乱れていた。

「うん・・・シアンお姉様の話・・・五年前に起きた話・・・。」

ローイエはゆつくりと語りだした。

王位

「お父様・・・！」

「お父様！お父様！お父様！！！」

「うわあああん！おとうさまあああ！！！」

砂漠には珍しい、強く冷たい雨が降る中、全国民が喪服で城に並んでいた。

五年前、バスナダ国王、シアン達三姉妹の父が暗殺された。

砂の竜王として恐れられていたバスナダを統治していた王が暗殺されたことで、国民達は完全に真つ二つになっていた。

片方は、武力が全てだった国作りを止める平和主義者。もう片方は、引き続き武力を第一に優先する武力主義。

お互いの意見が拮抗し合うなか、城では新たなる王の話になっていた。

しかし、ここでも意見が別れていた。それは、暗殺された先代国王が残したと思われる遺書の内容が原因だった。

「やはり王はブルーパ様でしょう。」

「しかし、先代国王が残した遺書には違うことが書かれているぞ。遺書の内容は、新たなる王に三姉妹の次女であるシアンを推薦するというものだった。」

「これは先代国王の物ではないのではないか？」

「しかし、先代国王直筆であることは証明されたではないか。」

「しかしシアン様はまだ十歳だ。王位継承にはまだ早いであろう。」

「ブルーパ様は今年で十五歳だ。王位継承には十分だろう。」

などと、話し合いの内容はブルーパとシアンのどちらに王位継承をするかという話だった。

互いに譲らぬ両方の意見。しかし、思わぬ一言で状況は急に変わった。

「ヒヒヒヒ！王の命令とあらば、従わないわけにはいかないでし

よう？ヒヒヒヒヒ！」

当時、まだ一学者として城に出入りしていたリーグだった。当時から国王に気に入られていたリーグは、大臣の最有力候補であった。しかし、シアン様はまだ十歳……。」

「先代国王にも何かお考えがあるのではないのですか？ヒヒヒヒヒ！」

結論は、”国王の遺書に従う”に決定し、新国王はシアンということが発表された。

しかし、それを快しとしない者が城の中で現れ始めていた。もちろん国王に手を出そうとするもの等いなかったが、シアンはそれを視線から読み取っていた。

「……。」

それを感じ取ってから、シアンは人と話す回数が少なくなっていた。

心を開くのはごく少数の人にのみ。

「……シアン……。」

「……。」

ブルーパの問いかけに、シアンは何も答えなかった。

シアンの中でブルーパは、”心を開かない”方に属していた。しかし、シアンは心を開こうと努力をしていたが、それはある日を境に無くなった。

それは、王位継承が決まった日の夜、シアンがブルーパの部屋の前を通った時だった。

「うう……ううう……何で……何でシアンに……。」

「おねえさま……。」

たまたま聞こえたブルーパの泣き声。それを励ますように言葉をかけるローイエ。

「何でシアンが女王になったの……。」

「おねえさまのせいじゃないよお……。」

「でも・・・でも何で・・・ううう・・・。」

部屋から聞こえる嗚咽。それをシアンはしっかりと聞いていた。

「お姉・・・様・・・。」

シヨックが大きすぎて、シアンはしばらくその場を動かず、声が震えていた。

プルーパは王位がほしかったのだろうか、泣くほど王位がほしかったのだろうか。

・・・なぜそれを私に直接言ってくれなかったのだろうか。

裏切られた気分だった。シアンは溢れる涙を抑えながら部屋に入るが、一人になった途端、急に涙が溢れだした。

「うう・・・うつ・・・ふええええん！！！」

溢れだした涙は止まらなかった。

着せてもらった女王のドレスもティアラも、シアンはいらなかった。

ただ欲しかったのは、信頼できる家族、友達、そして恋人・・・。

いつまでもずっと、三姉妹仲良く一緒に笑い合えると思っていた。

「うう・・・！ううう・・・！」

止めようとしても止まらない涙は、いつの間にか朝の光を反射していた・・・。

それ以来、シアンは国事に一生懸命取り組むようになった。

砂の竜王という異名を吐き捨て、皆が仲良く笑い合えるような国を目指した。

家臣も次第にシアンに賛同していき、いつの間にか、シアンを新女王として慕うものが城の大半を占めるようになった。

しかし、反シアンを掲げる集団があったのも事実だった。

「ヒヒヒヒヒ！まさか自ら国に携わろうとするなんてね・・・。」

「しかし、これでは完全に砂の竜王はおしまいですよ！」

「何か手はないんですか？レーグさん。」

「ヒヒヒヒヒ！お任せを！ここまでは先代国王の筋書き通りなんですよ。」

リーグは怪しく含み笑いを続けた。

反シアンの筆頭であるリーグは、着々と手を進めていた。砂の竜王時代を取り戻そうとするリーグ達の最終兵器は、先代国王が残した遺書にあった。

「この遺書、実は解読されていない部分があるんですよ。そこに書かれた内容と、奥さまであるイリーボア様の日記・・・この二つが私達の切り札なんですよ。ヒヒヒヒヒ！」

リーグは怪しく笑った。

衛兵

「・・・シアン・・・どうして何も話してくれないの？」

「・・・。」

王室の玉座に腰掛けているシアンに、プルーパーは寂しそうな顔で詰め寄っていた。

対してシアンは、一切表情を替えない。

「ねえ・・・答えて！何でも言ってくれないの！？」

「・・・。」

「何で・・・？私達・・・家族でしょ・・・？ねえ・・・シアン・・・。」

次第に涙声に変わっていき、プルーパーの足元に涙が落ちていった。なおも表情を変えないシアンに、プルーパーはさらに涙を流しながら詰め寄った。

「お願いシアン！一言でもいいから・・・声をかけてよ・・・！お願い・・・！」

膝から崩れ落ちるプルーパーを、シアンは無表情でただ見下ろしていた。

「うう・・・！うう・・・！」

溢れてくる涙を抑えきれず、プルーパーは膝について泣き出した。

「・・・女王様。」

突如聞こえた第三者の声。振り向くと、扉の前にいたのはレーグだった。

「レーグ・・・あなたは確か王室に出入りが許されていないはずですよ。」

「細かいことは気になさらずに・・・ヒヒヒヒ！」

王室に響く含み笑い。プルーパーは顔をしかめるが、シアンは一切

表情を変えない。

「・・・何の用だ。」

「ヒヒヒヒヒ！単なる助言ですよ、助言。ヒヒヒヒヒ！」

それを聞いたシアンは、勢いよく玉座から立ち上がった。

「一学者が私に助言だと！？ふざけるな！」

そう言つて、シアンは近くの衛兵に叫んだ。

「そのの学者をつまみ出せ！」

衛兵が一斉にリーグに群がって、たちまちリーグはつまみ出されてしまった。

「・・・。」

それを見届けたシアンは、玉座を離れて自室へと向かっていった。
「待つてシアン！話を聞いて！お願い！」

そんなプルーパの叫びもむなしく、シアンは無言のまま自室へと入っていった。

「シアン・・・。」

シアンが入っていった部屋の扉を、プルーパはしばらく見つめ続けていた。

「ヒヒヒヒヒ！」

「リーグ・・・あなた・・・。」

王室を出ると、リーグが扉の前に立っていた。

「女王様が心配なのですか？まああれだけ避けられていれば当然ですよねえ・・・ヒヒヒヒヒ！」

「口を慎みなさい。私も一応王族なのよ。」

リーグは悪びれる様子もなく、ただ笑い続けた。

「・・・もういいわ、あなたと話していると頭痛くなるわ。」

そう言つて、プルーパはリーグを通りすぎて自室に向かおうとした。

「ヒヒヒヒヒ！何を心配する必要があるのですか？」

プルーパは動きを止めた。

「・・・どういうことよ？」

「ヒヒヒヒヒ！近々わかりますよ！」

それを言われ、プルーパは勢いよく振り向いてレーグを睨み付けた。

「言いなさい！シアンに何をするつもり！？」

「何も致しませんよ？私はただ言葉をかけるだけ・・・ヒヒヒヒヒ！」

含み笑いを止めないレーグ。しびれを切らしたプルーパは、レーグに掴みかかるうと前に出た。

その瞬間・・・。

ヒュン！

「ほう・・・。」

プルーパは動きを止めた。

レーグは首に剣を向けられていた。そして剣を向けていたのは、王室への扉の前にいた衛兵だった。

「それ以上の王族への無礼は許しません！」

衛兵はレーグを睨み付けて剣を強く握った。

「ヒヒヒヒヒ！あなた・・・衛兵でしょう？」

「私はバスナダの王族に忠誠を誓った身。例えば身分が上の方でも、王族への無礼を見逃すわけにはいきません！」

レーグと衛兵はしばらく睨み合った。

「ヒヒヒヒヒ！怖い怖い。」

全く怯えた様子を見せず、レーグは含み笑いを続けながらその場を立ち去った。

「・・・ありがとうね。」

プルーパは衛兵に軽く頭を下げた。それに対して、衛兵は萎縮しながら敬礼した。

「ブルーパ様から感謝の義を頂き、光栄至極に存じます。」

「あはは、そんなに改まらなくていいわよ。」

ブルーパは、笑いながら衛兵を見つめた。

「んゝゝゝ顔見えないから兜取ってくれないかしら？」

ブルーパに言われ、衛兵はゆっくりと兜を取った。中から銀髪
の青年の顔が現れた。

「あら、かつこいいじゃない。歳も私と同じぐらいじゃないかしら。」

「そんな恐れ多いゝゝゝ。」

衛兵はさらに萎縮した。

「レーグに剣を向けた貴方なら信用できるわね。」

ブルーパはしばらく衛兵を見つめたのち、表情を引き締めて真剣な口調に変わった。

「貴方を”短期間調査兵”に任命します。以後、王室への見張りを続けながらレーグの動向を観察してください。」

「は！はい！粉骨碎身の覚悟で任務に当たらせていただきます！」
勢いよく敬礼をした衛兵に、ブルーパは微笑みかけた。

「うん、期待してるわね。」

そう言つて、ブルーパは立ち去ろうと背を向けて歩き出した。

「ゝゝゝああ、名前聞いてなかったわね。貴方、名前は？」

「はい！バルーシと申します！」

「うん、わかったわ。じゃあよろしくね、バルーシ。」

「はっ！」

衛兵——バルーシは力強く敬礼をした。

虚脱

あの日以来、ブルーパはリーグの動向を伺うようになった。短期間調査兵に任命されたバルーシも、王室への警備を続けながらリーグを観察し続けていた。

ある日、ブルーパはバルーシを自室に呼んだ。二人は向かい合わせに座り、互いの観察結果を話し合っていた。

「私の方は全然だめよ。何の動きもなかったわ・・・どう？あの日以来、王室で何か動きはあった？」

「はい、定期的に王室に足を運んではいますが、いずれもつまみ出されてしまってます。シアン様に大きな変化も見受けられません。」

「そう・・・ありがとう。引き続き調査よろしくね。」

「はっ！」

敬礼をして、バルーシはブルーパの部屋から立ち去った。

「・・・リーグ。」

ガチャ！

「おねえさま・・・。」

バルーシと入れ違いでロイーエが入ってきた。不安そうな顔を浮かべながら、ロイーエは静かに呟いた。

「おねえさま、最近忙しそうだよ？」

「うん・・・そうね。確かに最近眠れない・・・かな？」

リーグと会った日以来、ブルーパはシアンのことが気になりになっていた。それが実生活や表情にも現れていて、ロイーエに心配をかけていたのだ。

「おねえさま・・・大丈夫？」

「大丈夫よ！これくらいで弱ってたら王族なんて務まらないわよ。」
これ以上ロイーエを心配させないように、ブルーパは必死に笑顔

を作った。

「ローイエ！久しぶりに槍の稽古をつけてあげるわ！」

「・・・うん！」

ローイエは急いで自室に向かっていった。

「・・・シアンもローイエも・・・私が守らないと・・・。」

小さく決意をして、プルーパは自室にあった練習用の槍を持った。

「プルーパ様！！！」

勢いよく開かれたドア。その先にいたのは、慌てた様子のバルーシだった。

「バルーシ！？どうしたの！？」

「レーグが！レーグが王室に武装して侵入した模様です！」

「何ですって！？」

それを聞いた瞬間、プルーパは槍を投げ捨てて短剣に持ち替えた。
「見張りの兵は貴方のはずよ！？なぜ突破されたの！？」

「ついさつき、シアン様から異動を言い渡されて見張りをする場所が変わったのです！」

すぐさまプルーパは部屋を飛び出す。その後ろからバルーシもついていく。

「あ！おねえさま！」

後ろから、槍を持ったローイエが声をかけてきた。

「ローイエ！槍の稽古は中止よ！部屋に隠れてて！」

しかし、ローイエは後ろから走ってついてきていた。

「おねえさま！わたしにないしょにしていることがあるんでしょ！？」

「ローイエ！危険だからついてこないの！」

「いや！」

ローイエは強く叫んで走り続けた。

「皆・・・気絶してるわ。」

王室前にいた衛兵は全員気絶していた。

「外傷はありません・・・魔法によるものでしょうか？」

「おねえさま・・・なにがおこってるの？」

静まる空気の中、ブルーパはゆっくりと王室への扉に手をかけた。

「シアンが心配だわ・・・行くわよ！」

一拍置いて、ブルーパは王室の扉を開けた。

「シアン！」

「シアン様！」

「シアンおねえさま！」

王室にいたのは、シアンとレーグだった。

「レーグ！あなた・・・シアンに何をしたの！？」

レーグは杖を構えていた。そしてその先にいたのは、玉座に座り、糸の切れた人形のように動かないシアンがいた。

「何を？ヒヒヒヒヒ！私は何一つ手を出していませんよ？言ったではありませんか。私はただ言葉をかけるだけ・・・ヒヒヒヒヒ！」

含み笑いを続けながら、レーグは杖を下ろして王室を去っていくとした。

「待て！」

ブルーシがすぐさま飛びかかったが、ブルーシが捕らえたレーグはすぐさまその場から消えてしまった。

「くっ・・・映像投影魔法か・・・！」

ブルーシは地面に拳を叩きつけた。

「シアン！シアン！」

「シアンおねえさま！おねえさま！」

二人は、玉座にだらんと座っているシアンに向かって叫んだ。しかし、シアンは一向に返事をせず、虚ろになっている目に二人の姿は映っていないかった。

「シアン！私よ！ブルーパよ！」

「おねえさま！ロ－イエだよ！」

必死に揺さぶって声をかけるが、シアンは一切動かない。

「……。」

ふと、シアンが何かを呟いていることに気づいた。

「たし……わたし……。」

「シアン!？」

シアンはただ呟き続けていた。

「私は……何のために……。」

「どうしたの!？おねえさま!」

「私は何のために……私は……何者……なんだ……。」

「シアン……?」

次第に、シアンの目から涙が浮かんでいた。涙を浮かべながら、シアンはずっと呟き続けていた。

「私は……何者なんだ……私は……一体……!」

「あなたはシアンよ!バスナダ国を治めてる国王!シアン・ラーカよ!」

「つよくてやさしいわたしのおねえさまだよ!たったひとりのわたしのシアンおねえさまだよ!」

二人の叫びはシアンには届かず、ただ王室に響くだけだった。

理由

「……。」

「……今のが五年前の話……私がまだ五歳の頃の話……。」

シロヤはただ黙ってその話を聞いていた。

「その後はね……あの事件の後に大臣になった人がお姉様の代わりに国事を行ったの……。」

「大臣……まさか……。」

ローイエはゆっくりと頷いた。

「うん……リーグだよ。」

シアンが自らを見失ったあの日、城の中は大騒ぎとなった。国事を行っていたシアンが沈黙したことで、城の中で大半を占めていたシアン派の人間は空中分解してしまった。

その穴を埋めるかのごとく割り込んできたのは、砂の竜王時代を再興させようと企むリーグ派の集団だった。

「シアンお姉様に代わってって言ったけど……リーグの意向でその事は国の皆には公表しなかったの……。」

「じゃあ……シアン様が沈黙したことを国民は知らない……。」

ローイエは溢れてくる涙を抑えることが出来ず、さらに涙を流していた。

「リーグの国事は……砂の竜王時代と全く同じ独裁政治みたいなもの……当然国の皆は暴動を起こしかけたの。」

シアンが王に即位した時は、砂の竜王時代を完全に消し去る政治を心がけられていた。しかし、急に独裁政治に変わったため、国民は混乱してしまったのだ。

ローイエはそれを思い出して、さらに涙を流した。

「でもね……国の皆の攻撃先はね……。」

そこまで言って、ローイエは嗚咽を漏らし始めた。そしてシロヤ

は、その先に何を言おうとしたのかがわかってしまった。

「まさか……。」

「うん……全部お姉様に向けられたの……。」

重くなる空気。シロヤは其中で、何個もの疑問が頭をよぎった。

「何でシアン様が……？」

ローイエは嗚咽を漏らしながら、ゆつくりと話し始めた。

「さっきの話、公表しなかった理由はね……リーグは……」独裁政治をシアンが行ってる”って……国の皆に錯覚させるためだったの……。」

公表しなかったことで、国民はシアンはいつも通り国事を行っていると錯覚している。それはつまり、独裁政治はシアンの意思によつての決定だと思わせるものだった。

「つまり……リーグはシアン様を盾にやりたい放題にやっただけのことか……。」

「それでお姉様……国の皆も信用できなくなっちゃったの……もう誰も……信用できなくなっちゃったの……。」

小さく震えながら嗚咽を漏らすローイエ。

「私達も頑張ってたね……何とか国の皆にはわかってもらったの……ブルーパお姉様が第二女王、私が第三女王になったことだね……。」

この国では、正女王が機能しない場合、第二女王が国事を行わなければならない。それを利用して、ブルーパとローイエは独裁政治を解いた。

「でもね……シアンお姉様……急に国交活動に自分から行くようになったの……護衛無しでね……。」

女王が他国に赴く際、暗殺等を警戒して護衛をつけるのは当然の話だということはわかってるシロヤは、当然疑問に思う。

「何で護衛を……？」

「多分ね……死に場所を探してたんだと思う。生きる価値を……お姉様は多分見失ったんだと思うから……。」

自分が何者なのか。それがわからないということは、自分が生きているということ自体がわからなくなることでもある。

「お姉様はずっと探してたんだと思う・・・でも・・・やっぱり死ぬのが怖かったんだよ・・・不安だったんだよ・・・。」

必死に涙をこらえて、ローイエはシロヤを一心に見つめた。

「そんなお姉様の心を救ったのが！シロヤお兄様なんだよ！」

ローイエは必死に笑顔を作った。

「誰も助けに来てくれないと思ってたお姉様を・・・お兄様が助けたんだよ！」

人を信用できなくなったシアンは、身を挺してまで自分を守ってくれたシロヤのことを理解できなかった。

しかしそれは、シアンの救いとなった。まだ自分を守ってくれる人がいる、守ってくれた人がここにいるという事実が、シアンの何よりの救いだった。

「それがね・・・シアンお姉様がお兄様のことを愛してるって思う理由だよ。シアンお姉様の心を救ってくれたお兄様だもん・・・好きになって当然だよ。」

ローイエは笑顔をシロヤに向けた。対してシロヤは、瞳に涙を溜めていた。

「もしかして俺・・・シアン様を傷つけてしまったのか・・・。」
崩れ落ちるように前のめりになるシロヤを、ローイエは優しく抱き締めた。

「うつん・・・お兄様はお姉様のために嘘をついたんだよね・・・お姉様もわかってるはずだよ・・・！」

胸で泣き続けるシロヤの頭を、ローイエは優しく撫でた。

「お兄様・・・。」

「うつ・・・。」

泣き続けるシロヤ。撫で続けるローイエ。

やがて、シロヤはゆっくりと立ち上がった。

「・・・。」

決心したシロヤは、胸に秘めた思いを初めて口にした。

「俺・・・シアン様に謝りたい！」

その言葉と決心に、嘘偽りはなかった。

責任

シロヤの言葉を聞いて、ローイエは満面の笑みを浮かべた。まるで、言ってほしかったことを言われたかのように。

「うん！」

ローイエはそのままシロヤに飛び付いた。

「うわぁ！」

急に飛び付かれ、シロヤはそのまま後ろに倒れた。しかし、ローイエは嬉しそうにシロヤの胸に頬を擦り付けていた。

「シロヤお兄様！また四人と一緒に食事しようね！」

淀みの全くない笑顔を浮かべるローイエ。それに答えるように、シロヤはぎゅっとローイエを抱いた。

「わかりました、ローイエ様。」

それを聞いたローイエは、ムツと怪訝そうな表情に変わった。

「もうお兄様！様ってつけないでよ〜！」

怪訝そうな表情のままシロヤを見上げるローイエ。シロヤは少し恥ずかしそうにしながら、ゆっくりと口を開いた。

「じゃあ・・・えっと・・・ローイエさ・・・ちゃん？」

「〜」

瞬時に嬉しそうな表情に変わった。

「お兄様、お姉様がまだ目を覚ましてないの。」

「シアン様・・・。」

二人は今、シアンの部屋の前にいた。

「シアン様！俺です！シロヤです！」

部屋の前で叫ぶようにシアンを呼ぶが、返事はおろか、部屋の中から物音一つ聞こえてこなかった。

「・・・シアン様・・・。」

「お姉様！シロヤお兄様だよ！」

ローイエも同じように叫ぶが、やはり結果は同じだった。
しばらく無言になる二人。

その時、背後から二人に声かけられた。

「ローイエ様！・・・！？」

二人が振り向くと、立っていたのは食事を乗せたトレイを持った
リーグンだった。

リーグンはシロヤを見て、トレイを持つ手を小さく震えさせてい
た。トレイの上のスープが小さく波を立てている。

「シ・・・シロヤ様・・・！目を覚まされたのですか・・・？」

まだ信じられないといった感じのリーグンに、シロヤは小さく会
釈をした。

「ご迷惑をお掛けしました・・・リーグン様。」

それを聞き終えない内に、リーグンはシロヤに駆け寄った。

「シロヤ様！本当に・・・本当によかった・・・！」

さっきまでのシロヤのように、リーグンの目からも涙が溢れてい
た。

「シロヤ様・・・本当にありがとうございます・・・！」

リーグンは涙声になりながら、シロヤに向かって口を開いた。

「ありがとう・・・って、お礼を言うのはこっちですよ！」

「いえ・・・シロヤ様が自分を失ってしまったのは私達の責任です・
・例えシロヤ様があのまま目を覚まされなくても、私達は生涯シ
ロヤ様に尽くそうと決意してました。」

その言葉に、ローイエは深くうなずいた。シロヤのために生涯を
尽くそうとしていたのは、リーグンだけではなかった。ローイエだ
けではなく、ブルーパやバルーシ、レジオンやランブウも同じだっ
た。

「シロヤ様が目覚めていただいたおかげで、私達は償いのチャンス
を得ることができました。本当に・・・ありがとうございます！」

深々と頭を下げるリーグンの頭を、シロヤは慌てた様子で上げさ
せた。

「償いなんていりません！看病してくれただけでも俺はそれ以上の感謝をしていますから！」

それを聞いたリーグンは、流れていた涙を軽く袖で拭いて、ゆっくりと顔を上げた。その顔は、涙をこらえながら笑っていた。

「いえ・・・私達はシロヤ様が目覚められてからが本番です。そして・・・後はシアン様のお目覚めを待つだけです。」

三人は同時にシアンの部屋を向いた。全く開く様子のない扉。その奥から、物音は一切聞こえてこない。

「・・・この状態のまま・・・もう二日が経ってしまってます・・・」

リーグンが呟くのを聞いて、シロヤは扉に数回手を触れた。

「・・・体当たりすれば・・・開くかもしれません・・・」

シロヤは扉からゆっくりと離れて、軽く伸びをして構えた。

「待て、シロヤ。」

構えたシロヤに急にかけられた声。向くと、立っていたのはレジオンだった。

「レジオンさん！」

「よ、ちゃんと目を覚ますって信じてたぜ。」

レジオンはゆっくりと扉に近づいて、コンコンと扉を叩いた。強行突破するには一人じゃ荷が重いぜ。この扉はな。」

そう言って、レジオンはシロヤの背中を叩いた。

「ま、ここは俺とリーグンに任せてくれや。」

「でも・・・」

シロヤが口を開こうとした瞬間、レジオンはすぐさまそれを遮った。

「お前に会いたって奴が・・・城門前にいるらしいんだ。会ってきな。」

レジオンは再びシロヤの背中を強く叩いた。

「俺に・・・会いたい人？」

「細かいことは会ってから聞きな。」

シロヤはレジオンに言われ、城門に向かっていった。

「お兄様、私も行きます。」

その後ろを、ローイエが小走りについていった。

「レジオンさん、シロヤ様に会いたい人って・・・。」

「俺もビックリしたんだが・・・まあ、今のシロヤに一番ピッタリな奴だ。」

レジオンは軽く伸びをしてから、扉に向かって体当たり準備をした。

石板

.....

暗闇の世界。しかし、これはただ単に自分の瞼を見ているだけだった。ゆっくりと瞼を開けると、眩しいくらいの光が目に入ってきた。思わず目を閉じると同時に、視覚以外の気管が活動を始めた。

真っ先に聞こえてきたのは、強く水が落ちる音だった。ゆっくりと目を開けると、その音源が飛び込んできた。

目の前に広がっていたのは、大きな滝だった。太陽の光を弾く滝は、絶えず大きな音を響かせながら流れ落ちていた。

次に回復してきたのは、触覚だった。触覚がとらえたのは、自分の体に絡み付いている何かだった。その何かをよく見てみると、それは近くの木から伸びている枝や蔦だった。

ゆっくりと体を動かそうとするが、枝や蔦が絡み付いていて思うように動けない。

「・・・目が覚めたかしら？」

もがいていると、誰かから声をかけられた。首を動かして声の方を見てみると、頭に大きな花を乗せた緑肌の少女が立っていた。

「待つて、今降ろすから。」

枝と蔦が解かれていき、体がゆっくりと地面についた。

軽く動いてみるが、怪我はしていないようだ。それを確認した少女は、前に回ってきて笑った。

「全く・・・あなたが崖から落ちてきたのを見た時はビックリしたわよ。」

少女——フカミは上を向いた。それに合わせて、絡めとられていたクロトも上を向いた。

「.....」

滝は非常に高く、真上を向かなければ全部を見渡せないくらいだ

った。

フカミとクロトは再び向かい合った。

「それで？あなたはなんで落ちてきたの？その時のことを思い出して。」

フカミはゆつくりとクロトの体に触れて、クロトの中の記憶の声を聞いた。フカミは、クロトが崖から落ちた時の様子を全て納得し、ゆつくりと離れた。

「ふうん・・・シロヤ君を助けて落ちたのね・・・。」

シロヤ、という言葉聞いた瞬間、クロトは駆け出そうとした。

しかし、急に現れた少女によって阻まれた。

「クロトさん、まだ安静にしてくださいください。外傷は見えないけどちゃんとあるんですから。」

少女は、フカミと同じように頭に大きな花を乗せていたが、フカミに比べて肌の緑色が淡かった。

少女はクロトに近づいて手をかざした。少女の手が淡く光ると、クロトの体が何となく楽になったような気がした。どうやら、一種の治癒魔法みたいなものらしい。

「でもそろそろ動けるんじゃないかしら？キリミド。」

「うん、明日には動けると思う。」

しばらく治癒魔法をかけて、少女——キリミドはゆつくりと魔法を解除した。

「とりあえず今日はゆつくり休むといいわ。」

そう言って、フカミとキリミドはクロトを滝の下の森に案内した。

「ここが私達の住み処よ。」

案内された場所は、草が敷き詰められた広い空間だった。木によって周りが壁のように囲まれている、まさに”自然の家”だ。

「ちよつと暗いわね・・・それ！」

フカミが真ん中にあつた花に手をかざすと、花が発光して空間を優しく照らした。

クロトは、初めて見るような自然の空間にキヨロキヨロと周りを見渡していた。

「そんな物珍しい目で見るものじゃないと思うけど……。」

「クロトさんにとっては珍しいんだよ。」

フカミとキリミドが何かを用意し始めた。

それを背にして周りを見渡していると、クロトは壁の向こうの隙間に石のような物を見つけた。見てみようと目を凝らしたり、隙間を覗いたりしてみるが、石のような物が何なのかわからなかった。

「ん？石板が見たいの？はい。」

後ろのフカミが指パッチンをすると、壁が動き出して石のような物が姿を表した。

石のような物の正体は石板だった。何か絵の様なものが刻まれていたが、そこに書かれている文字までは読むことができなかった。

「それはですね、バスナダの古い歴史についての壁画みたいです。」

石板を眺めていたクロトの横に、キリミドが座り込んだ。キリミドは、石板の中の一つの絵を指差した。

「あの白い鎧をまとして、黒い竜に乗った戦士の絵がありますよね。」

キリミドが指差したのは、白の鎧の戦士と黒の竜の絵だった。そしてその反対側には、戦士に立ちふさがるように空を覆う黒く巨大な何かがあった。その何かの下には、たくさんの黒い何かが戦士に立ちふさがっていた。

「空を取り込まんばかりの巨大な闇がこの地を覆う時……人が持つ何者にも負けぬ強い力が集まり……闇に打ち勝つ英雄、この地に現れる……。」

キリミドは、昔話を語るようにゆっくりと語り出した。

「この地に伝わる古くからの言い伝えです。本当かどうかはわかりませんが……。」

クロトはしばらく石板を見つめていた。そして、クロトはキリミドに訊ねた。あの戦士の上の文字は何という意味なのか。

「あれはですね・・・”白の勇者”・・・って意味らしいですよ。」
キリミドはゆっくりと語り終えて、空間の真ん中に戻っていった。

襲撃

「さあ、行きましょうか。」

次の日、クロトはフカミとキリミドと共に自然の家を出発した。

「このまま進めば滝の上に出るわよ。」

フカミとキリミドに連れられながら、クロトは昨日見た石板のことを考えていた。

何故か、クロトの頭から石板のことが離れることはなかった。

「・・・そんなに石板のことが気になるの？」

気づいたフカミがクロトに言った。クロトはそう言われ、ゆっくりと頷いた。

「あの石板・・・実は私達が持ってきた物なのよ。」

フカミは昔を思い出すように語りだした。

「昔ね、森にあの石板の欠片が落ちてたの。それを全部回収して繋ぎ合わせたらあの石板が出来たって訳よ。」

「石板の内容は私が集めたんですよ。」

二人が石板の話をし終えた頃、クロト達は森に建てられた教会の前にやって来た。この教会は、シロヤとブルーパがリーグを追ってやって来た場所だった。

「さあ！ここまで来たらもうすぐよ！」

「早くシロヤさんに会いに行きましょう！クロトさん！」

クロトは大きく鳴いて、早く会いたいと思い走り出そうとした。

「・・・・・・待って！」

走り出そうとしていたクロトを制したのはフカミだった。フカミは森に感じる”何か”を捕らえ、クロトとキリミドを守るように前に出た。

「お姉ちゃん・・・？」

フカミのただ事ではない雰囲気を感じとり、キリミドは心配そうに聞いた。

しかし、フカミは答えずにじっと視線の先の森を見ていた。

「・・・。」

動かずに森を見続けるフカミ。

そして、フカミは森に向かって叫んだ。

「出てきなさい！」

フカミが叫んだ瞬間、森から草木をなぎ倒すような強く大きな音が聞こえてきた。その音は次第に大きくなっていき、やがてそれは姿を現した。

「！！！！」

それが姿を現した瞬間、フカミは戦闘体制に切り替えて、足元に草の壁を作り出した。

「汚染植物！？」

現れたのは動く木だった。木はフカミ達を捕らえた瞬間、枝を伸ばしてフカミ達に襲いかかってきた。

「くう！」

草の壁が枝の攻撃を防いだが、その衝撃はフカミにダメージを与えた。

「お姉ちゃん！」

キリミドが駆け寄って治癒魔法をフカミにかけるが、どんどんと強くなっていく木の攻撃に、次第にフカミは体力を消耗していった。

「キリミド・・・離れてなさい。」

「お姉ちゃん・・・？」

フカミは枝を伸ばし、クロトとキリミドを自分から離れさせた。

それと同時に、草の壁が枝によって破壊された。素早く枝がフカミに向かって伸びていく。

「枯れなさい！」

向かってきた枝に向かって、フカミは淡く光った手のひらを向けた。

「お姉ちゃん！！！」

「えっ？」

光は確かに枝に届いたが、枝は枯れる様子を見せずにフカミに向かって伸びてきた。

急いで枝を避けようとするが、アクションを起こす前に、枝はフカミの目の前まで迫っていた。

「お姉ちゃん！！！」

キリミドが枝を伸ばしてフカミを助けようとした瞬間、横を風が吹き抜けた。

「！！！！」

枝はそのまま地面に突き刺さったが、フカミの体を捕らえていなかった。

「・・・クロト？」

気づいた時、フカミはクロトの前にいた。クロトは全力で地面を蹴り、フカミをギリギリで助けることに成功したのだ。

「クロトさん！お姉ちゃん！」

駆け寄って治癒魔法をかけるフカミ。

クロトはフカミとキリミドを背中に乗せると、さらに伸びてきた枝を避けるために走り出した。

走り続けるクロトの背に乗ったフカミは、キリミドに向かって深刻な顔を浮かぶた。

「・・・キリミド。」

「どうしたの？お姉ちゃん。」

治癒魔法をやめ、キリミドはフカミの言葉を聞いた。

「あれ・・・植物じゃないわ。」

「えっ？だって枝も葉もあるよ？」

「あれは全くの別物よ。枯れなかったからもしかしてと思ったんだけどね・・・。」

さらに激しくなる攻撃。クロトは次第にスピードを落としかけていた。

「お姉ちゃん！クロトさんが！」

「クロト！今から言うことをよく聞いて！」

フカミは真剣な表情でクロトを見ながら、はっきりとした口調で話始めた。

「このまま走ってあいつの気を引いて。一分だけでいいわ。一分あれば準備できるわ。」

「まさか・・・あれをやるの！？」

キリミドは驚いたように声を上げた。対してフカミは氷のように冷静でいて、表情は決意を秘めていた。

「これ以上・・・この森を荒らさせはしないわ！」

そう叫ぶと、フカミは高く飛び上がった。

「クロトさん！私が合図したらすぐに逃げてください！巻き添えを食らってしまいます！」

そう叫ぶと同時に、キリミドはクロトから飛び降りてすぐさま詠唱を始めた。

帰還

クロトはフカミとキリミドの言葉を信じて、さらに走り続けた。走ることをやめれば、クロトは間違いなく命を落としてしまう。

しかし、クロトはここで命を落とすわけにはいかないと、さらに走るスピードを速めた。限界を越えてもなお、シロヤに会うためにクロトは走り続けた。

「・・・・・・・・・・。」

詠唱を続けるキリミド。まだ降りてこないフカミ。走り続けたクロト。

最初にアクションを起こしたのは・・・。

「・・・・・・・・クロトさん！避けてください！」

キリミドの叫びを聞き、クロトは道を外れてその場所から離れた。その瞬間、キリミドの後ろから巨大な草が現れた。草は木に向かって伸びていくと、枝に絡まって木の動きを止めた。

「お姉ちゃん！」

キリミドが叫ぶと、木、クロト、キリミドが急にたくさんの影に覆われた。

上空を見上げると、たくさんの大きな木の幹が、動きを止められている木に向かって勢いよく落ちてきていた。

「碎けなさい！」

さらに勢いを増す木の幹を、フカミは空中で操っていた。

木はフカミの攻撃によってどんどんと傷ついていき、やがて木の幹に貫かれて沈黙した。

たくさんの幹が突き刺さった木に、もはや枝を動かす力はなかった。

「ハア・・・ハア・・・。」

ゆっくりと地上に戻ってきたフカミはもちろん、駆け寄ってきたクロトとキリミドも荒く呼吸をしていた。

「できることなら・・・使いたくなかったんだけどね・・・奥の手は・・・。」

フカミとキリミドは同時に頷いた。

キリミドが敵の動きを止めて、それに向かってフカミが木の幹を降らせる。単純そうに聞こえるが、フカミとキリミドにとってはエネルギーの消費量が激しく、まさに奥の手だったのだ。

動けなくなっている二人を背中に乗せ、クロトはゆっくりと砂漠に向かって歩きだした。

「ごめんなさい・・・クロトさん・・・迷惑をかけてしまつて・・・。」

背中では泣きそうになっているキリミドを励ますように、クロトは大きく鳴いた。

やがて太陽の光と砂が現れて、気がつけばクロト達は未開拓地帯の森を抜けていた。

「久しぶりね・・・外に出るのは・・・。」

「早くシロヤさんに会いに行きましょう。」

二人は急かすが、クロトはゆっくり、背中の二人に負担を与えないように歩いた。これが、クロトなりの二人への配慮だった。

「クロトさん・・・。」

「飼い主に似るって・・・本当みたいね・・・。」

二人はクロトの背中では笑いあった。

しばらく歩くと砂丘があり、その砂丘を越えれば街、街を越えれば城に着く。

クロト達が砂丘を越えた辺りで、初めて人の姿を捕らえた。

人はクロトの姿を確認した途端、驚いたような表情を浮かべて走

り寄ってきた。

「クロト・・・！本物なのか・・・！？」

信じられないといった表情を浮かべている人に向かって、背中
のフカミが話しかけた。

「もちろん本物。滝の上から落ちてきた本物のクロトよ。」

「怪我は元々あった足の傷も含めて治っていますのでご安心くだ
さい。」

そして、”自分はもう大丈夫！”と言わんばかりに足を上げたク
ロトに向かって、その人——レジオンは涙を浮かべて笑った。

「よかった・・・本当によかった・・・。」

肩を震わせながら、レジオンは再開を喜ぶクロト達に抱きついた。
「ありがとう・・・本当にありがとう・・・！」

「ちよっと！痛いわよ！」

「レジオンさん・・・！強いです・・・！」

レジオンは涙を袖で拭き、現状をクロト達に話した。

クロトが死んだと思い込み、自分を失ってしまったシロヤ。同じ
く自分を失ってしまったシアン。片腕を切り落としたバルーシ。全
身傷だらけで眠るブルーパ等、レジオンが知っている範囲の全てを
話した。

「最近国がおかしいと思ってたのは・・・。」

「シロヤさんとシアンさんが原因だったんですね・・・。」

クロトは寂しそうに鳴いた。

それを見て、レジオンは切り替えるように言葉を続けた。

「今からでも遅くねえ。クロト、シロヤに会いに行くぞ。」

大きく頷き、クロトは城に向かって走るレジオンについていった。
「シロヤのことだ。今頃目を覚ましてるかもしれないが、やっぱり
お前が無事だつてことを教えなきゃ締まらないだろう。」

やがて、クロト達は城にたどり着いた。

久しぶりに思える城の前に来て、クロトはそこで立ち止まった。

「待つてろ。今すぐシロヤを連れてくるぜ。」

走って城の中に入っていくレジオン。

それを見つめながら、フカミが口を開いた。

「・・・ここに来たの・・・何年ぶりかしら・・・。」

「お姉ちゃん・・・来たことあるの？」

キリミドが聞くと、フカミは表情をしかめながら頷いた。まるで、思い出したくないと言っているような表情を浮かべている。

「さっきのあれといい・・・一体何が起きているのかしら・・・。」

呟いた瞬間、城の扉が開かれた。

彷徨

「俺に会いたい人って・・・誰なんだろう・・・。」

城門までの長い廊下を、シロヤとローイエは並んで歩いていた。

「お兄様・・・気を付けようね。」

心配そうにローイエが呟いた時、二人は城門前に到着した。

そして、シロヤが城門に手をかけた時、城門の向こうから鳴き声が聞こえた。

「・・・！」

その鳴き声を聞いた瞬間、シロヤは動きを止めた。まるでシロヤだけ時間が止まったように。

その鳴き声は、シロヤが小さい頃から聞いていた鳴き声。そしてシロヤの心を晴らす鳴き声でもあった。

いてもたってもいられず、シロヤは城門を開いて叫んだ。

「クロト！！！！」

城門の先に立っていたのは、紛れもなく、滝でシロヤを助けて落ちたクロトだった。

「クロト！！！！」

シロヤは駆け出してクロトに抱きついた。クロトも嬉しそうに頬をすり寄せている。

「クロト・・・！クロト・・・！！！！」

クロトを抱きながら、シロヤは涙をどんどんと溢れさせていく。

それを見ていたローイエ、そしてフカミとキリミドも涙を流していた。

「お兄様・・・！」

「クロトさん・・・シロヤさん・・・会えて・・・よかったです・・・！」

「・・・。」

しばらく四人と一頭は、再会を喜ぶ涙を流し続けた。

「フカミさん、キリミドさん、本当にありがとうございます！」

フカミとキリミドに全力で頭を下げるシロヤ。

「再会できて本当によかったです！シロヤさん！」

「もう離れ離れにならないようにしなさいよ？」

フカミは照れ隠しをするかのようにそっぽを向き、キリミドは涙を流しながら笑った。

「えへへ！お兄様！」

いつの間にか、ローイエが満面の笑顔でシロヤに抱きついた。

「お兄様もクロト様も帰ってきたから？」

「そうですね！後は・・・シアン様だけですネ！」

ローイエの笑顔に答えるように、シロヤも満面の笑みで返した。
その時・・・。

「シロヤ様！ローイエ様！」

城の方から、叫び声と廊下を走る音が聞こえた。

後ろを振り向くと、リーグンが立っていた。

その表情は険しく、ひどく焦っていた。

ただ事ではないことを感じ取ったシロヤの顔が自然と締まる。

「どうしたんですか！？リーグン様！」

「早く来てください！シアン様が・・・シアン様が・・・！」

それを聞いた瞬間、シロヤは地面を蹴って全速力でシアンの部屋に走っていった。

「お兄様！」

「シロヤ様！」

ローイエ、リーグン、そしてクロト、フカミ、キリミドも、シロヤを追って城に走っていった。

「シアン様！」

シロヤがシアンの部屋に着くと、シアンの部屋にいたのはレジオンだけだった。そしてそのレジオンの表情は、リーグンと同じく陰しく焦っていた。

「シロヤ……。」

レジオンがシロヤに声をかけた瞬間、シロヤは部屋に入ってシアンのベッドを見た。

「……シアン……様……?」

ベッドに横たわるシアン。その目は閉じられていて生氣を感じ取ることが出来ない。全く動かないそれは、さながら死体のようだった。

膝から崩れ落ちるシロヤに、レジオンは言葉を続けた。

「大丈夫だ……シアンはまだ生きている……ただ……。」

「そこからは僕が説明します。」

いつの間にか、リーグン達はシアンの部屋の前に立っていた。リーグンはゆっくりとシアンに近づいた。

「リーグン様……シアン様は一体……。」

「大丈夫です。シアン様は眠っているだけです。」

しかし、リーグンは表情をさらに暗くした。

「ただ……今のシアン様は心を無くしている状態にあるんです。」

リーグンはさらに続けた。

「シアン様は強い現実逃避のため、心の奥深くに逃げ込んでしまったのです。普通の人ならば早くすれば戻ってこれるのですが……。」

そこでリーグンは言葉をつまらせた。

「……普通の人ならって……ということですか?」

「……シアン様は今……心の中をさ迷っている状態にあるんです。万が一……このままさ迷い続けてしまえば……シアン様が目覚めることは……。」

リーグンは再び言葉をつまらせた。

シロヤはすぐさまシアンに駆け寄り、シアンに向かって全力で叫

んだ。

「シアン様！！俺です！！シロヤです！！」

涙を流しながら、シロヤはシアンに向かって何度も叫んだ。

「シアン様！！目を覚ましてください！！」

何度も何度もシロヤは叫んだ。しかし、シアンは一向に目を覚ま
す気配はなく、無機物のようにシロヤの腕の中で佇んでいた。

「シアン様！！シアン様！シアン様・・・！」

次第に声に力が無くなっていき、いつの間にか声は嗚咽に変わり
始めていた。

「うう・・・シアン・・・様・・・！」

力無く泣き続けるシロヤ。

そのシロヤに一番最初に声をかけたのは、リーゲンだった。

「・・・シロヤ様。」

さっきのような暗い口調ではなく、はっきりとした口調に変わっ
ていた。

「方法は・・・あります。」

理由

「方法・・・？」

突然の発言に、その場の視線が全てリーグンに集まった。

「しかし・・・これには未知数の危険が伴う可能性があります・・・」

そこでリーグンは言葉を止めた。リーグンにとっても言いづらいことであるため、表情をどんと険しくしていく。

「・・・どんな方法なんですか？」

一番最初に聞いたのはシロヤだった。リーグンはしばらく黙った後、決心したかのように口を開いた。

「・・・シアン様は心の中をさ迷っている状態にあります。ならば戻す方法の一つ。さ迷っているシアン様を見つけることです。私の魔法を使えば、シアン様の心の中に一人だけならば送ることができます。」

「じゃあ！」

「・・・しかし・・・。」

シアンを救える方法を聞いて、シロヤは笑顔を見せた。

対してリーグンはさらに表情を険しくした。シロヤにとっては希望だが、リーグンは非常に危険な賭けであることを理解していたため、希望とは呼べずにいた。

「シアン様の精神状態は非常に不安定です・・・心の中がどうなっているのかわかりません。」

安定している心を持つ人は、人に危害を加えることはない。それは心でも同じことである。

しかし、不安定な心と言うのは危険であり、場合によっては人を殺しかねない。それは心の中でも同じことである。リーグンの心配はそこにあつたのだ。

「非常に危険です・・・何が起こるか想像がつきま」

「俺が行きます！」

リーグンの言葉を途中で遮るシロヤ。その場の全員がシロヤの方を向いた。

「シロヤ様、お気持ちはわかります。しかし……何が起こるかわからない故に」

「だからといって何もしないわけにはいきません！」

シロヤは立ち上がって拳を強く握り、強い決心を顔に浮かべていた。

「このままではシアン様は目覚めないのなら、例え危険でも賭けにのります。」

視線を一切リーグンからそらさず、シロヤは本気の言葉を口にしていた。その心に嘘偽りがないのはリーグンがよく知っていた。

「……お兄様。」

突如、ローイエが口を開いた。

「お兄様……自分が嘘ついたせいだからお姉様を助けに行くの？」

「……確かにそれもあります。」

シロヤのその言葉には、シアンに対する罪滅ぼしの意味も込められていた。

しかし、シアンを助ける理由はそれだけではなかった。もちろんそれは、罪滅ぼしよりももっと単純且つ明確な理由だ。

シロヤはその想いを初めて口にした。

「でもそれだけではありません……シアン様のことが……好きだからです。」

少し頬を赤らめ、シロヤは初めて口にした。

バスナダに来てから、シアンと出会った時からシロヤが抱いていた想い。

シロヤがシアンを助けに行く一番の理由であり、シロヤを動かす一番の原動力でもあった。

「……！」

ローイエは最高の笑顔を浮かべた。それはローイエが一番聞きた

かった言葉であり、シロヤが一番言すべき言葉でもあった。

「うん！」

笑顔のままローイエは頷いた。それに続き、周りにいた人達も言葉が続ける。

「ようやく白状しやがったな！シロヤ！」

レジオンはシロヤに近づき、笑いながら軽く肘をシロヤの胸に当たえた。

「その気持ち、シロヤさんらしいですよ！」

「眠りについたお姫様の目を覚まさせるのは王子様の役目よ。」

キリミドとフカミも笑顔でシロヤを激励した。

「・・・。」

笑顔のまま、シロヤはクロトの方を見た。クロトは小さく鳴いて頷いた。それは、「いってらっしゃい」とクロトが言っているように思えた。

「うん・・・クロト、行ってきます。」

シロヤは軽く伸びをしてリーグンの方を向き直り、目で合図を送る。

「待てシロヤ！」

急に声をかけたのはレジオンだった。レジオンは、シロヤに向かって剣を放り投げた。シロヤは剣をキャッチして見てみると、それは自分の剣だった。

「レジオンさん・・・ありがとうございます！」

レジオンに頭を下げ、シロヤは再びリーグンに合図を送った。

合図を受けたリーグンは、杖を取り出して詠唱を始めた。

「お兄様。」

詠唱を待つシロヤに、ローイエは声をかけた。

笑顔のまま、ローイエは自分が言いたかった言葉をシロヤにぶつけた。

「お兄様！私も・・・私もお兄様が大好きです！」

「ローイエ様・・・。」

「帰ってきたら私とお姉様達と一緒にのお布団で寝ようね！」

「・・・はい！」

ローイエの告白に、シロヤは笑顔で答えた。

「えへへ！」

少し頬を赤くしたローイエは、照れを隠すように笑った。

「シロヤ様！準備が整いました！」

リーグンの言葉に、シロヤは剣を強く握りしめ、表情を引き締めた。

「シアン様・・・待っていてください！」

シロヤは眠っているシアンに言葉をかけた。

その瞬間、シロヤの体を光が包み込み、やがて光は柱に形を変えた。柱が強い光を放つと、柱はシロヤを離れてシアンに向かって降り注いだ。

光が止んだ時、シロヤはそのまま前のめりに倒れた。

少女

上下の感覚もなく、右も左も何も見えない暗闇。自分が今どこを歩いているのか、自分は何の上を歩いているのか。それすらもわからない暗闇を、シロヤは歩いていた。

「ここが・・・シアン様の心の中・・・？」

何もわからない不安定な暗闇が、今のシアンの心の中なのだろうか。

突如、シロヤの目の前が白く光始めた。

「これは・・・道・・・？」

突如現れた白い光の先に、小さな道があった。段々と強くなっていく道の光に向かって、シロヤはゆっくりと歩き出した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

白い光が止んだ時、シロヤは見知った場所に立っていた。

「ここは・・・シアン様の部屋だ。」

さっきまでいたシアンの部屋の隅に、シロヤは立っていた。

しかし、さっきまでいた部屋と今の部屋は違った。置いている物や本棚の配置が全く違うのだ。

「・・・！」

突如、閉まっているドアの向こうから少女の声が聞こえた。

「マズイ・・・！」

隠れようと周りを見渡し始めた瞬間、ドアが開けられた。

「シアンく、いいこいいこ！」

入ってきたのは、赤ちゃんを抱いた少女だった。

シロヤはその少女を見た瞬間、驚いたように叫んだ。

「ブルーパ様！？」

入ってきた少女はブルーパだったが、年齢が一回り以上違ってい

た。シロヤの腰ぐらいまでの身長しかないブルーパは、部屋の大きなベッドに抱いていた少女をゆっくりと寝かせた。

「はやくおおきくなつてっ！っしょにおどろうねっ！」

頭を撫でていると、赤ちゃんは次第に眠りについていった。それに合わせて、添い寝をしていたブルーパも寝息を立て始めた。

「・・・まさか・・・あの赤ちゃんって・・・。」

そうシロヤが呟いた瞬間、赤ちゃんとブルーパは煙のように消えてしまった。

「!？」

気づくと部屋にはシロヤしかいなかった。

何が起こったのかわからず、シロヤは周りをキョロキョロと見渡した。

「シアン・・・。」

「!」

背後から声が聞こえた。振り向くと、窓側に少女を抱いた女性が立っていた。

「シアン、見える？」

「みえるっ!」

少女は指を指しながら景色を見ていた。そんな少女を、女性はギョツと抱いて言葉を続けた。

「シアン、あなたは私の子供・・・強く生きてね・・・。」

「くもっ!」

空を指差しながらはしゃぐ少女を、女性は涙を流しながら頭を撫でた。

しばらく見ていると、女性はさつきと同様、煙のように消えてしまった。

「これって・・・もしかして・・・。」

そう呟いた時、ベッドの方から再び声が聞こえた。

「シアン、あなたももう三歳、武道を習う時期よ。」

「ぶど〜？」

女性は少女の頭を撫でて笑った。

「そうよ。ブルーパお姉ちゃんがいつもやってるの見てたでしょう？」

「おねえちゃんみたいにおどるの〜？」

「いいえ、あなたが習うのは弓矢って言うのよ。」

「ゆみや？」

女性は少女の手を握って、ゆつくりと部屋を出ていった。それに合わせて少女もゆつくりと歩き出して部屋を出た。

「・・・。」

シロヤは女性を追って部屋を出た。部屋を出た瞬間、城の廊下の向こうに、シアンらしき影が見えた。

「シアン様！」

影を追って走ると、たどり着いたのは玉座の前だった。そこには、部屋にいた女性と少女、そして玉座に男性が一人座っていた。

「おかあさま！わたしね！きょうね！まとのまんなかにあたったんだよ〜！」

「あら、すごいじゃない！よくやったわね、シアン。」

女性は少女の頭を撫でると、少女は笑顔のまま口を開いた。

「わたしね！もつとうまくなってね！おねえさまもおかあさまおとうさまもまもれるようになるね！」

「うん、期待してるわよ。シアン。」

少女を抱き包む女性。シロヤはそれをずっと見つめていた。

「国王様！」

突如、はつきりとした声が聞こえた。

入ってきたのは、鎧に身を包んだ兵士だった。その兵士も、シロヤは見覚えがあった。

「あれは・・・レジオンさん！」

ブルーパと同じく一回り以上年齢が違うレジオンは、玉座に座る男性、国王に向かって膝まずいた。

「街の方でまた、減税を訴えるデモが始まりました。」

それを聞いた国王は、ゆっくりと立ち上がった。

「鎮静に向かえ。兵団を使っても構わぬ。」

「はっ！」

レジオンはすぐさま走っていった。

その背中を見ながら、シアンを抱いていた女性が国王に話しかけた。

「やっぱり・・・本当のことを話した方がいいんじゃないかしら？」

「・・・そんなことすれば、国は混乱してしまう。」

国王は再びゆっくりと玉座に座る。女性は国王を見つめながら悲しい表情を浮かべていた。

「だけど・・・。」

「いいんだよ。国を守るためには誰かが悪役にならなければならない。その悪役が僕だってことでいいじゃないか。」

国王が女性に向かって笑うと、女性もそれに答えるように笑った。

そして再び、国王も女性も少女も消えてしまった。

過去

「ここってやつぱり……。」

この空間が何なのか、そして自分が見た映像。それが一体何なのか、シロヤはわかり始めていた。

「ということはやつぱりここは……旧バスナダ国家、砂の竜王時代のバスナダ……。」

話を聞いていると、度々登場するシアンは見るたびに成長している。つまりこれは、シアンの見た過去の映像。

しばらくすると、再びシアンが現れた。先程よりも成長しているということは、先程から一年以上経っているということになる。

「お母様！」

「シアン……。」

シアンが女性に話しかけると、女性はシアンを抱いて涙を流した。

「シアン……！あなたは私の子供よ……！絶対に……！」

「……うん！」

抱き合って泣くシアンと女性。

「あの女性って……シアン様の母親……？」

呟くと、再びシアンと女性は消えた。

そしてまた新たに現れたのは、また一つ成長したシアンと母親の女性、そして玉座に座る国王の姿だった。

「国王様！」

兵の一人が国王の前で膝まずいた。

「謁見を希望している旅芸人の者が来ております。」

「通せ。」

兵はすぐさま王室を出ていく。しばらくすると、奇抜な格好をした奇妙な人物が王室にやって来た。

「国王様！ご機嫌うるわしゅうございます。」

やけに甲高い声が部屋に響くと、旅芸人はすぐさま持っていた玉

を懷にしまった。

「他国からの者か。我がバスナダに何の用だ。」

「我が・・・ねえ。」

旅芸人は小さく呟くと、急に高笑いを始めた。不気味な笑い声が王室に響き渡る。

「まああれですよ・・・砂が呼んでいると言いましょつか。」

「何・・・？」

「私達の大將はあなたのやり方に不満があるようですよ。」

不気味な空気が王室を取り巻いている。旅芸人から発せられるその空気は、不快とは違う嫌な空気だった。

「何が言いたい・・・。」

「単刀直入に言うそうですね・・・。」

「死んでください。」

空気が揺れた。

旅芸人はすぐさま懷から玉を取り出して国王に向けて投げつける。その玉は空中で鋭利な刃物となって国王に放たれた。

国王もすぐさまその場を離れようとしたが、僅かに刃物の方が速かった。

「!!!!!!」

刹那、肉を刺し貫いたような嫌な音が響き渡る。

「・・・・!!」

その場にいた全員が固まった。目の前に起きた現実を、シロヤが、旅芸人が、シアンが、そして国王が見ていた。

「ああ・・・・!!」

情けない言葉を漏らす国王の目の前には、国王をかばって刃物の餌食となった女性の姿があった。

「い．．．いやああああああ！！！！！！」

悲鳴のようなシアンの叫びが響き渡る。

「ちっ！」

旅芸人はすぐさま身を翻して窓に向かって走り出した。そしてそのままガラスを突き破って城から出てしまった。

「イリーボア．．．！イリーボア！イリーボア！！！」

国王はすぐさま女性——イリーボアを抱いて叫び続ける。

「．．．あなた．．．。」

イリーボアは小さく国王を呼ぶと、その頬にそつと手を置いた。そして．．．。

「．．．．．．．．．．。」

優しく国王に口づけをすると、笑顔を浮かべながらゆっくりと目を閉じた。

「．．．イリーボア．．．イリーボアアアアア！」

泣き続けるシアンと共に、国王はイリーボアの体を抱きながら叫んだ。

「．．．。」

しばらくすると、その映像もシロヤの目の前から消え去って、新たな映像が現れた。

そこには、喪服を来たブルーパとシアン、そして赤ちゃんを抱いた国王の姿があった。

「あの赤ちゃん．．．ロイーエ様か。」

ロイーエが過去を話してくれた時に母親の話が出なかったのは、母親であるイリーボアがロイーエを産んだのは、旅芸人によって殺される一ヶ月だったからだ。

喪服を来たシアン達は消え、再び国王とシアン達が現れた。

「ついに始まるか……。」

国王はそう呟くと、近くにいた兵の方を向いた。

「レジオンを呼べ。予定通り、今から兵団長の受け継ぎを始める。」

「はっ！」

兵はすぐさま王室を出ていく。

しばらくしてから現れたのは、レジオンと金髪の男性だった。

「レジオンよ、お前は私が王位に就いた時から世話になっていたな。これからは戦術顧問として役に立ってもらいたい。」

「ありがたきお言葉！」

頭を下げるレジオン。次に国王は、そのレジオンの横にいる金髪の男性に話しかけた。

「そなたに新たな兵団長を務めてもらいたい。」

「はい！国王様のご期待に応えられるよう、粉骨碎身の覚悟で務めさせていただきます！」

敬礼をする男性に微笑みかけると、国王はさらに言葉を続けた。

「そなたの望みを一つ叶えよう。何でも申せ。」

そう言つと、男性は迷うことなく言つた。

「どうか、二人の私の弟を兵団に入団させていただきたいのです。」

幸福

金髪の男性の望みを聞き、国王は大きく頷いた。

「うむ、ではそなたの弟達を兵団に迎え入れよう。」

「ありがたき幸せ！」

頭を下げる男性に、国王はさらに言葉をかけた。

「ではそなたを兵団長としてここ任命しよう。」

微笑みながら、さらに言葉を続けた。

「頼りにしておるぞ。――。」

「ぐああ！」

シロヤは頭を押さえてうずくまった。

急に訪れた激しい頭痛。そして途中で途切れた国王の言葉。

「何なんだ・・・言葉が・・・。」

それはまるで、その言葉が世界から拒絶された言葉のように。

まだきしむ頭を押さえながら立ち上がると、すでにそこに人はいなくなっていた。

「どうなってるんだ・・・。」

ふらふらになりながら周りを見渡す。

すると、体がシロヤの意思とは関係なく動き始めた。

「な・・・何なんだ・・・。」

シロヤはずっと歩き続けていた。勝手に動き続けるシロヤの体は、いつの間にか城を出て砂漠を歩いていた。

ふらふらになりながら砂漠を歩いていると、次第に空の色が変わっていることに気がついた。

「何だ・・・何がどうなっているんだ・・・。」

灰色に染まっていく空は、まるで不吉なことを呼び込むかのよう

に暗い。そんな空を見上げながら、シロヤはひたすら歩き続けた。そしてたどり着いたのは、城の入り口の反対方向の場所だった。

「あれは・・・国王とさっきの・・・。」

さらにシロヤは、空に何かが浮いているのに気づいた。

「あれは・・・人だ・・・！」

国王と金髪の兵団長が身構えて見上げる空の先に、灰色に染まった空を抱くかのように人が浮いていた。そしてその傍らにいたのは・・・。

「シアン様・・・だけ・・・？」

浮いている人を見上げているのは、シアンだけだった。

「国王様！」

「やはり現れたか・・・バスナダの悪魔め・・・。」

吐き捨てるように国王が言つと、浮いている人が左手を振り上げた。

「マズイ！シアン様！お逃げください！」

左手が振り下ろされると、国王達の前の地面がまっ平たつに割れた。

「このままでは・・・バスナダが奴らの手に落ちてしまう・・・！」

「国王様・・・。」

金髪の兵団長が一步前に出た。

「・・・これからは、若い世代の人達が時代を紡がなければなりません・・・。」

「・・・そうだな・・・。」

同じく国王も一步前に出ると、二人は横に並びあつた。

「国王様と共に戦えたこと・・・この国のために死ねること・・・誇りに思います。」

「・・・私もだよ。」

二人は浮いている人に向かって手をかざすと、二人の手のひらが光を放ち始めた。

「シアン！」

国王がシアンに向けて叫んだ。その表情は笑っていた。

「・・・強く生きる。」

それだけ言うと、手のひらの光がさらに強くなって、バスナダを包み込んだ。

真っ白な光が全てを包み込み、そこでシロヤの見ていた風景は完全に消えてしまった。

ただ残ったのは、上下左右のわからない真っ白な空間だけだった。

「これが・・・シアン様の記憶なのか・・・。」

そう呟いた瞬間、シロヤの頭に声が響いた。

「願わくは・・・シアンが最高の幸せの中に生きていけますように・・・。」

「！」

その時、まるでガラスが割れるように真っ白な空間が砕けていき、真っ黒な空間が姿を見せた。

「うわあああ！！！！」

真っ白な空間が砕け散った時、真っ黒な空間にシロヤは落ちていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

真っ黒な空間に落ち続けるシロヤは、視界の先に何かを捕らえた。それは光輝く何かであり、シロヤはそれに向かってまっすぐと落ちていつていた。

「あれは・・・。」

やがてその何かにたどり着くと、シロヤはその何かの上に着地した。

「ここは・・・？」

真っ暗な空間の中にそびえ立つ塔のような何かの上に、シロヤは立っていた。

そのシロヤの視線の先に、シロヤは再び何かを捕らえた。ゆつくりと近づいていくと、それが鮮明に見えてくる。

「！！！！」

鮮明に見えた何かは、中空を見るかのように立ち尽くしていた。そしてそれは、シロヤが一番会いたいと強く願った人物だった。

シロヤは自分の持つ最高の大きさを叫んだ。

「シアン様！！！！！！」

シロヤはシアンに向かって駆け出した。早くシアンに会って話をしたかった。謝りたかった。そして、告白をしたかった。

しかし・・・。

「・・・。」

「シアン・・・様・・・？」

そこにいたシアンは、まるで脱け殻のようになったシアン、シロヤが見ていたシアンとは違うシアンの姿だった。

何も考えず、何もせず、ただそこにいるだけの存在となったシアン。

「シアン様・・・シアン様！」

呼びかけても反応しない。シロヤに絶望が襲った。

「そんな・・・シアン様・・・。」

涙を流すシロヤの先に、立ち尽くすシアンの影が伸びていた。

「！」

その時、影がシロヤの目の前で起き上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8669x/>

Sand Land Story ～砂に埋もれし戦士の記憶～

2012年1月10日02時54分発行